

Fate/Saver The fate～
アルトリアが好きな少
年が起こす人理修復の
旅～

空色 輝羅李

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公（オリジナルの方から）： 太公望 紅蓮（たいこうぼう グレン）

魔術師である。どういった系統の魔術家系かは作品を追つていただけたらと。

主人公（原作の方から）： 藤丸 立香（ふじまる りつか）

一般人である。設定は原作に忠実： ではないところが多いかも： すまない。

魔術師である紅蓮は、とある目的のため根源を目指す。ただしそれはあくまで過程で
あり、最終目標が根源ではない。

が、普段は学生の身分であるため、あまり魔術だけにかまけることはない。
しかして、とある要因によりとある施設でとあるサーヴァントと契約を交わす。
その未来の行方は――

第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
297	268	241	212	185	160	139	112	86	55	1

目次

第1話

トレイス・オン
同調開始。

基本骨子…：解明。

構成材質…：解明。

基本骨子…：変更。

構成材質…：補強。

トレイス・オフ
全工程、完了。

刀を握り、俺はこの詠唱を行つた。もちろん結果は成功である。12年前まではこんなことも失敗ばかりだつたが、それは練習を始めたばかりだつたから仕方ないと言つておこう。

が、日常生活において、魔術なんて必要ないので、こんなことを練習しても意味がない。ならどうしてこんなことをしているのか。それは…目の前の骸骨らを、隣の可憐な騎士王と共に蹴散らしながら思いだそう――

2015年の7月。夏休みが始まり出す下旬。蝉のけたたましい鳴き声が響き渡り、

夏だ夏だと騒ぎ出す。

俺は高校生活において二回目の夏休みを友達と遊びまくつて満喫する……なんてことはない。

家業があるので、それをなんとかしなければならない。俺の青春よ……グツバイ……

「紅蓮、話がある」

「……親父が話がある、というときは、話す内容が決まっている。

「……刻印の様子はどうだ。」

魔術刻印の事である。この家は魔術を扱う家系なのだ。どんな魔術かはおいおい説明することにしよう。

取り敢えず、痛い魔眼ではない。腕の魔術回路に埋め込むタイプの刻印である。

その刻印は、しつかり馴染んでいた。俺が小学生の内には。

「大丈夫だつて何回言つたらわかるんだよ……」

「すまない。私の場合は痛く感じるときが長くてな。」

……この家の魔術刻印は、その人の持つ属性に寄つては拒否反応や拒絶反応が起ころ。それが親父にはあつたようだ。

「さて、本題に入ろうか。」

「本題？」

一枚のビラを渡される。紛うことなきビラである。
⋮?
⋮?

なんだこれは？魔術的処理が施されている。このくらいならほとんどの魔術師が読み解くことができる。

目に少し魔力を流し、ビラの正体を看破する。

驚いた。これを送つてきた人物の名前こそ空飛なものだが、不思議な人物に48人目に認められたそうだ。

⋮? なんの？

「それはわからん。しかしだ。紅蓮が魔術の世界の誰かに認められたのには違いない。私は誇らしいよ。」

それはいい。それはいいのだが、詳細が場所と日時しかない。
俺は一体、何の48人目なんだ！

⋮? 親父。」

「なんだ？」

「今日中に、いや、明日までに、俺を鍛え直してくれないか。」

親父は驚きながらも、含んだ笑みを浮かべた。

そして、魔術工房へ案内された。

「……で、必要なことは全てできる。紅蓮。お前にはまだ教えていない魔術を、教える。」

「そしてまた、含み笑いをした。

：俺は今、足がすくみ出した。

一日目。まずは魔術回路の効率を上げる修練だ。

魔術回路。マジックサークルと呼ぶ者もいる。体に流れる、魔力を流すための場所。これがなければ魔術は扱えない。本数は人によるそうだが：

そして、俺は当然ながら親父よりはある。あるのはいいが、増え方が異常だった。

親父が持つ魔術回路が300本程度に対し、俺は800本程度ある。正直いつて有り得ないし有りすぎなのだ。

そりやあ多いに越したことはない。しかし、全てに魔力を通すのが大変になる……と思う。実際、体内にある魔力だけで魔術回路全ての同時活性化をさせたことはまだない。

「今日教えるのは……いや。今回教えるのは、投影だ。」

なんだそれ？するわけないだろ？

とても効率の悪い魔術だ。10本作つても2、3本分の意味しかなさないような剣を

作るんだから。

「…紅蓮が五歳くらいのころ、聖杯戦争なるものがあつた。」

それは知つていて。2004年の冬木市という場所で行われた、壊れた戦争だ。
その地にいたわけでは無かつたが、千里眼…のようなもので見ていた。

だが、その聖杯戦争の全てを見たわけではない。その時に見ていたのはあくまで聖杯の様子と、あるサーヴァントだ。だからあまり戦争の内容については知らない。

「その戦争の中で、投影を行つた人物がいる。」

!?

どういうことだ…！

「驚くのも無理はない。私も相当驚いたからね。そして、その時の人物は、一度死んでいる。詳細は省くが、生きてもらっている。」

だめだ。脳が処理することを放棄してしまつた。

「更に、その人物は私の知り合いの養子だつたんだ。その知り合いは、人付き合いを断つてしまつたからある時期から連絡は途絶えていた。だが、その養子の子とは今も昔も思い出話をしていたんだ。だから、コンタクトが取れていた。」

コンタクトが取れている？ちゃんとつけろよな…つてまでまでまで。親父はコンタクトなんて使わないんだから、そのコンタクトでは無いな。うん。

「おいで、士郎君。」

： 士郎と呼ばれた人物が、部屋に入る。

見た目や顔立ちの幼さが高校生の様に見えるが、雰囲気は物凄く落ち着いていた。るのはいるだろうが、ここまで落ち着いた高校生というのは全くいないだろう。

「あー‥： 本当に詳細の説明はいいんですね、壮馬さん。」

「ああ。 多分説明とか考えると辻褄が合わなくなるしな。」

それは作者の問だ‥： 作者って誰だ？

「えつと‥： 士郎さん、でいいんですよね？」

「士郎でいいぞ。こんな見た目のやつに敬語とかも、なんか嫌だろ？」

笑いながら、お調子者のような、自嘲するような、そんな笑い方で言う。

「わかつた。士郎、投影ができるのは、本当なのか‥？」

「ああ。 残念ながらな。」

残念？ 言葉の意図はわからないが、本人は嫌なことなのかも知れないな。

しかし投影か‥： 本当にできるのだろうか。

「心配することはない、俺の魔術回路は紅蓮より少ないからな。」

「それは‥： 神経が魔術回路になつてゐるからだろ？」

士郎は目を丸くした。そして片手を頭に置き、参つたな。と言う。

「それなりの魔術師つてのは、皆できるのか?」

「紅蓮には視えてるんだろう。私にはわからない。」

別に特殊なことは何もしていない。ただ、生まれつき目が少し普通ではなかつた。それだけである。

少し説明すると、左目の視神経の一部が魔術回路と置き換わつた状態でできた。なので、魔力を流せば魔眼に似た性能が扱える。例えば今みたいに人の魔術回路を見たりとか。物凄く集中すれば、少しだけ過去と未来が見れる。ほんの少しだけ。現代だつたらちょっと集中すれば見たいところを見れる。

「… なあ士郎。」

「なんだ?」

「神経と魔術回路、同じにした方がやりやすいだろうか。」

士郎は少しだけ笑う。だがすぐに、それはやめた方がいいと言つた。

「たぶん、痛いだろうからな。」

「それは問題ない。未来が少し先しか見えなかつたし、見えた未来には、俺が人理を担つていた。」

親父まで目を丸めなくていい。

二人とも、俺を疑いはしなかつた。一般的に言えば奇天烈であり得ないことを言つた

が、俺の今までの行いのお陰か信じて貰えてるようだ。

「そんな大役を貰うんだから多少の痛み… 少しかゆいだけだ。」

「お前… そうか。壮馬さんが、紅蓮が俺に似てるって言つてたの。何となくわかつたよ。」

「性格だけでは無いのがまた怖いがね。」

二人が何を言つているのか分からなかつたが、今は作業に入るとしよう。

幸いここは、親父の魔術工房だ。恩恵が完全に受けられる訳では無いが、何も無いよりはマシである。

魔術回路の増減はとてもなく痛いらしい。だがそれより、神経に直接繋げることの方があいたそうと言うのは… 言わない方がいいかもな。

そういうわけで。まずは右手の親指に通つている神経と、その近くにある魔術回路の接続をしよう。

意識を深く。深海の如く暗き場所で、音も聞こえない。静かで、どんどん沈んでいく。そんな感覚が始まり出せば、俺が集中できてる証拠だ。体を真っ直ぐにし、背骨に1本、2本と、刀を刺すイメージをする。800を過ぎる頃には、体にある魔術回路総ての感覚を同期や接続、切斷ができる。

その中で、一本を抜き取り、自分の神経も抜き取る。他の線の感覚を一旦閉ざす。

手に取った2本は、言わばS極同士かN極同士。なのでくつつけるのは、力ずくだ。

「ぐ……あ……あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ……！」

「紅蓮……！」

近づこうとしている親父を士郎が制した。

感謝を伝えられないのがもどかしいが、そんな場合ではない。

物凄く痛い。この作業を右手全ての指同時にやらなくて良かつたと思う。まじで。失神して数時間を割くよりも1本ずつやって数分かかるくらいが丁度いい。

「はあ、はあ……はあ……」

「お疲れ様。少し水でも飲むか？」

「士郎。気遣いとかもろもろ感謝したいが、それは全部終わってからだ。早く次をしないと……」

やれやれと言いたげな仕草だな……まあいい、次の指だ。

二十分ほどたつただろうか。2本目からは意識をすぐにしづめたりできたので、痛み

以外の時間の消耗がなかつた。親父は物凄く汗をかきながらも、
「お前の成長には毎日驚かされるよ。」

と誉めてくれた。士郎いわく、このような魔術師の家庭は珍しいらしい。厳しいのが普通と言うのも笑い者だが。

「さて、士郎。教えて貰つてもいいだろうか。投影のやり方を。」

「勿論だ。だが、ひとつ教えておかなければならぬことがある。それは……」

「それは？」

驚いた。まさか固有結界を利用して投影……いや、それはもはや取り出していると言える。

溜め込んだ武器を貯蔵し、それを必要なときに取り出す。そんな説明をされた方が納得がいく。

「さて、それを踏まえてだ。」

「待つた。俺はそんな高等な……協会の人間でも一握りしか扱えない魔術なんて、でき

ないぞ……

「話は最後まで聞け……それを踏まえてだ。お前に渡したいものがある。」

渡したいもの……？

その言葉を発したのち、彼は投影（固有結界なのかもしれないもの）を行つた。目の当たりにして分かるが、投影とは違うのもわかる。

物質にはランクと言えば分かりやすいものがある。ダイヤモンドは普通に言えば物凄くランクが高いのに対し、石は物凄く低い。ランクの高いものほど作るのは難しいだろう。だが士郎。彼は高ランクの物を今、作り出している……？

「いや、作つてない。入れておいたものを取り出しているんだ。」

「取り出すつて……あの……それ、アヴァアロンだよな？」

よく知つてるな、と軽く言われても困る。

アヴァアロン。アーサー王物語において、妖精が住んでたりする理想郷とされる場所だ。そこには未だに生きているグラントく……高名な魔法使いがいるらしい。

そして。エクスカリバーという聖剣を収める鞘にもまた、その名前が使われている。

どうしてそれを、士郎が？その鞘は行方不明なんじや……

「あー……いろいろあつたんだ。そのいろいろの中で、まあ……俺が生き延びるためにこいつが必要だつて判断した爺さんがいて、それで……な？」

な？じゃない。そんな説明じや、どうしてそこに存在するのかの説明ができるいい。

しかし、長くなりそうなので、詳しくはまた聞くことにしよう。

はあ・：なるほど。第5次聖杯戦争のセイバーのマスターが誰かわかつた。はあ・：
(うらやましい!!)

だつてあのセイバーだぞ！最有力候補であるセイバークラスのサーヴァントなんだ
ぞ！しかも第4、第5のセイバーは連続であるアーサー王だつたらしいじゃないか！！
ああ羨ましい！

でもまあ、それは置いておこう。俺は聖杯に興味が無いので、英靈なるものに出会え
ることも、無いのだから。

「でだ。このアヴァロンがあれば、恐らくお前の役に立つ。」
役に立つ。具体的に？

「…さあ？やつてみなきやわかんないだろ？」
なんですか！！！

「ほら、お前ならこれくらい、体内に取り込めるだろ？」

「簡単にそんな奇跡を渡すな！できるけど！」

：：重い。質量的なのはもちろんだが、この鞘に込められた、沢山の思いが、俺に重

みを感じさせる。

これを、こんなものを俺が持つてていいのだろうか？：

「： 紅蓮。お前の未来視では、お前が人理を担つていたんだろう？」

「俺の他にも複数いたが、まあ。」

「なら、お前にも英雄の加護があつてもいいんじゃないかな？」

： そう言うものだろうか。そもそも、この作成者や、持ち主がどう思うのだろうか。

「俺の知つてる持ち主は、お前みたいなやつの手にある方が喜ぶと思うぞ？」

「： 流石元マスター、妬けるな。」

「なんですか。」

： よし。

ト
レ
ー
ス
・
オ
ン

同
調
開
始

——そこには、王を待ちわびた人の声が溢れていた。
剣を引き抜けば王になれる、そんなことが謳われていた。

基本骨子： 解明

——人の少女が現れる。

後ろにはローブの人物が隠れている。

構成材質： 解明

剣を手にした彼女は王になつたようだ。民衆の声がそう言つてゐる。湖では新しい剣も貰つたようだ。

基本骨子： 変更

ここはカムランだろうか。沢山の死体が山になつてゐるのか、山に死体があるのか。

彼女は剣を地に刺し、両膝をついた。

構成材質： 入力

剣を湖に返すよう、騎士に伝えた。何度かそのやりとりは繰り返されてい

る。

やつと返還されたのか、彼女は今にも息を引き取りそうだ。

そんな彼女が、不思議なことを言う。

「見ていたのは知つています。もう少しこちらへ来ていただけますか？」

どういうことだ？俺はこの鞘の記憶を見せられているのでは？

： 言われた通り俺は、彼女へ近づく。

「ああ、やつと顔を見せてくれましたね。名も知らぬ貴方よ。」

： どうして俺を認識している？」

「わかりません。しかし、こうして話しているのも何かの縁。少しだけ伝えたいことが
あるので、聞いてもらえますか？」

俺は頷く。

「そう固くならないでください。貴方の持つていてる鞄について話をさせて頂きたいので
す。」

「… やつぱり、俺が持つてたら、嫌だよな…」

「そうではありません。貴方の様な人が持つていてくれるのでしたら、私は安心です。」

「そうなのか… それならよかつた。大切にするよ。」

「そうしてください、彼女は笑顔でそういう。」

「そういえば、見ていたのは知ってる、そう言われたな。」

「あの、どうして俺が見ていたのを… ?」

「貴方は聖杯戦争の時に私を見ていましたよね？」

「… 対魔力？それで感知されたか…」

「その時の貴方はまだ幼かつたのでしょう。それでも、見守っているのが伝わりました。
恐らく聖杯のこと。」

「… それで…」

「あ、それを責めているのではありません。感謝をしたかったので。」

「… そうか。」

「はい。それともうひとつ、本題です。」

本題・： 少し真面目な顔になつたので、俺も姿勢を正す。

「アヴァロンは、私の魔力が無くては十全には機能しません。それでも、私がいなくともある程度は守つてくれるでしょう。」

「なるほど。俺の魔力でもある程度使えるなら、嬉しいな。」

「いえ、貴方はある程度、では無いようですね。鞘が言っていますから。」

鞘と喋るのかいアーサー・： いや、アルトリア？

「何となくそんな気がするというだけです。」

真面目な顔が崩れ、ほほえむ彼女が可愛くて仕方ない。

： なるほど。ああ、なるほどの一言冥利に尽きる。

「アルトリア。ありがとうございます。君の生き様は俺に、感動を与えた。」

「それはよかつた。誰かの目標になれたのなら、ええ。私が生きた意味もあつたのでしよう。」

「あつた。俺が保証する。」

「ありがとうございます。さて、そろそろお別れのようです。あとひとつ伝えることがあつたのですが… それはそれ。後でよろしくお願ひしますね、グレン。」

そこで、俺の意識は途絶える。

トレー・ス・オフ
同調・完了

あとでよろしくってなんだ!?

：アヴァロンが俺の体内に入った。感覚としては意識できないが、うん。

魔力を流せば反応がしつかり返ってくるし、さつき指の神経に変えた魔術回路の他に魔術回路が増えてるし（ざつと4000程。恐らくアヴァロンの期待通りの増え方では無いだろう）。ふむ。そういうことがアルトリア。

俺はアヴァロンに認められた。：

ふむ。ならば確かに、士郎の言う投影ができなくも無いだろう。

「士郎。いつも投影する時のやり方を教えてくれ。」

「こりや驚いた。まだ一日も経っていないのに。：」

「同感だ。まさか私の息子が、こうも才能を見せるとは。私は魔術師としての繁栄は望んでいなかつたのだがな。」

俺は今、固有結界を作り出すことは未だに不可能である。だが、士郎より多くの武器種を、高ランクで投影（士郎の投影と同じもので言うなら）することができるようになつた。

： 奇しくも士郎と同じ、剣の類いになるとさうにランクは高くなる。

「ここまでつてなると、俺が教えることは無いんだがな…」

「なら、結界を見せてくれないか？」

： いいぜ。それがお前の眼にどう映つたか、見せてくれよ？」

期待に応えれる気がしないな。

「じゃ、見てろよ。

I am the bone of my sword.
Steel is my body, and fire is my blood.

d.

I have created over a thousand blades.
Unaware of loss.
Nor aware of gain.
With stood pain to create weapons.
Waiting for one, arrival

I have no regrets.

This is the only path.

My whole life was "unlimited blade world
ks."

：これが、心象風景の具現化、固有結界か。

多分見た目とかは士郎特有なのだが、この世界を作り出す方法は大部分の魔術師は同じだろう。ふむ。

「すげえ：色々な伝説や歴史、物語の武器が、たくさんある。」

「俺的には、ここにいるのは少しむず痒いけどな。」

士郎は、2本の剣を投影し、構えた。

「紅蓮。お前も何か投影しろ。」

「：良いだろう。負ける気はしないがな。」

： first action set

投影開始——一つの刀をイメージする

創造理念、解説——物には必ず、作成者の想いがある。

二 工 程 登 錄

基本骨子、想定——恐らくこうであらう形を作る

三 工 程 登 錄

third actions set
a ll light clear infinity
break mount and sever sea
神劍草那芸之太刀

構成完了是、即無也

| できた。

「山を断ち、海を別つ、理を開く神器」

「…へえ。いきなり宝具級と来たか。本当にすごいな…」

やはり刀。剣の種類の中でも最も握りやすく振りやすい。

神劍草那芸之太刀。三種の神器の一つと言う。

八岐大蛇の中から出てきた神剣、それが草那芸剣であつた。

その剣を実際に見たわけではないが、伝承が強く残る日本であるがゆえ。

「簡単だよな。」

「なんでさ… よし、紅蓮、行くぞ。」

士郎が走る。地面を一蹴りするたびに速度が増す。

… これで身体強化をしていないってんだから、怖いよな…

さて、落ち着いて思考をするにはいさきか余裕が無い。なので、一度剣を腰に構え、居合いの体制を取る。

まだ。

まだ。

まだ。

今！

金属のぶつかる音が響く。とても甲高く、耳に少し残る。
士郎は2本の剣を使う。そしてぶつかっているのは一本…
右か！

剣を強く屈ぎ払い、後ろへ退く。

「いい判断だ。だが少し、戦闘に慣れていないな。」

「当たり前だ。本格的な対人戦闘はこれが初めてなんだ。」

士郎は構わず剣を振るつてくる。それを着実に弾き返す。

剣戟が加速する。魔術の使用された気配はない。まだついていける。

「少し息があがつてきたんじゃないかな？」

「お前こそ。切つ先がバラバラだぞ、そんな二刀流では武藏も弱く思われてしまう。」

刀身が違うだろと怒られてしまつた。

速度はまだ衰えない。どころか加速し続けている。

そろそろ次にどこに来るかを予想しなければ対応できなくくらいだ。

：これが、マスターというやつの実力なのか。

ならば。

魔術師としての実力を見せよう。

〔magic card over open
魔術刻印、複数展開。〕

「魔術刻印…！完璧な移植は終わつていないはずだが、果たしてどれほどの効果があるのか…！」

魔力を流せば、登録されている魔術を式を知らなくても使用できる。それが魔術刻印。それを、擬似的に複数に分けることで、同じ魔術や違う魔術を同時に扱える。

ひとまず、一個は強化。それ以外は先ほど登録した、投影。

「英雄王や俺と同じことを、見てもないのに出来るなんて。全く、どこまでも似てるんだな。」

そして士郎は、終わりにしようと言った。

固有結界がほどける。

「二人とも遅かつたね。お茶でもどうだい？」

まつたくこの親父というのは。

「お茶より紅茶がいい。」

「そういうと思って、紅蓮の分はアッサムのミルクティーにしておいたよ。」

わかつてゐじやないか！

現在、7／29。時刻は10：00。
ビラに書かれていた時間までは時間があるので、まだ少しゆつくりしておこう。

「紅蓮、話がある。」

「魔術刻印は痛くないって昨日も」

「そうじやない。最後の刻印をしようと思つてな。」

：なるほど。固有結界の中で士郎が言つていた未完成という言葉の辻褄があつた。

俺の中では勝手に、全ての移植が終わつたものだと思つていたのにな。
ま、まだまだ未熟者だつたつて訳だ。

「親父なりの考えがあつたんだろう？ならそれでいい。ありがとう。」

「まあ一応な。では、魔術刻印の移植を始めようと思う。士郎くん。」

：

なぜここで士郎が呼ばれる？

「：一応、太公望家の刻印の一部を、預かつっていたのさ。」

分家でもないのに？大分とヤバイことしてゐるやんたら…：

「はあ…とにかく頼むよ。俺は魔術を研究しなきやならないからな。」

「ああ、わかつてるさ。」

俺は右手を差し出す。士郎は頷きながら、右手を返し、握手を交わす。
魔力を互いに流し、流れを調和させる。

士郎の魔力は中々薄いな…だが、芯の強さだけは伝わつてくる。どんなことがあつても、挫けてはいけないという使命感のようなものだろうか。

「行くぞ、紅蓮。」

「来い、士郎。」

俺の魔術刻印に、別の刻印が書き足されていくのがわかる。正直いって少し痛い。
でも、魔力の流れを少しでも乱してしまえばこの儀式は二度とできなくなる。落ち着け俺。

： 魔力の中にある、記憶の残滓というべきか。士郎の想いが伝わる。

なるほど、再三（と言うほどでは無いが）親父や士郎が、士郎と俺が似ていると言う意味がわかつた。

自己犠牲を前提で行動する。自分の命は勘定に入っていない。

他にも幾つかはあるだろうが、読み取るのも難しいくらい魔力が薄くて、これくらいしかわからなかつた。

： 終わったか。

「ああ、終わりだ。お疲れ、紅蓮。」

汗だくなのにそんなこと言うのかお前：

魔術刻印を確認する。

変化はパツと見ではわからないが、よく見ると真ん中の模様が少し丸くなつた。

「実はね、私の代でこの刻印は成長の限界だつたのだが、私が無理矢理書き足せるようにした。」

： えつと。

「できるわけないだろんなこと!?」

「それができたから言つているんだろ!!」

全く親父と言う人間は。

： 尊敬しちまうな。

「ちなみに式は刻印の中にあるから、読みたかつたら読みなさい。」

わーいもーなにもかんがえないぞー

現在時刻は14:20。余裕は随分とある。ビラに書かれていた時刻は21:00であり、場所は家の前。

： スマホに7件程の通知があつた。全部一人から。
一応幼なじみの立香である。

『元気か!』

から始まり

『今日献血行つてくる!』

で終わっている。

何時に行くのかはまあ書かれてないわけだが、まだ行つていないという可能性にかけて、電話をかけてみる。

： あ、出た。」

『出た、じやない！なんで既読もつけないの！』

「あー悪い悪い。ちょっと用事があつてな。」

『まー別に良いけどね。あ、そうそう！今度海いかない？』

「良いよ、行こう。お前の水着、どうせまた買いに行くんだろう？」

『ふつふつふ。選ばせてやろう！』

「はいはい。で？献血は何時から？」

『20：00！』

なんだその時間。そんな時間に献血なんてありえないだろうが。

まあいいか…

「今から暇か？」

『え？なんで？』

「…なんとなく。」

電話越しでもわかる。めちゃくちやにやついてるぞこいつ。

別に立香が好きと言うわけではない…と思う。

しかしあ、少しでも長く一緒にいたいとは思つてゐる。少なくとも、立香にとつて
大切で、立香を大切にしてくれる人ができるまでは。

「暇じゃないならいい。」

『暇！ちょー暇！』

「ならこい。お前に似た見た目のやつがいるから。」

電話を切り、士郎に目をやると、どうした？と首を傾げる。

「きっと話があうやつが来るから気にするな。」

「なんでさ……」

あいつが家に来るまで、10分とない。

部屋片付けるか……

「手伝つてやろうか？」

「期待してるような本はないぞ。」

「ほんとに似てる！もしかして親戚……？」

「俺の知ってるなかで藤丸ってのは聞いたことないな……
残念、と言いながら肩をすぼめる。そこまで残念そうにしなくても……
耳打ちで士郎が、こちら側の人間か？と聞く。

「あー……士郎。紹介しよう。こいつは藤丸立香。その辺の高校生だ。」

「その辺とはなんだ！」

士郎は何かがわかつたように

「二人は付き合つてるんだな。」

「なにも分かつてねえじやねえか！」

「えへへ実は……」

「体をくねらせながら嘘をつくな！」

つたく。

さて、立香を呼んだのには理由がある。

「俺しばらく日本にいないから、これ持つとけ。」

「なんで？水着は!?」

「理由は……留学だよ。前も言つたら。水着なんて遠くからでも一緒に選べるさ。」

ものすごく悲しそうな顔をされる。どうもその顔には弱つてしまふ。

悲しませることが目的ではないのだが……

「……わかった。私はそれを止められないから、応援するね。」
「……ある意味では留学だけど。

魔術師として、嘘をつくのには慣れてるつもりだつたけど。
俺としては、まだだめみたいだ。

「あー……よし。じゃあ今から探しに行けばいいんじやないか?」
「士郎……！」

おい、甘やかすな。立香はすぐ調子に乗るぞ。

「行こうよ、紅蓮！」

「……わかつたよ……」

複合商業施設。いわゆるショッピングモール。

その中で水着を扱う店は、今は多い。

冬場に中華まんがよく売れるだろ？そういうことだ。
「わー！これも可愛い…！こっちも！」

「俺はどれ着ても立香がかわいいと思うけどな…」
「えつあそのえつと…」

なぜそこで反応に困る。傷つくぞ。

長年こいつといて思うのは、はしゃぐときとかめつちや可愛い。
普通に笑顔で、普通に楽しそうに。それが可愛い。

「そこまで可愛いって連呼しないで！」

「自然に心読むな！」

「あ、これとこれどっちが可愛い？」

「強いていうなら……お前。」

「ああああああ！」

「なんですか……」

「もう……なんでこういうやり取りはできるのに……」

「できるのに？」

「……なんでもない。よし、どっちにしようかなー。」

「なら、右手に持つてるやつにしたら？」

「なんだこいつめっちゃにやつくじやねえか。」

少し命の危機を感じた気がするので、店の外で待つことにした。

たしか献血の場所はここだったよな……ならその時間までここで暇つぶしでもしようか。

「お待たせー。」

「ああ、三年ほど待たされた。」

「なんでえ!?」

19：30。今は建物の屋上にいる。星が見たいとか急に言い出すものだから、仕方なく。

「：ねえ紅蓮。」

「なんだ？ロマンチックだからって場酔いすんなよ。」

「そんなんじやない、と頬を膨らませて言う。」

「私さ、思うんだ。今まで紅蓮と一緒にいて、とっても楽しかったなって。」

「そりゃ俺もだぞ。」

「でさ。これからもずっと一緒に入るつて勝手に思つてたけど、でも。紅蓮は遠くに行っちゃう。」

そんなの一時的なものだろう。留学が本来の目的でないにしても、いつか帰つてくれる。

「それがいつになるかわからないじやん。」

「それはそうだけど……」

「……あのね紅蓮。私、紅蓮のこと好きだよ。」

困つた。俺はいまだに、立香に対して好意を抱いているのかすらわからないというのに。

悪い気はもちろんしない。だが、この曖昧な気持ちのままというのは……よくない。

「立香、返事は待つてもらえるだろうか。」

「……うん、いいよ。」

しばらく時間が過ぎる。沈黙のさなか、立香は若干顔を俺の方に傾けたりする。

身長は立香よりちょっと高いくらいだから、顔が近い。

星を眺める。天体に関する魔術は、この時代では難しい。天体に関する神秘が減つてしまつたから。

それでも、少しくらい無理をすれば。

「……あ、流れ星が……！」

「ああ。流星群みたいだな。」

「綺麗！」

「…うん。」

「じゃ、行つてくるね！」
そう言つて、献血の車
く。

途中で振り返り、両手を口元へもつてい

「やめろばか!!!!」

まつたくもづて恥ずかしがる素振りも見せずに、また向かつていく。
でも俺は、それを見送り終わつても動けない。嬉しさからではなく、怪しさからだ。
あの車から、魔術的な雰囲気を感じ取れる。悪意でないのがわかるが、立香にどう影響するのか……！

立香が降りてこずに、しばらく時がたつ。そして車にかかつている魔術が発動された。

「気配遮断：隠蔽とかが得意なのか……？」

さらに、車が動き出す。それも、ありえない速度で。

油断した。もう少しはやめに動けばよかつたものを……！

とりあえず魔術回路を開き、刻印にある身体強化を全開で使用する。そしてさらに

「時空遮断」

完全な遮断は無理だけど、それでも周りの時間を遅らせることができる。

だというのにだ。

車に追いつけない。

「複数人で魔術を行使しているのか……！」

そろそろ足がもつれそうなんだがな……

ならばこれしかあるまい。人にすら打つたことのない、最高火力で……！

「結界」と剥がれ落ちる外道ども……！拘束ガンドウ！！」

車が止まる。煙で周りが見えないので、どうなつたかわからない。

……気配が多すぎる。あの車の中にこれだけの人数が収容できるとは思えない。認識に干渉する魔術か。それとも空間か。あるいは両方か。

「……俺とやろうってのか……？」

「そのつもりはない。貴重な人材を君に減らされてはこちらとしてはとても困る。」

……えつ何こいつ。魔力薄すぎ……

「私の名前は…………だ。」

「……ビラのやつか。どうして立香を？」

「我々が必要としている適性があつたからだ。」

適正……魔術関連でなく？

「魔術は正直使えなくてもいい。ただ、君と彼女はその適性が100%あつたんだ。今

まで見つからなかつたのが不思議なくらい。」

「……はあ。とりあえず立香と話をさせろ。」

「ある程度の説明はした。君が必要と思うことを話しなさい。」

なんだそれ。魔術は隠匿すべきものじゃないのか……？

「あれ、紅蓮。なんでいるの？」

「立香。話がある。」

「紅蓮が魔術師だつてこと？」

おい何しれつと教えてるんだ。

「ほんとんど話さなくていいみたいだな。」

「そうだね……ねえ紅蓮。私は大丈夫だよ。」

事体がわかつていないので……？

今こいつは一般人で、周りには魔術師ばかりで、信用に値するかもわからない連中に囲まれているというのに、大丈夫？

「……そうだな。俺がついてる。おい――――――、早く車を出せ。」

「言われなくとも、もう目的地に着いた。」

「なんでき！！！」

「土郎君、今日はありがとう。」

「いやいや、こちらこそ感謝しますよ。面白い経験でした。」

青年は謙遜でなく、本心から述べる。

実際、自分の周りで魔術を扱うものは、媒体を通した魔術師が多く、自信の体だけで魔術を行使する人間を見るのが、どれほど面白く感じるか。

さらには魔術にも似たものを、少し教えただけで自分と同程度まで成長する人物を前に、心躍らないわけがない。

「あーそうだ、これ。凛ちゃんに。こつちは桜ちゃんに。これは君に。」

「どれも価値しか無いんですけど。」

「私からすればそこまでの価値がないものだよ。宝石魔術なんて紅蓮に教えてもらつたくらいだし。料理は妻や紅蓮にしてもらつていたし。レーヴァテインなんてたまたま拾つたけど、聖杯戦争に参加する予定も意思もないから必要ないし。」

「なんですか……」

まあとにかくもうつてくれと、壯年らしき人物は言う。

青年は肩をすくめながら

「ありがとう、壯馬さん。きつと喜ぶし、嬉しいよ。」

「ああ。そう言わると嬉しいね。さて、今日は風がなんだか嫌な感じだ、気を付けて
帰つてくれ。」

「はい。ではまた。」

「我々は先にこの中に入ろう。君たちは少ししてから入りなさい。そして我々のことば
誰にも言うな。」

「全部言わないは無理だけどな。」

さて。この怪しさマックスな建物に入らざるを得ない状況だが、
「なんだかワクワクするね！」

立香がこんな調子なので、調子がくるつてしまふ。
とりあえず入ろう。

塩基配列 ヒトゲノムと確認

靈器属性 善性・中立と確認

なんだこれは。自動アナウンスのようだが。

ようこそ、人類の未来を語る資料館へ。

ここは人理継続保障機関 カルデア。

カルデア：初めて聞くが、星見の人だろうか。

指紋認証 声帯認証 遺伝子認証 クリア。

完了しませんでした。

魔術回路の測定……エラー。一名測定不能。

そんなこと言われても困るけど……

しかし、登録名と一致します。

貴方を靈長類の一員であることを認めます。
いやあんたに認められても。

はじめまして。

あなた方は本日最後の来館者です。

どうぞ、善き時間をお過ごしください。

まじか。なんで最後つてわかるんだろう……

……申し訳ございません。

入館手続き完了まであと180秒必要です。

その間、模擬戦闘をお楽しみください。

まで、模擬戦闘だと？

ほとんどどどろか、まつたく戦闘経験が無いんだけど?
あーだめだ。意識が途切れる……

強制イベントか!!!

「強制イベントか!!!」

「同じこと言わなくていいって…」

てか敵ってゴーレムか…

「ね、ねえ紅蓮。何か人が二人いる!」

「この魔力…嘘だ、ありえない。」

サーヴァントを観測したことがあるからこそわかる。この魔力…そして、立香の手の甲には赤い紋章。

「間違いない、英靈だ。」

「な、なにそれ?」

使い魔のようなものであると説明をする。

そして、命令をすれば攻撃をすることも。

「とりあえず…えっと、攻撃して!」

すると英靈が、無言でゴーレムを刺したり、撃つている。

「ランサーとアーチャーか!」

「てことは、槍兵と弓兵?」

なるほど。模擬戦闘というのが何かわかつた。そして俺にできない理由はなぜか。

俺は自身で戦闘できるからか……

「あ、倒した……？」

「そのようだな。立香、もう少し具体的に指示できるようになろうな……」
意識は、またも途絶えた。

胸の上に、柔らかい物体が載っているのがわかる。

それから、何かを呼ぶ声も聞こえる。

「…………あの。朝でも夜でもありませんから、起きてください、先輩。」

俺はこんな眼鏡美少女の後輩を持つた覚えはないが。

「かわいい!!!!」

「開口一番にそれかよ！」

「え、あの……」

あーあ……戸惑ってるじやねえか……

「すまない。困らせる気はなかつた。俺は紅蓮。太公望紅蓮だ。君は？」
 「いきなり難しい質問なので、返答に困ります。名乗るほどのものではない……とか？」

不思議ちゃんのかなこのこ。真顔でそんなこと言われても……

「いえ、名前はあります。あるのですがその……印象的な自己紹介ができないというか……」

「そこまで考えなくていい。自己紹介といつても、相手に自分の名前が伝えれたら。それと趣味とかを教えてくれるとどんな人間かがわかるかもね。」

「なるほど。それはともかく。」

ともかくつて。教えてくれないのかよ……

コホン。と咳ばらいを少女はする。

「質問よろしいでしようか、先輩。お休みのようでしたが、通路で眠る理由がちょっと。」「それは説明させてくれ。初めての靈子ダイブだつたんだ。意識が混濁しても仕方ないだろう？」

少女は目を丸くする。そこまで驚くことだろうか……

後から現れた緑の男性が、俺たちが一般枠での募集であること教えてくれた。
 彼女の名前……マシユというのも。

また、五分後に説明会があることも。

「ではその説明会の場所へ急ぎましよう。」

：：この緑の人間の発する魔力は、いや。魔力だけでなく雰囲気も。怪しさがすぎる。まあ、魔術師なんてのは胡散臭いやつらの集まりだよな。：

マシユからすると、俺と立香は敵対する理由がないらしい。それくらい弱そつてことだろうかとも思つたが、人らしい人だといわれると、納得せざるを得ない。

管制室とやらに案内される。席は最前列が空いてるようなので座らせてもらつた。

：：所長という人物は少し怒りを表情にしていたが、ああ。時間に集まらなかつたのが悪い。

じやない、時間を間違えて運んだあいつらが悪い。

「：：時間通りと行きませんでしたが――

――説明会が終わる。立香は途中で一度睡眠をとりかけていたがまあ仕方ない。俺も眠かつた。

そのおかげでファーストオーダーからは外れたらしいけど。

自分の部屋へ行くよう促されたので、ややフラついた足取りの立香を支えながら移動する。

マシユは

「先輩からの頼まれごとでしたら、昼食を奢るくらいならしますとも。」
と言われたが、奢られる気はない。でも頼れる後輩がいるのもいいものだな。

自分の部屋なのにノックをするのはおかしいかもしれないが、中に人の気配がするので一応。

「はーい、入つてまー————つて、うえええええええ!? 誰だ君は!?

「お前こそ誰だ、ここは一応俺の部屋になるらしいが。」

あー新しいマスターか… 僕の休憩所が… なんて小声でブツブツ言っている。こ
いつは誰だ。見たところものすごく一般人だが。

「なるほど、ドクターロマン。いい響きだな。」「
でしょ! 僕も気に入ってるんだ。」

少し話をしていたら、アナウンスでレフの声がした。
どうやらお呼ばれしているようだなこのさぼり魔め。

「今医務室だろ？そこからなら二分で到達できる筈だ。」

「…ここからじゃどうあつても五分かかるぞ…」

そしてアトラスの話やカルデアスや、こここの施設についての話と、時間があれば医務室によつてケーキでもどうだと無駄話をして、足を出そうとしたその時。

「なんだ？明かりが消えるなんて、何が――――」

アナウンスか。中央発電所、中央管制室で火災…

「…紅蓮！」

「ああ！」

「あつ君たち！そつちは第二ゲートじゃ…ええい道を戻る時間も惜しい！閉鎖する前に必ず戻るんだぞ！」

ロマンの声は聞くが無視する。

マシユが心配だ。急がなければ。

…立夏に対して魔術関連を隠す必要がなくなつてしまつた。それは悲しいことだが、今はアドバンテージだ。

「身体強化…！」

「えつちよつはやい！」

「お前はあとから追いついてこい！」

管制室にたどり着く。ひどい状況だ。炎は吹き荒れ、瓦礫があふれている。

「マシユ！大丈夫か……！」

「先……ぱ……なんで……」

「しゃべるな！」

アナウンスが何か言つてたりするが、興味ない。立夏が追いついた。マシユに治癒魔術を施す。

「もう……手遅れです……」

「あきらめるな。せめて最後まで一緒にいさせてくれよ後輩……！」

「そうだよ！大丈夫、紅蓮は魔術師だから！」

アナウンスはまだしゃべつている。レイシフトがどうのマスターがどうの。

「……先輩……手を、握つてもらつて、いいですか？」

うなずき、手を取る。

意識がゆがむのを、一日で何度経験すればいいんだ!!!!

「なんでこんなに頭ぐにやぐにやしなきや……！」

「マスター、起きてください…… 起きましたね、殺さなくて済みました。」

「なんでき……」

「マスター。周囲に敵性エネミーを発見しました、応戦します！」

……俺の手に、令呪……？

「マスター、指示を！」

……いや、必要ない。

トレイス・オン
投影

なんで何も考えずに投影したら……これが……

「マスター……いえ、ともに出ます！」

周囲の骸骨をひとしきり倒し終わり、所長を回収……合流した。そして、靈脈なるところへ行くよう動き出す。

⋮ ⋮
⋮ ここはかつての冬木らしい。実際の歴史と違う、特異点のだが。

「⋮ ポイントに到着しました。」

「わかった。ならマシユ、その盾を刺してくれ。」

「あなたどうして、その方法を！」

ロマンは通信越し?にマリーを止める。

そしてマシユが盾を刺した。

「召唤の詠唱で、いいんだよな。」

「⋮ ええそうよ。」

まさか俺が、英霊に出会える日がくるとは。ずっと無いと思っていたが、何が起ころる

かわからぬ、人生つてのは。

： 覚えていてよかつたかもな。

「素に銀と鉄。 磁に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。

四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。

閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する。

——告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理ことわりに従うならば応えよ。
誓いを此処ここに。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての惡を敷しく者。

汝 三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

そこには、可憐な見覚えのある騎士がいた。

「——サーヴァント、セイバー。召喚に従い参上した。問おう、あなたが私のマスターか。」

「：アルトリア：！？」

「：ええ、ほら、その。よろしくといったではないですか。」

第2話

英靈召喚。

このカルデアという施設では、「システムフェイト」という仕組みで、聖杯戦争の英靈召喚を参考に再現している……らしい。

それは不可能だと思われる。なぜなら、英靈というのを召喚するのに、人が呼ぶのはいささか無理がある。それこそ聖杯の力がなければ。

しかし実際、こうして英靈が召喚できているのだ。疑問でしかないが、目にしてしまつては信じるしかないのである。

「…………」サーヴァント、セイバー。召喚に従い参上した。問おう、あなたが私のマスターか。」

「……アルトリア……!?」

「……ええ、ほら、その。よろしくといったではないですか。」

俺は今、猜疑心に包まれている。狐につままれたのか？
どちらでもいい。俺の前に起きた出来事を処理しよう。

「マシユ。君のマスターは誰だ？アルトリアは俺の英靈として。」

「え…と、私のマスターは、お二人共です。アルトリアさんのマスターは、確かに先輩のようです。」

一人の英靈に対し、二人のマスター？

モニター越しでロマニが焦っているのがわかる。

擬似英靈（デミサーザヴァントと呼ぶべきか）ゆえか？それとも、この盾が関係するのか？

： そういうえばマシユは、元になつてている英靈が誰か、未だわからないといつていたな。

ギヤラハツド。彼は円卓の騎士であり、偉大なる騎士とも呼ばれる人物。

そんな彼が、マシユといたときにも真名を告げることはなかつた。

ならば、俺はそんな騎士の意思を引き継がせてもらうしかない。

「マシユ、次はどこへ行くんだ？」

「はい。この地にある聖杯を回収しに行きます。」

聖杯だつて…？

いや、確かにそれならわかる。そうでなければ辻褄が合わない。

特異点というものを形成するのに、人であれ動物であれなんであれ、それほどのことをするには魔力が足りない。歴史と違う歴史。そんなものを維持するには、聖杯がある

方が楽である。

⋮ 神でなければ。

⋮ グレン。私はここに覚えがあります。」

「そりや冬木だからな。」

⋮ なるほど。でしたら回収すべき聖杯の場所は、あそこしかありませんね。」

俺はうなずき、ロマニに魔力反応の強い場所はどこか一応確認をとる。

「ところでグレン、質問があります。」

なんだ、と尋ね返す。

「あなたが手に持っているその剣、もしかして⋮と思いまして。」

⋮ 無意識に投影したらこれが出てきた。」

なるほど、とアルトリアはいう。

⋮ 少し嬉しそうなのが、何とも言えないが。

聖杯のあるポイントまで歩く道中、多くの骸骨がさまよう。その連中は容赦なく俺たちを襲つてくるが、マシユやアルトリアのおかげで難を逃れてる。
が。

「流石に数が多い！ 態勢を立て直そう、撤退だ！」

「言われなくてもわかっています！ 一般人が口出ししないで！」

一般人、ねえ。

オルガマリー、アニムスファイア。

時計塔では名門のアニムスファイア家の娘である。彼女はたしかに魔力も魔術回路も十分に備わっているが、問題がある。

レイシフトと呼ばれるものに適正が必要であるなら、彼女にそれが備わっているのか。

彼女は最初から、コフインに搭乗していなかつた。それは適正がないからだろう。ではなぜ、彼女がここにいる？

⋮ それはまた今度考えよう。

「いくら名門といえど、人を馬鹿にする態度は変わらないようだね、お姉さん。」

「あなた、その態度⋮！あの時の子供だというの！」

さて、橋の辺りまで戻つてきてしまつたし、少し休憩できるだろうから、柄にもなく昔話をしよう⋮：いつもしてるか。

昔、魔眼オークションを開催するための列車、魔眼蒐集列車レール・ツエッペリンといふものに、親父に乗せてもらつたことがある。

まあ当時は五歳だったので、あまり見せてもらえたりはしなかつた。

そんなとき、煙草を吸つている人物と、フードを被つた人物から、面白い話が聞こえ

た。

そして、これは面白い人物を送り込めば、もつと面白くなるだろうと思つてしまつた。

： 我ながらおかしなことを思つていていた。

そして面白い人物を探すために列車内を歩き回り、見つけてしまつた。

「お姉さん、ちよつといいかな？」

「あら、お子様が私に何か用かしら。」

「ロードがいるよ、その人たちについていけば、きつといいことがある。」

彼女は怪訝そうに顔をしかめる。

「そう。それはいいことを聞いたわ。私はオルガマリー。オルガマリー・アースミレイ
ト・アニムスファイア。」
「うん、知つてるよ。僕は紅蓮。太公望紅蓮だ。」

日本人、ね。なんて含みのあることを言われる。

その時点で俺は、言語が違つていても意思疎通を行える魔術を習得していたので、会話に苦はなかつた。

「いいわ、あなたのことは覚えといてあげる。」

それくらいの会話だったが、確かに俺はオルガマリーと出会っていた。人生というの
は奇怪なものだ。

たつた一つの、二度とないと思つていた出会いは、途端に訪れる。

「まつたく。あなたのせいで飛んだ目にありました。が、たしかにちょっと楽しかった
ので、許します。」

「だから、その上から目線はもうよせ。」

キツつとにらみつける。その態度に俺は少しビビるが、表情に出してはいけない。

「魔術師としての質は、俺の方が上だ。」

「…なんですか？」

「聞こえなかつたか？」

彼女の周りが怒り一色となる。

「いいえはつきりと聞きました。今ここで、その差を教えてもらいましょう。」

「どうやら高名な魔術師は、血氣盛んのようだな。」

「マスター、待つてください。」

マシユが止める。なんだよいいところだつたのに…と、顔を動かすと、何かいる。

「…ねえ紅蓮、何あれ…？」

どういうことだ。まさかこの地では、特異点でありながらも聖杯戦争を行つたという

のか!?

「マスター、指示を!」

「え!私、そんなの…」

「立香、マシユのサポートは任せた。」

立香は、少しうろたえるが、覚悟を決めたのか、マシユに指示を出す。

とはいえ相手はサーヴァント。てこずるのもわかる。俺もまた、行かなければ。
「… グレン、あなたはマスターという人間の役割を理解していますか?」

アルトリアが止める。

役割? そんなもの俺には関係ない。これは戦争ではなく、戦闘だ。

ならば、戦えるなら前に出ても問題はない。

「… あなたもまた、無茶をする人のようだ。」

「あいにくと、似てるつてのは聞き飽きたんだがね…」

骸骨を連れたアサシンのサーヴァントを前に俺は、剣を握りなおし、詠唱をする。

「同調開始。

基本骨子… 解明。

構成材質… 解明。

基本骨子… 変更。

構成材質^ト_レ^ス_オ^フ：補強。
全工程^ト_レ^ス_オ^フ完了。

「強化魔術!? そんな効率の悪い魔術を使うなんて…」

今強化したのは自分の腕だ。でなければ、きっとできないだろうから。
「束ねるは星の息吹、輝ける命の奔流。受けるが良い。約束された勝利の剣!^{エクスカバ}」

「… どういう… こと… ?」

目の前の大地は少し削れている。
オルガマリーはわなわなしている。
ロマニはそんな馬鹿など連呼している。

立香は何が起きたのか理解できていない。

マシユは状況を整理しようと頑張っている。

アルトリアはあきれている。

「… どういうことですか紅蓮。すぐに説明しなさい。」

『そ、そうだ！普通の人間にこんな芸当、できるわけがない！』

全く、と言いたいところだが、説明は必要かもしれない。

「俺は投影ができる。実際の投影ではなく、物質を完全に生み出すくらいの。」

「… 紅蓮、あなた…！」

「マスター、それでは宝具を行使できる理由になりません。」

どう説明するものか…：

「グレンの持つ魔術回路と刻印がそうさせたというだけです。」

「あなた、一般人じやなかつたの⁈」

「そこからかよ… あの列車にいたということはそういうことだらうが…：

さて、俺の魔術回路といつていたが、そこは俺にはわからない。

そもそも宝具の行使ができた理由が俺にはわからないんだがな。

「まとまた魔力の放出に長けてる、といえばわかりやすいでしょか。」

『なるほど、それなら… 多少の説明がつく。』

モニター越しのロマニは納得したようだ。

目の前の淑女はまだお気に召さない様子。

「ありえない、私が投影をしたとしても、そんな高ランクの物質を作り出すことができないのに。」

「…まあ。そういうこともあるわな。」

とまあそんな会話をしていて、気づいたことは二つ。

一つ、俺が倒したサーヴアントは二体。片方のクラスはわからなかつたがまあいい。もう一つは、もう一人サーヴアントがいる。

「お？ ばれちまつたか。」

「隠す気がないようだな。その杖は初めてみるが、風貌からしてケルトの…」

言いかけて、止められる。

自分で名乗らせてくれ、というような目をしているので、手でどうぞと言う。

「本当ならランサーとして召喚されたかつたんだがな、俺はクー・フーリンだ。よろしくな。」

「… そうか、わかつたぞ。」

「何がわかつたの？」

この荒れようからして、聖杯戦争があつたと思える。それならサーヴアントが複数体

いても、何の違和感もない。

この地で行われた聖杯戦争は、途中で聖杯の泥に侵されている。
さつきのサーヴァントの様子がおかしかったのはそのせいだ。

「よくわかつてゐるじゃねえか坊主。 そうだ、ここで行われた聖杯戦争は、途中で全く別の
ものになつた。 そして今残つてゐるサーヴァントは、キヤスターの俺と、セイバーだ。」

「……おかしい。他のクラスのやつらは、セイバー一人にやられたというのか？」
「……そうか、泥か。」

聖杯の泥に侵されたセイバーのサーヴァントが、その泥の力を使つて他のサーヴアン
トを倒したんだ。

「……光の御子よ、その場へ連れて行つていただけますか？」

「……ああいいぜ。あの時の決着はお預けのようだがな。」

まつたく駄犬がよお……

そういうえば、マシユの宝具をまだ見ていいないな。

「マシユ、デミサーヴァントでも宝具は使えるのか？」

「はい、そのはずです。ですが私には、使用できません。」

それはおかしいと口をはさむ英靈が一人。

「英靈と宝具は同じもんなんだから。」

魔力が詰まっているとも言つた。

なるほど、まだ出力がうまくできないということか。

少しヒントを上げるとしよう。

「マシユ。その盾は何のためにある?」

「それは… 守るため、ですか?」

「俺に聞くな。マシユがその盾をどう使うかが重要なんだよ。

マシユはしばらく黙り込む。立香は少し俺をにらむが、俺の考えをくみ取ったのか、

頷いていた。

「私は… 私は、皆さんを守るためにこの盾を使いたいです。」

「うん、いい答えだ。では早速、立香を守れ。」

どういうことですかと聞かれるころにはもう、俺のサーヴァントは準備をしていた。
わかつてゐるじゃないか… !

「… グレン、指示を。」

「ああ。アルトリア、撃て。」

「待つてください! こんなのです… ! おかしいです!」

「東ねるは星の息吹」

「マシユ、盾をどれ。」

「できません！今すぐやめてください！」

「輝ける命の奔流。」

「紅蓮！今すぐやめさせて！いくらなんでもこれは…荒療治すぎる！」

「受けるが良い――」

「（私が守らないと――私はマスターに守れと指示をされたのに――今守れなくてどうするという意図できつと――私が…私が使わないと――」

「エクス――！」

「ああ、ああああああ――！」

「――カリバ――！」

「あ…私…道具を、展開できた…んですか？」

「ああ、そうみたいだな。」

「…紅蓮？」

立香がものすごく怒っている。まあそりやそうだよな… もしかしたら死んでいたかもしれないんだから。

「… まったく、紅蓮はいつも勝手に信用して、勝手に心配する。」

「面白い…」

「手に持つてるの。私には何かわからないけど、盾?」

盾ではない。今俺が手に持つてるのはアヴァアロンである。

エクスカリバーを絶対的な攻め手というなら、アヴァアロンは絶対的な守り手。ただし矛盾は起きない。エクスカリバーの攻撃よりも、アヴァアロンの防御の方が強いのは確定だ。

万が一マシユが宝具を展開できなければ、俺が守っていたが、その心配は無用だつたようだ。

「私は驚いてなんて…」

『オルガマリー、それは無茶があるよ。魔力計が振り切れているんだ、現実だよ。』

まあそれは置いておこう。早く聖杯を探しに行かなくては。

俺たちはとりあえず、セイバーのいるという洞窟？で骸骨を相手にしながら進んでいた。

「おいクー、こここのセイバーはやはり、彼女なのか。」

「： ああそうだ。お前らの時代で最も有名な剣を持った、かの騎士王。それがセイバーのサーヴァントだ。」

困った。この洞窟のような場所で、セイバーの宝具を受ければ、天井が崩れかねない。

⋮ その前に倒すか、和解するか。

「言つてる傍から信奉者の登場だ。」

「⋮ ふん、信奉者になつた覚えはないがね。」

来客を追い返す程度の仕事はする、そういうつた。

この声、聴いた覚えがある。だが、そんなはずはない。似てゐるだけ、だよな。
英靈になるにはそれ相応の伝承なんかがいる。それこそこの時代において英靈が増えるなんてのは、ありえないに等しい。だというのに、一般人が英靈になつたというのか⋮ ?

「⋮ 士郎、なのか？」

「⋮ 私はその名前を知らない、それでいい。」

⋮ そうかよ。

「剣を持て、士郎。お前は俺が越える。」

「まつたく、その名前はとても不快だ、二度と呼べないようしてくれよ！」
干将莫邪。

その剣を投影した時点で、確定なんだがな⋮ !

二振りの剣筋は、すでに覚えがある。さらに同一人物であれば、動きが同じになつてもおかしくはない。

とはいえた。相手は英靈、俺は人間。普通ならば勝ち目がない。

存在の前提条件が違う。だから人が英靈に勝てるなんてこと、無いに等しい。でも。

等しいけど、それは ほとんど nealy だ。

勝とうと思えば、勝てる。

「遅い！」

「くつ： やはり人間の時のお前より強いな！」

たわけ、と英靈は言う。

「紅蓮、無茶なことはよしなさい！ 所長命令です！」

「聞けないな、その命令。」

『グレン君、所長の言うとおりだ！ 生身の人間が挑んでいい相手じゃない！』

『ロマニ： いや、ドクターロマン。俺はロマンを追い求めるぞ。』

「そんなに私相手に手加減してていいのか？」

刹那。

眼前に迫るは二本の剣。

だめだ、よけられな——

——グレン！

——い、そう思つたが、アルトリアが弾く。
アルトリアの目には怒りが浮かぶ。

「… グレン、無茶をしないでほしい。」

「… ゲメン。」

「ふん、しょせんその程度か。」

言わせておけばいい。

「ああすまない、すぐに終わらせよう。」

「させない。」

宝具を使わせてはいけない。きっとそれは、俺だけが連れていかれる。そうなれば俺
は…

何も守れないまま終わる。それは嫌だ。

魔術刻印に魔力を回す。

先日行つた投影、そのうちの一つを、もう一度…

「トレイス、オン
投影開始」

「… それは！」

「あ、ああ…」

『ちよ。オルガマリー!?』

神剣草那芸之太刀。これを俺は左手に持つ。

エクスカリバーはいまだ右手にある。

両方刀身が長いが、振れないこともない。やつててよかつた強化魔術。

「：お遊びはこれまでだ、行くぞ——！」

「かかってこい、贋作者!!」

その時世界は、歪み出す。

俺も知つてゐる世界に、上書きされていく。

固有境界。

「くそ、やられた！」

「遅かったようだな。」

この場にいるのはこの英靈と、俺。

「やるしかないようだな：：！」

「やつとその気になつたか？」

最初からずつとその気だ：：！

〔魔術刻印、展開〕

「：ほう？」

〔術式解読、

open the formula

始——」

複数の魔術を同時に行使するように登録しておいてよかつた……！

「……ふ、やはり君は、私より強かつたんだな。」

「……みたいだな。」

「私があの時、やめにしたのは。」

——怖かつたんだ。

「…………」
グレン！ 大丈夫ですか！」

アルトリアが駆け寄る。

俺は普通に立っているし、外傷もないと思う。だからその質問は間違っている気もするが……

「ああ、大丈夫だよアルトリア、心配させてすまない。」

と言つたら、アルトリアは泣きながら抱きしめる。

⋮
⋮

抱きしめられているのか、俺は？

「よかつた、本当に良かつた。あなたに何かあれば私は⋮⋮

⋮⋮ アルトリア、大丈夫だから、早く進もう。」

ぬくもりが冷める。周りからの視線のせいでないことを信じよう。

「あー⋮⋮ そろそろ大聖杯だ。準備はいいか？」

「俺はいいが、そうだな⋮⋮」

立香は初めての経験が立て続けに起きているから、疲れているはずだ。

⋮⋮ 初めてなのは俺も変わらないが、魔術師において精神は強くなくては意味がない。未熟と言え、俺はまだ余裕がある。

⋮⋮ そうだな。

「オルガマリーの持つているドラゴンフルーツでも食べようか。」

「なんつでわかつたのかしら？」

「おいおい、驚きすぎじゃないのか？声が裏返つてるじゃないか。」

やばいこれ以上挑発したら泣き出しそう⋮⋮ この特異点に来てからずっと煽つてた

からまあ少しあはいいようにしてやるか。

「あーほら、俺なんかより経験のあるあんたがちよつとうらやましかつたんだ、言い過ぎた。悪かつたよ。」

「…ふん、今度からは気を付けることね。」

⋮ 可愛いな。まさか俺が年上にこんなことを考えるとは思わなかつたが、うん。可愛い。

アルトリアがつねつてきているが、気にしてはいけないだろう。何せ逆側から立香もつねつてきているのだ、痛い。

一休みが終わり、大聖杯の前へ着く。

オルガマリーはそれをみて驚愕する。ロマニはそれを説明する。
AINTSBERN家により作られた聖杯、か。

親父の手記には書かれているのを見たことがあるが、実際の関わりは俺自身にはないので、実感はわかない。

「悪いな、おしゃべりはそこまでだ。奴さんに気づかれたぜ。」

——美しい。

思わず声が洩れる。

「マスター、下がつてください！」

「マシユ、気をつける。」

反転したアーサー王……別側面……オルタと呼ぶことにしよう。

オルタは、マシユの盾を見て、面白いといった。おそらく気づいているはずだ。本来の持ち主の影に。

「構えるがいい、名も知れぬ娘。その守りが真実か、この剣で確かめてやろう！」

……アルトリアと戦うなんて、誰が想像しただろうか。俺は想像していた。

アルトリアは剣を握る。オルタもまた、剣を握る。

「皆さん、ここは私に任せていますか。」

「……もちろん。誰も止めやしない。何かあれば俺も出る。」

「ええ、頼りにしています、グレン。」

マシユは盾を強く構える。

オルタは笑う。

——ほう、白き私か。面白い。」

「何が可笑しいのです！」

剣の激しくぶつかり合う音、飛び散る火花。

仮面（鎧？）を付けたオルタの表情は、詳しく述べられないがそれでも……どこか悲しそうである。

「……」
鉄の打ち合いはしばらく続く。宝具の使用は、お互い何処か躊躇つているように見えた。

「……そろそろ、終わりにしましょう。」

「ああ、そうだな。」

「――令呪を持つて命ずる。待て。」

「つつ！グレン！何を考えて……！」

俺はアルトリアに近づく。正確にはオルタに、だ。

彼女は強者の余裕ゆえか、剣を構えず、ただ俺の歩みを待つ。

「なあ、オルタ。」

「……なんだ、私の臣下にでも下るのか？」

「なれるものならなりたいがね。」

「そんなことはとりあえずおいておこう。」

「俺に力を貸してくれないか？」

「… ほう？」

オルタは少し、興味ありげに言う。

： この先、きっといくつか特異点という場所に行くことになるだろう。その先で、いくら英靈を召還できると言つても、限度があるはずだ。
ならば。

「俺と一緒に、世界を守ってくれないか？」

「… ふつ、面白い。この私に、そのような話を持ちかけるなど。」

そこまで笑わなくとも良くない？傷付いちやうぞ？」

「いいだろう。私もそろそろ腕比べに飽きてきたところだ。ああ、そうだな。お前のいるかるであで私を呼んでみろ。気が向けば出向いてやるさ。」

え、まじ？いいの？それで…

あ、退去の光が…

「ちよつ、こんなどこで強制帰還かよ!?」

駄犬は黙つてなさい？

「… 盾の娘よ。その盾を、せいぜい間違った使い方はするなよ？」

「えつ、あつ。はい、もちろんです！」

そして、二人のサーヴァントは退去する。

一人の英靈は、^{グランドオーダー}冠位指定という言葉を残していった。

これが何をするのかは、このいかにも苛立たせる魔力の正体が教えてくれるだろう。「まさか君たちがここまでするとはね。48人目と49人目はまったく、見込みのない子供だからと善意で見逃してあげた私の失態だよ。まさか片方が、あの太公望家の魔術師だったとはね。」

まさか俺の親父の知り合いか……？

マシュやロマニ、オルガマリーといった面々はレフを見て驚く。

レフ・ライノール。

近未来観測レンズ「シバ」の開発者であり、天才的な技術力を持つている。つまり、こいつがいなければ未来の保証はできなかつた。

「ロマニ……」そうか。まったく、すぐに管制室に来てほしいといったのに、命令を聞かなかつたんだな。ああ。どいつもこいつも統制のとれないクズばかりで、吐き気がとまらないな。

なるほど。レフという人物はどうしようもない人物のようだ。

「人間というのはどうして、定められた運命からずれたがるんだい？」
「それたいんじやない。元から定められていないんだから。」

ではシバの存在はどうなる?と言われる。正直シバについて詳しいわけでもないし、歴史の修正、というのも専門外だ。

だが一つ、確かなことがある。定められた運命というのは、過去の産物だ。これから起ころる事象は、俺たちが決める事であつて、シバは未来の存在を保証するだけの観測装置だ。

だから彼は、間違つている。
が。

「よかつた、あなたがいなくなつたら私、この先どうやつてカルデアを守ればいいのかわからなかつた!」

オルガマリー……君は……

「レフから離れろ! 今度こそ完全に消失してしまうぞ!」
すでに死んでいる。

二人はやりとりを続ける。

オルガマリーは、ずいぶんとレフに、ご執心のようだ。

「——その中でもつとも予想外なのは、爆弾を真下に置いておいたにも関わらず、生きていることだよ、オルガ。」

「——え? レ、レフ?」

…… 残留思念を、トリスメギストスが、転移させた？
確かに、つじつまは、あう。

なぜなら、オルガマリーにマスター適正も、レイシフト適正も、無いことを確認した。ロマニに念話で聞いておいた。

つまり。肉体を失つたことによつて、望んでいたレイシフト適正を手に入れたんだ。世界は、最もつらい真実を、彼女に教えてしまつたんだ。

「君には何もできないよ。」

1

なんだ、これ……

すごい重圧だ。身動きがまるで取れない。マシユもアルトリアも、辛うじて立つのがやつと。

対魔力を持つてもダメなのか……！

レフは今、カルデアの様子を見せて いるようだ。

カルデアスが、赤い。それを、最後まで自分のせいだとわからせる。いや、思わせるために、誘導している。

○ 残留思念が、カルデアスに、吸収されている、のか
○ !?

「やめろレフ！せめて、せめて肉体に戻してからでも…！」

「フ、私にはそれが、わからないな。死というものに変わりはない。ならば、彼女にとつて大事なこの、カルデアスに燃やされた方が――幸せだろう？」

歪んでいる…

今の顔も、性格も、すべて歪んでいる。こんなの、人がすることじゃない…！
「やだ、やめて、いやいやいやいやいやいやいやいや…！だつてまだ、何もしていない！
生まれてからずっと、ただの一度も、誰にも認めてもらえなかつたのに――！」

もう、間に合わない。

こいつに近づけば、俺も同じ目にあわされる。

「所長…！」

「マスター、待つてください！」

マシユが止める。流石、デミサーヴァントだな…

「改めて自己紹介をしようか。私はレフ・ライノール・フラウロス。」

貴様たち人類を処理するために遣わされた、2015年担当者だ。

その言葉を聞き、戦慄が走る。

フラウロス、だと？

魔神… 72人いる、魔神。過去、現在、未来すべての質問に答えてくれる…：嘘つ

きの悪魔。

ああ、その権能を生かして、シバを完成させたのか。

ロマニに対し、この時点で人類は滅んでいるといった。

それに対し、2016年が見えないことが関係あるのかを訪ねている。

「関係ではない。もう終わつてしまつたという事実だ。」

⋮
真no doubt 実。

つまりだ。未来が消失したのではない。焼却された。

「カルデアスが深紅に染まつた時点でな。」

今カルデアは、カルデアスの磁場で守られているらしい。

すでに、カルデアの周辺以外の意味消失が始まつていたんだ。

「外部と連絡がとれないのは通信の故障ではなく、そもそも受け取る相手が消え去つて
いたのですね。」

空間が、隔離されている状態だつたのか。カルデアという組織は。

「これは、人類史による人類史の否定だ。お前たちは進化の行き止まりで衰退するので
も、異種族との交戦の末に滅びるのではない。」

——跡形もなく燃え尽くるのさ！

特異点の崩壊は、止められない。

レイシフトが間に合わない、そう聞こえた。

「黙つてくれdoctor（黙つてくださいドクター）。怒りで冷静さを欠きそうだ。」
マシユと被るのは意外だが、それは今どうでもいい。
せめて、立香とマシユだけでも。アルトリアを失うのは悲しいが、英靈である以上ま
た立香とかマシユとかが呼べる。マシユも立香も、生きた人間だ。ならば帰らせなけれ
ば……！」

……フォウ？ 君は……なるほど。じゃあ少し力を借りることにしよう……！

「ロマニ！ 全力でサルベージするんだ。意味消失は、避ける！」

『Time is travel back。Time is acceleration。Time is stagnation。The time has come』
「時は遡行する。時は加速する。時は停滞する。時は来る。」
「これは……結界……！」

普通の結界だけどな……それでも、周りの時間から完全に遮断できる。あとは、カル
デアに託した――

第3話

俺は今、どこにいるのかわからない。

ただ暗い空間が目の前にあるというのは理解した。だが、やはりどこなのかわからぬい。

「……フ、哀れよな。己がどこに在るのかわからぬとは……ああ、だが。待て、しかして希望せよ。」

その台詞は確か……巖窟王……？

そうだな、彼が英靈としてその言葉をいうのは大いにあり得る。
その言葉の意味を、深くは知らないが。

「……別に俺は瀕死じやないけどな。」

「まあいいだろう？さて、本題だ。」

話題変えるの下手過ぎない？

……こちらから完全に姿を視認することはできない。モヤのようなもので隠れてい
る。

「これもまた宝具なのか……？」

「案ずるな。レイシフトとやらはすでに完了している。貴様は今、ひと夏の夢の狭間に
いるとでも思え。」

「ひと夏の夢、ね。」

これまでに起きた、人類史焼却も夢ならいいのに……

一応、親父が巻き込まれていてるので、悲しいという感情はある。もちろん親父だけ
じゃなく、ほかの友人についてもだ。

……それはいつたんおいておこう。この巖窟王様が何を言うのか、聞き逃してしまわ
ないようにな。

「わが共犯者よ、そろそろこの夢から覚めるだろう。ならばその前に、一つ伝えておい
てやる。」

いつの間に共犯者?

……まあ、そろそろ目覚めるだろうという感覚はもちろんあるので、早めにそれを聞
いておきたい。

「Je 我 思 p e n s e . D o n c 故 j e に s u i s 我 在 s o y e z 在 1 •」

「それは……確かに、哲学者の言葉だつたな。」

つまり、考えることをやめるな、ということだろうか。

私は考える、だからこそ、私は存在する……か。覚えておいて悪いことはないだろう。

なにせ彼の巖窟王が言うんだ、金運が上がればいいな…と思わないか？ そうか…
「ありがとう。そろそろ現実に戻らないとな。」

「クハハハハ！ せいぜいオレの期待を裏切るなよ、人類最強のマスターよ！」

…俺が最強？ははは、何の冗談だよ。

魔力の流れを感じるので、おそらく巖窟王と契約がされたのだろう。
契約つて一方的に結べるのか…いや、それも英靈という在り方の一つなのかもな。
…なんか、ほほえましい状況が目の前に広まっている。

小動物を愛する美女、か。

最高です。

「…いらっしゃら、いくら私が美女でも、鼻血を出しちゃあ…君の顔がもつたいなくなつてしまふよ。」

彼女はそつとティッシュを差し出してくれた。
手まで綺麗かよ。

彼女はレオナルド・ダ・ヴィンチと名乗った。

…ここまで俺を驚かせるかカルデアは。英靈召喚とはいうものの、とんだ傑物をも
召喚し得るのだな。

「私への評価は確かに妥当だが、それでも分野は限られるよ。でもそうだね…私は万
物に通じる天才だから、もつと褒めてもいいよ？」

英靈つてのは全員傲慢なのか？いや、アルトリアはそんな性格でもないし、全員がそ

うと断定するのは間違いだな。：

状況は整理する方がいいだろうし、いつたん今までのことを思い出そう。

まず、人理焼却。うん。整理しても意味がわからんな。

う一人については情報がないから、あとで誰かに聞くことにしよう。

次に英靈召喚。過去の三度にわたって実験がなされてきた。マシユとレオナルド、も

うして最後に、カルデアの定めた冠位指定完遂グランドオーダーという目標。

七つの場所に形成されたという特異点を全て解決し、人理を元通りにするというなんとも馬鹿げたことだ。

⋮ そもそも、俺なんかがそんな大役をもらつてよかつたのか？ 俺だけじやない。立香もだ。あいつにはいささか荷が重すぎる気もする。責任感の強いあいつにこんな重大なこと⋮ とても任せたくない。

ならせめて。俺が頑張らなくては。全責任は俺にある、くらいでいなければきつと⋮

「さて、グレン君。いろいろ思案する気持ちはわからなくもないが、一つ質問だ。」

「なんだ？ 天才の質問に答えれる自信はないが、俺に答えれることならなんでも答えさせてもらうさ。」

そんな大した質問ではないと笑いながら、沈み込むような瞳でこちらを見据える。

「君は何者か。それだけ答えてくれたらいいのさ。」

⋮
は？

哲学か何かか？俺は別にそこまで考察することや考えること自体に重きを置いたことがないから、そんな、自分とは一体何か、なんてわからない。

そんなことを考えていると、そうじやないと首を振る美女が一人。

「そもそも、なぜ私がこんな質問を君にしているのかっていうとね。おかしい点がいくつかあるんだけど⋮ 飛び切り不思議なのが、君のサーヴァント⋮ アルトリアがね。カルデアの魔力供給を受けていないのさ。」

それは何かの間違いだ。そもそも英霊の使役というのは、人ひとりの魔力では到底足りるわけがない。英霊というのは存在 자체が魔力だけで構成されているといつても過言ではないし、現界させるのにも当事者の魔力と使役者の魔力と世界の魔力がいるんだ。

そしてさらには、このカルデアという場所において、魔力供給がされるのは当然である。その証明はレオナルドの存在だ。

彼女のマスターはいない。しかし、特異点の冬木で出会ったクーフーリンのマスターはどうだと言われば、あれは世界の無意識の防衛機制で召喚されたものなのだから、世界がマスターだろう。

つまりだ、魔力の供給がなくては現界することができない英霊が、そこにいるという

のならば、要因を考える必要がある。

たとえばそう… 魔力の供給源がある、とな。

クーフーリンは世界に呼ばれ、世界が魔力の供給源であつた。なら、レオナルドは？ カルデアでカルデアに呼ばれカルデアが魔力供給を行う。そう考えるのが妥当だろう。

「まいつたな… 君の考察力は、探偵を彷彿させるね。ああ、君は間違つていない。確かに私は、カルデアからの魔力供給を受けている。でも、それは関係ないんだ。」

「待てつてば。俺だけが魔力供給を行つてるとでも言いたいのか？ そんなんあり得るわけがない。俺自身が魔力の少なさを知つているつていうのに…」

「でも、彼女は確かに君の魔力だけを頼りに現界している。」

… はあ！？

埒が明かないといわんばかりに、レオナルドは誰かを呼ぶ。ドアの前にもともといたのだろう、アルトリアが部屋に入ってきた。

そして俺に、告げる。

「マスター。あなたの魔力の核が、そうさせている。あなたの父が伝えなかつたことの一つだろう。」

「ま… 待てよアルトリア。確かに魔力を発生させる核はある。当然だ。だが…」

魔力の核が優秀なら、俺の魔術回路は、どうあれすべての活性化ができるはずだ。なのに今まで一度も開かれたことがない。それは一体……

：そういうことか。

「あなたの本能が無意識のうちに、押さえつけているのでしょうか。」

：まつたくもつて、訳が分からぬ。しかし、結果が見えているなら、原因はこう

推察するしかないのだろう。

「そしてあなたも、もうわかつてていることでしょう。魔力のつながりがどういうものか。」

そんな真面目にいいながら顔赤くしないでください騎士王様……多分思つてるものと違うから……

「さて、では最初にもどろう。」

「そういわれても知らないものは知らない。俺はただの太公望紅蓮、それだけだ。」

彼女は顔をしかめる。何かを思い出すかのようにうーんという唸り声も上げながら。まあいつか思い出すだろうと、彼女はけろつとした様子で笑う。

通常業務に戻るよ、そう言い残し、部屋を後にした。

：難題を残すんじやねえ天才め。

：アルトリア。俺は一体どうすればいいんだろうな。」

「そうですね……ひとまず魔法使いでも目指してみたらいいのでは？」
なんでき。

少し時が過ぎ、マシユと席を同じくして、食堂にいる。

マシユはココアを飲んでいる。季節的には突つ込みたくなるが、こここの外は極寒であり、季節感というものはどうも、一つの季節しか感じられない。

「マシユ、聞きたいことがある。」

「なんでしょうか、先輩。」

戦闘服では眼鏡をはずしていたのに、普通の服ではなぜ眼鏡を付けているんだ？

…あつぶね。意味がわからない事を聞くとこだつた…

「マシユは、魔力供給は誰から受け取っているんだ？」

「そうですね…今このところ感じ取れるのは、先輩の魔力、でしようか。」

言つてて気づいたのか、彼女は不思議そうに首をかしげる。

そして、俺と同じ疑問を抱いたのだろう。

なぜ俺の魔力しか供給されていないのかを考えている。

「… はあ。立香に聞いても多分、わからないだろうな。」

「そうだと思います。立香先輩は、魔術の世界とは無縁だつたと伺っていますので。」
もう誰に聞いても同じ結果な気がするし、そろそろあきらめることにしよう。

そして、もう一つ気になることがある。

「なあマシユ。召喚室はどこにある？」

そう尋ねると、マシユが案内してくれた。

閑話休題（というには最初に俺の目的を述べていなかつたので、続いての話題）の方
がいいかもしない。

少なくとも俺は、ほかに魔力の供給源がなくとも問題がない状態にあるようなので、
無理やりにでも英靈を召喚してみようと思う。契約は断られたらその時考えればいい
し、うん。物は試しだ。

召喚の式は… 必要ないのか。便利だな。触媒とかは… 近くにマシユの盾を（気持
ちとして）おいておこう。あとは… サークル？に魔力を流せばいいんだな。

「… よし。あとは… 念じるだけ！」

「それでいいんですか先輩！？」

召喚サークルとやらは、無駄にまぶしく光輝き、その光を失つたとき、一つの影が現

れる。

「…フ、こうも簡単に私を呼ぶか、マスター。」

どうやら、成功のようだ。

多少なりとも縁はあった。なら呼べてもおかしくはない。そう。

「よろしく頼むよ、オルタ。」

「ああ。いいだろう、貴様の魔力も、悪くはない。」

「さて、この調子で何人か呼んでみよう。俺と少しでもかかわりが、もしくはマシユの…円卓の盾に呼ばれる英靈が、来ないとも言い切れない。

もはや賭けだけど。

俺なんかに力を貸してくれる過去の英雄なんて、そういうわけないからな。

しばらく、召喚に時間を費やしていた。召喚が終わり現れる英靈に話をして、契約をしてもらえるかどうか確認をしてから契約を終わらせる。

誰一人として俺との契約を断る人物がいなかつた。それは嬉しいのだが、驚きが勝つてしまふのもまた俺という人間の性分だろう。

しかし驚くべきはそこではない。同じ英靈でも種類が違うのを同時に召喚し、現界させることができることだ。

アルトリアとアルトリアオルタ。この二人はまだわかる。別側面ということで、次元の違う存在と定義付けることができるから。それ以外の英靈が問題である。クーフーリン。お前オルタでもないのに槍と杖両方で召喚できるってなんだよ。

そこはそれ、置いておいて問題はない問題なので、放置しておこう。

そろそろ立香が何をして時間をつぶしているのかが気になるし、少し様子でも見に行こうと思う。

部屋のドアをノックし、返事がくるのを待つ。慌てた様子でドアまで駆け寄つてくるのがわかるくらいには足音がしている。

「はーい… つて紅蓮？ どうしたの？」

「いや、お前こそ慌ててどうしたんだよ。」

聞けば、この職員を待たせるのはよくないと思つたからちょっと焦つたそうだ。心がけはいいけど、もう少しうつくりでも…。

「さて、お前には基礎知識として、ある程度のことを教えていかないといけない。」

「勉強しろってこと？ やだなあ… 私全教科平均くらいだよ？」

などとほざくが、こいつはいつもテストの点数が高い。暗記科目では俺も負けることがあるくらいには成績がいい。つまりただの謙遜である。

実力のある人間の謙遜はあまり好まれないからやめた方がいいけど、まあそれも日本人というもののか。

「勉強じゃないけどさ、少しだけ魔術に関することを、予備知識として知つておく必要があると思うんだ。」

でなければこれから先、必ず知識が無くて困ることが増える。そのたびに一から説明をとなると、時間を無駄にとられるので、せめて二でも三でも知つておけば、多少の楽が期待できる。

そういうわけで必要なことを話していくと思うんだが……さてどうしたものか。
目の前にいるグランド女^{花の魔術師}好きくそ野郎が、代わりをしてくれそうだ。

：　まで。いや……待て待て待て待て。

「なんているんだグランドくそ野郎!?」

「はつはつは、すがすがしいくらいのひどい挨拶だね。そうとも、この僕こそが花の魔術師、マーリンさ。」

そんなのわかつてるわくそボケ。おいというかお前はまだ生きてるんだろうが。ならずつと果てで見てろよ……

「だつて、君は面白そうじゃないか。こんなに面白なことを間近で見ずにどうしろ
というんだい？」

それはいいとしてやろう。しかしだ。英霊召喚において絶対的な条件は一つある。
その時代にその英雄がおらず、死んでいることだ。

だというのに目の前の魔術師は、こともあるうかアヴァロンという場所で生きている
じやないか。なのに……なのに英霊として実体化？ ありえない。

「正確には単独顕現、というスキルなのだけれどね。それにほら、今は人理がないだろう

？」

：　無茶苦茶すぎるし、能天氣すぎる気もするが、考えるのも疲れた。

「立香に変なことしたり教えたりするなよ。本体の命…容赦しないから。」

おー怖い怖いと、まったく怖くなさそうにするあたりが、マーリンそのものだ。全く、なんでこうも変なことが起きるかねカルデアよ。

なら今のうちに、もう一つの用事でも終わらすことにしてよう。

医務室に行くと、少し慌てた様子で書類やらデータやらを整理している、そそつかしい人物がいた。

「おや、紅蓮君？すまない、少ししたらお茶を淹れるから、椅子に掛けて待つてくれないかな。」

「ああ。そんなに慌てなくていいよ。ゆっくりでいいからさ。」

ありがとうと俺に一瞥をくれると、すぐに書類整理にとりかかつた。

医務室というわりにこの部屋は、ごちゃついている場所が多い。医務室というより、レンタル倉庫の中にいるといわれるほうがしつくりくる。

「はあ…これはこのファイルに纏めるのでいいのか？」

「え、手伝わなくていいよ？これは僕の仕事だ。」

「二人でする方が早く終わるだろ？」

不服そうな表情を浮かべるが、一理あるという感じに、手伝うことを許可してくれた。

さつきと終わら差ないと。聞きたいことをこの書類たちのなかに埋もれさせてしまわないようにな。

二人でした甲斐あつてか、数分後にはベッドがしつかり見えるほど片付いた。
：ベッドに物置いちやあだめでしょ：：

「手伝つてくれてありがとう！これ、紅茶だけどよかつたら。」

「この香りはアツサムだな。ミルクをもらつても？」

ありきたりな飲み方だが、俺はやはりこの方が飲みやすい。

本題に戻ろう。まだ話してすらいないのだが。

一番聞きたいことは最後にした方がいいのだろうが、時間をかけすぎるのもよくない。手身近に終わらすために最初に聞くことにしよう。

「このカルデアの最初の召喚例は、お前でよかつたか？」

「え、どうしてだい？ 僕は見ての通り人間だよ？」

笑顔でごまかそうとするか：

だが俺にそれは通じない。

人間だと言い張る割に、人間の力だけで得ることができる知識じやないものが書類に

まざつていた。

この男にもう少し警戒心というものがいれば、その走り書きのようなメモを見られずにすんだかもしれない。

そして、もう一つ。

「この指輪、なーんだ。」

「… ははは。どうやら僕の負けみたいだね。」

少し残念そうに、そして嬉しそうに語る。

「君の言う通り、僕が最初の実験成功例のサーヴァントだ。でも、今は確かに人間だよ。あたりまえだ。こんなに一般人としか思えない氣をまとつておいて、まだ英靈の存在だといわれた方が、違和感というものだ。」

大方想像はつく。こここの前任の所長… マリスピリード・アニムスファイアが、壊れた戦争において召喚し、聖杯を入れ、このカルデアを作る。一方でロマニは、人間になりたいと願つた。

ロマニ・アーキマン。英靈であつた頃の、英雄としての名は…

「ソロモン。魔術王ソロモンだな。そして見てしまつた。世界の終焉すべての終わりを。」「そこまでわかるもんかな普通!？」

肯定するうえで、それでもわかつてないと思つてたのか。まあ気持ちはわかる。俺も

本気で推理すればあたることもあるんだなって……

答えを知つてしまつた以上。伝えることは一つだ。ソロモンとしての力を残してい
る彼にこれだけは伝えなければならない。

「ロマニ。お前にその宝具は使わないのでほしい。」

「……そのときの、状況によるさ。」

だろうな。だつたらそれまでに、できる限り力をつけるとも。
たとえそれが、人間にできなくとも。

俺は魔術師だ、手段は限りなく不可能でも、できないわけじゃない。

「もう一つ聞きたことがあるんだ。」

「なんだい？ 僕はレオナルドみたいな天才じやないから、答えることは少ないけど……
君の質問には全力で応えたい。」

「ありがとう。なら……こここの資料、全部読んでもいいか？」

私は今、花粉をものすゞくまとつた白いお兄さんに、いろんなことを教えてもらつて
いる。そしてそのどれもが興味深く、覚えるのが大変だった。

「…じゃあ、私も魔術を使える？」

「出来るとおもうよ。だつて、君の魔術回路は無意識のうちに開かれている。あとは魔力の流し方や、術式を覚えたら…ほおら！こんなこともできるよ。」

…花を渡されても。それに全部、知らない植物だし…

魔術の世界というのは、とても奥が深い。そして、紅蓮の家のように、代々引き継いで繁栄させる、というのも必要なのが分かつた気がする。

そう、あくまで気がする、止まりだ。

なぜなら私は、当事者じゃない。

本当の気持ちは当事者でなければ、わかつたといつてはならない。なんとなくこうだろうな、という推察は許されるだろうけど、やはりわかつたという言葉では、わかりきれていないと思う。

「君はとても賢いね。確かにその通りだ。でも、知ろうとすることは、いけないのかな？」

それはどうだろうか。私は紅蓮が好きだ。だからこそ、もつと知りたいと願う。それと同時に、もつと知つてほしいとも。

でもそれが、紅蓮にとつて嫌だつたら？

そのときはもちろんやめてしまえるだろう。好きな人の嫌がることはしたくない。

⋮ わからない。

「そうだね。人間にしてみればそうさ。僕は君たちの考えることなんて興味ない。でも、僕の生きがいなんだ。だからこそアドバイスしよう。魔術もそういうものだと。⋮ ?

わからない。そういうものと言われても困ってしまう。

「魔術師は、自分の知らないことを知りたいから、魔術師なんだ。」

「なるほど！じゃあ、好奇心旺盛の子供みたい、ってこと？」

彼は肯定を、満面の笑みで表現した⋮ 常に笑顔じやん。

私はこの数日で、前より彼のことを知った。そして同時に、どうして教えてくれなかつたのか、疑問が生じた。

魔術は隠匿するべきものだという理解を得たにもかかわらずだ。

これは私の身勝手なエゴ。なんでも語ってくれると思つていた彼に裏切られていたと錯覚する、私の自分勝手な思い込み。

それでも⋮ 少しくらい相談してくれてもよかつたのに、なんて考えてしまう。

そして同時に、もう一つ脳裏に浮かぶことがある。

サーヴァントつて美形多すぎない???

このままでは紅蓮の気持ちがさらに揺らいでしまう。

ここに来る前に聞いた… まだ好きかどうかわからない。その気持ちに早く答えを見つける、なんていうのは、その根源とやらに到達するより難しいだろう。

だつて… 私も悩んだもん。

「ハツハツハ。やはり人間というのは面白いねえ。」

「ふおう君こいつ蹴つていいよ。」

「マーリンシステムオオウ!!」

用事はあらかた済んだ。次の特異点とやらへのレイシフトの調整が終わるまでの休息といつても、まだかかるのか… そりやそうだな。

時間旅行をそんな軽々しく連発されちや困るわ。

「並行世界の移動なら、簡単だつたけどね！」

そんな綺麗な笑顔で言われても困る。

そもそも平衡世界の観測すら難しいものだというのに…

「つて何自然に横にいるんですか宮本武蔵さん!?」

「ん~いい反応！ そうこなくつちや。こつちの私も、それなりに有名みたいね。男らしいけど。」

そりや可能性として女の武藏とかいてもおかしくないけど、こんなきれいなのに剣士とかもう…

英雄信じれねえわ。

それでいて向こうにいる小次郎はなんかうずうずしているし。

まあ、幸いなことにここには、現代魔術に通じる人物が数人現れるようだしな。
「… なあマスター。こういうことをいうのは無粋なのかもしれないが、君は本当に人間なのか？」

「まあいいじゃないか兄上。神靈なるものをここまで見れることはまずないぞ？」

なあんでもロードがいるのかなあ？

憑依してどうの、擬似召喚だからどうの、人理がどうの、いろんな条件が重なつたらこそできうる召喚だったのか。

「ま、ロードを使役するなんて大それたことできるわけが…」

「ならその不敵な笑みは隠した方がいいぞ。」

これは面白くなりそうだ、その言葉ののちライネスは近づき、

「それはおいておいて、確かに君の魔術回路は面白いな。どうだ、私の弟子にならないか？」

悪魔だな。

師匠は別に欲しくないが……しかし魔術を教えてもらえるなら、それほどありがたいことはない。

「でもやつぱり、誰かの元に下るつてのは好かない。対等に扱つてくれるというならまあ、考えないこともないさ。」

「ほお……？ふふ、ますます気に入つたよ、我がマスター？」

悪魔だな。

次に行く特異点は、どうやらフランスのようだ。フランスに関係する英靈は何人かいだし……連れて行くのは決定だな。

「さて、そこで質問だが……君は一体？」

「そんなの私が聞きたいわよ。」

どうしたものか。オルタの存在というのは、どうも難しい。どのサーヴァントにおいてい

てもあり得る、別の可能性がオルタ、なのだろうか。

ジャンヌ本人に聞いても当然わからない。

ジャンヌオルタ本人に聞いても

「私の記憶は不鮮明よ。そもそも、どうしてこんなところに…」

なるほど。理解した。

これから俺が関わる人物、もしくはその可能性が少しでもあれば、縁を結んだことに
なる。だから俺が知らなくても、向こうが知らなくても、呼べるのか。

⋮ カルデアの召喚式を解析する必要があるか…？

とりあえず。

「レオナルド。俺は準備ができた。」

「私もです！」

俺たちは指令室に集まつて、話を聞く必要があるからだ。

どれほど資料を読み理解しても、やはりその作戦を開始するのは、所長代理だ。

「⋮ その前に一つ、聞かなくちゃいけないことがある。」

重い口をやつとの思いで開けたかのように、ロマニが言う。

「君たちはこれから、たつた二人で、七つの人類史に挑まなければならぬ。その覚悟は
あるか？人類の未来を背負う力はあるのか？」

「何言つてる。二人だけじゃない。」

俺と立香はもちろんだが、ほかにも多くの英靈、マシユ、レオナルドにカルデアの職員たち。それから…：

「あんたもいるだろ？」

「——ありがとう。その言葉で僕たちの未来は決定した。」

これよりカルデアは、予定通り人理継続の尊命を全うする。

目的は人類史の保護、および奪還。探索対象は各年代、原因と思われる聖遺物・聖杯。これから俺たちが相手にするのは歴史…：人類史そのもの。目の前に立ちはだかるのは多くの英靈、伝説。

これは、挑戦であり過去への挑戦という冒流。人類を守るために人類史に挑む。だが、選択肢はこれしかない。はいかイエスだ。未来を得るには、これしかない。結末がどうであれ、後悔することは許されない。今ここで立ち止まつてもいけない。許されるのは、取り戻すための前進のみ。

「——以上の決意をもつて、ファーストオーダーから改める。」

人理守護指令、グランドオーダー G・O。

それを告げられ、俺たちは決意した。

人類史を必ず取り戻す。

第4話

夢を見ていた気がする。このカルデアにいるジルやジャンヌオルタではない、別の場所で召喚された二人が、おかしな儀式やら拷問やら……ただの悪夢であることを祈る。

キャスターとして召喚されたジルは、確かに危ないが、このカルデアにいる間に何か悪事を働くかと聞けば、きっとそんな気はないという。

もしすれば容赦なく座の記録もろともなくしてやるが。

ジャンヌオルタにしてみれば、記憶がほとんどないらしい。記憶と言つても生前の記憶はある。ただ、別側面Alternativeとして確立された自分の存在する理由が、思い出せないそ

うだ。まあ今のところは支障がないので、放置していい問題だ。
そういう思案しているうちに、フォウ君が何やら心配そうに、こちらの様子をうかがう。

「心配ないさ、少し夢を見ていた。」

毛並みを整えるように撫でる。とても嬉しそうに耳やしつぽを振るのが、愛玩動物らしい。

が。

フォウ。このカルデアにおいて、マシユがそう名付けたこの幻想生物は、キヤスパリーグだ。

ブリテン島において、豚の出産が災厄を意味する。そして恐れていた出産。そこから生まれたのがキヤスパリーグ。こいつが成長すれば望まない災厄がブリテンに降りかかるがまあ……いろいろあつて退治された、というのが物語としてのこいつの終わりだが……

「この前は助かつた。お前の魔力を借りなきや、完全な結界の維持はできなかつたよ。」
膨大な魔力を一部、借りた。だからこそ、冬木から帰るときの結界が安定し、時間の遮断ができた。

フォウは誇らしげに胸を張る。その見た目すら可愛いのだが。

でも油断してはいけない。こいつは人の欲望を喰らい魔力を増やす。厄獣なのだ。
：まあ悪事を働くかない限り俺から何かするというのはないけど。

ドアが開く。

「おはようございます、先輩。そろそろブリーフィングの時間です。」
マシユが戦闘服のまま、それを伝えてくれた。

隣には眠そうな立香がいる。

そろそろ行かないと思いつい、フォウ君を肩に乗せてベッドから立ち上がる。

「アルトリア？ いつまで靈体化してるのさ。そもそもここでは必要ないだろ？」
「…ですがマスター。あなたへの負担を減らすにはこうでもしなければ…」

そうだろうか。俺は今のところ結構な数の英靈に魔力供給を行つてゐるが、そこまで苦ではない。むしろ無駄なものが体になく、軽くなつた気がする。

しかしその気遣いが嫌なわけでもないので、

「ありがとう、アルトリア。」

「マスター、その… 抱擁はとても嬉しいのですが、二人が見ています…」

マシユは特に違和感を感じていないうだが、立香はものすごく不機嫌になつた。
さつきまで眠そうだったのにそれが理由ではなさそうのがなんとも。

そろそろ管制室へ向かおうか、と足を進める。

途中で、ジャンヌオルタと合流したので、話しながら行くことにした。

「… で？ 次の特異点とやらには、誰がいくのかしら？」

「英靈だけで言うならアルトリアと君は確定かな。すくなくとも俺は、今回の特異点で

は君が必要だと感じている。」

あつそ、と、そつけない返事が返ってくる。少しだけ口角が上がっているので、別に嫌だつたわけではなさそうだ。

「そういえば、記憶は不鮮明だ、つて言つてたけど。それはオルタの理由の記憶に関する、でいいんだよね？」

彼女はうなづく。

英靈というのは、よほどのイレギュラーでない限りは、生前の記憶と、聖杯から与えられる現代に関する知識とをもつて現界する。

そしてそのイレギュラーが、ジャンヌオルタに起きた。

「…ま、それでも私の力は、衰えていませんがね。」

「うん、頼りにしてるよジャンヌ。」

フン、とまたそっぽを向く。

きつと照れ屋なんだな。

「マスター。あなたはもう少し自重した方がいい。」

「そうだぞー紅蓮。そうやつてたぶらかしてたらバチがあたるぞー。」

「先輩にもしものことがあつても、私が守ります！」

なんかずれてるぞマシユ。

管制室につき、ロマニから説明を受ける。

まず一つ目に、特異点の調査及び修復。

人類史における大きなターニングポイントを正しい軌道に戻すことだ。

二つ目に、聖杯の調査。

聖杯は万能の願望機。あらゆる願いを、時間や過程を省いて望んだ持ち主に与える最高位の聖遺物。

この聖杯を、レフはどうにかして持ち出し、悪用したと、ロマニは考えているようだ。
 … 確かに、聖杯クラスのものでしか時間旅行や歴史改変などという夢物語、叶えることはできないだろう。

だから、その時代にあるであろう聖杯を破壊、もしくは持ち帰ると。
 作戦として重要なのはこの二点らしい。

ある程度想定していたが… 言葉にするのは簡単だ。しかし実際に行おうとするのは、はるかに難しいだろう。

それでも、この世界に残り、人類最後のマスターになつてしまつた以上、起こさなくてはならない行動だろう。
アクション

… みんなを見る。アルトリアはいつも通り凛として、前を見据えている。

マシユは、覚悟を決めたといわんばかりに盾を握りしめ、キリつとした顔で堂々としている。

立香は、できるだらうかという不安を浮かべながらも、やり遂げようという意思をこぶしで表す。

ロマニは、表情こそ皆を安心させる笑顔だが、手先が少し震えている。

俺だつて不安だ。本当にできるかわからないから。そんな中で口を開くのは、万能の天才だつた。

「おい、そこのお調子者。いつまで私を待たせておく気だ。」

「気乗りがしなくて忘れていた。」

忘れてたとか抜かしたぞロマニの野郎。

マシユはおかしいと連呼するので、言われて思い出す。

確かにレオナルドって男だよな……でもアルトリアのことだつてあるし……うーん。

そしてレオナルドの説明を受けて、俺は納得する。

本人にとつての美の極地。それがモナ・リザ。なればこそ、その絵画を肉体として現

界するのは当然らしい。

そして、これから出会う芸術家の英靈も、こんな偏執者ばかりだらうとも。

そんな気がする。北斎だつてちょっとずれてた……どころか、娘の方が本体として召喚されやがった。恐ろしすぎる。

これからのは主なバックアップは、レオナルドの指揮になるそうだ。それなら多少楽だろうな……

ちなみに。正式な契約はすでに行われています、残念なことに。ただし存在が特殊すぎて……なんというか。別のレオナルドが存在する。

なので、使役するのはそちらのレオナルドになるだろう。連れていくことがあるとは思えないが。

そんなこんなで自己紹介を終えた彼女は退出する。

「……話の腰が折れたね。本題に戻ろう。」

と、やつとのことで、レイシフトの話題に移る。

こちら側は準備がすでにできているので、その返事をする。

今回行く特異点は、七つのうちで最も揺らぎの小さな時代だそうだ。

「特異点につけばこちらからは連絡しかできない。だからまずは靈脈を見つけること。そして、その時代に対応してからやるべきことをやるんだぞ。では——健闘を祈る。」
そうして俺たちは、コフィンへ搭乗する。

今回レイシフトを行うのは、俺、立香、マシュー、アルトリア、ジャンヌオルタ。そし

て俺のコフインに一緒に入つているフォウ君。
⋮ フォウ!?

「フォウ?」

⋮ まあキヤスパリーグだし何とかなるだろ。
「俺のそばから離れんなよ?」

「フォウ!」

可愛いな。

コフインの中から、アナウンスが聞こえる。

アンサモンプログラム スタート

霊子返還を開始します。

レイシフト完了まであと3, 2, 1⋮⋮

全行程完了クリア

グランドオーダー、実証を開始します。

この感覚はいつまでたつても慣れないな⋮⋮

⋮⋮

どこまでも広がる豊かな草原。吹く風は穏やかで、空氣はとても澄んでいる。

「無事に転移できましたね、先輩。」

マシユは平気そうにしている。

しかし立香は…

「紅蓮… 袋…」

「あーもーはいはいここに吐け…」

少し穴を掘り、嫌がる立香を多少強引であるが抑えながら、嘔吐させる。

背中をさすりながら、終わつたと思えば

「大丈夫か？ほら、水だ。口でもゆすいどけ。」

「ありがとう…」

俺も吐きそうだけど我慢するとしよう。

マシユはどうやら何かを計測しているようだ。

時間軸を確認？へえすごい。時代は1431年か。

場所がフランスなのはわかっているから、百年戦争の真っ最中だな。

「はい。ですが、この時期はちょうど休戦時期のはずです。」

「百年戦争っていうと… ジャンヌが出てくるよね！」

立香は少し嬉しそうに言う。

この時代の戦争は比較的穏やかで、捕縛している兵士を保釀金有りでの釈放なんて日常茶飯事、という情報を添えている。

しかし俺は、そんな話は知っているので興味がない。興味があるのはこの… 上空。「どうしたんですか先輩？ 空なんて見上げて…」

「見ろマシユ。あれは綺麗だが… どこか不思議だな。」

そして一同が空を見上げる。

「よし！ 回線がつながった！」

画質の粗い映像越しにロマニが喜んでいる。

その子供をあやすようにマシユが、空の映像を送り、これは何かという説明を求める。空に広がるのは、とてもなく高いところに、ありえないくらい広範囲に出力される光の環。

1431年になんらかの観測された記録がない。当然である。

「間違いなく未来消失の理由の一端だろう。解析頼んだぞロマニ。」任せてくれという返事を受ける。同時に靈脈の探索を促される。

ジャンヌオルタは……どこか不安そうだ。

「ジャンヌ？ どうかしたのか。」

「いえ、見覚えがあるような気がしたので。それだけです。」

全てを説明する気になれないのか、それとも自分の中で整理したいのか。
少なくとも詮索するのはやめておいた方がいいだろうな。

置いといて。

「靈脈を探そう。それから現地の人間との接触も必要だな。」

「はい、その通りです。急ぎましょう、皆さん。」

そして歩みを進めるわけだがどうだろう。少し歩いて見えるのは、フランスの兵隊と思わしき集団だ。

マシューがコンタクトを試みるが、どうやら失敗したようだ。

ロマニはものすごく慌てているが……まあよほどの行動をしない限りはタイムパラ
ドクスは起きない。世界の修正力というものを取り戻せばの話だが。

「ジャンヌ。君はこの世界では多分見えちゃならないと思う。一応隠蔽魔術でも……」
「必要ありません。どうせ私は、一度死んでいるのですから。」

自分の身を蔑ろにしている……わけではなさそうだ。

おそらく、実際自分がこの時代には死んでもすぐだというのがわかるのだろう。

なぜなら彼女が死ぬのは、記録では五月三十日だ。つまりここはその数日から数週間ほど。なのでもし見つかっても、他人の空似とみられる……に違いない。

「マスター、戦闘態勢に入ります！」

「マシユ、戦場での君のマスターは基本的に立香だ。あまり俺のことは気にしなくていい。いいな？」

わかりましたという返事とともに、前に出る。

ジャンヌも足早に前へでる。

アルトリアはどうと、

「あなたが前線へ出ないよう見張ります。」

なんでき。こんなときに戦えないのは、マスターとしてじゃない。魔術師としてとても不甲斐ない。

マスターとしての自覚を持つてと言われても、俺は別にマスターになりたいわけじゃない。だから役割などどうでもいい。

「紅蓮君、それでもだ。君がいくら強くたって、もし君が死んだら？ 立香ちゃんはどうするんだい？」

「……それはそうだけど。」

でもやはり、自分がこんなときに戦えないというのはなんとも情けない。

ふと前に目をやる。マシユが少し押され氣味で、それをかばうようにジャンヌは旗を振り炎を出す。

このままではまずい。ジャンヌはマシユと立香に氣をとられ、自分の身に近づく危険を感じ取れていません。

「ジャンヌ！ 危ない！」

と、駆け寄ろうとしたとき。

「はあ！」

ジャンヌの後ろからきていたフランス兵めがけて、旗を振る白い少女がいた。

見覚えはもちろんある。一応カルデアに残つてもらっている方のジャンヌだ。

： レイシフトしていないんだから、同一ではないのか。なら： 現地のはぐれサー
ヴァント？

「彼らは敵ではありません！ そして皆さん！ 向こうの方を見てください！」

「なんだ、敵じゃ…… ないのか？」

白いジャンヌの言う向こうの方を見る。

骨： 骨？

冬木で見たのとは少し違うが、やはり骨だ。どう見ても骨だ。

そしてその向こうには： 飛竜種！

「な!? あれはワイバーンじゃないか! これは一筋縄ではいかないぞ……！」

うるせえ口マニ。お前はそこで指くわえてみてろ!

「ジャンヌ、皆を頼む。アルトリア、骸骨の相手は任せた。」

二人は口をそろえてもちろんといった。

ワイバーン。竜種の中では比較的弱いと分類されるが、それでも強いのに変わりはない。

……実際に戦うのはこれが初めてだが。

実験として魔法を使う相手にはもつてこいだな。

魔法とは神羅万象に干渉することと言つても過言ではない。

魔法とは自然の摂理に反する行為と言つても過言ではない。

ならば、それに準ずる行為を魔術で行えば?

ならば、それと同等の行為を魔術で行えば?

答えは明白である。明白すぎて明々白々だ。

新しい魔法を作つたことになる。

……というのは不可能なのだが。しかし。

俺が今から行うのは、魔法でないにしても、協会に魔法級と言わせることができる代物だろう。

「すべて遠く、すべて儂く、すべて尊く。人々の安寧を望み。欲望の混沌を嫌う。

世の理から外れた理想郷で見守る。その理想から動くことは無く。

されど我的呼び声に呼応せよ。

九つの守りは今、ここに集う。

Nine
Guardians
理想郷の番人たち

精霊の召喚。使役。つまり幻想種を、だ。

これはもはや、魔法級だな。きっと。

「…私たちの安眠を邪魔する坊やはあなた?」

「お姉さま、服が少しずれています。」

「あなたも髪がずれていますよ。」

「面白いこともあるんだね!」

「そうね、その通りだわ!」

「さて、ここはどこかしら…」

「あーもーめちゃくちゃだなおい!」

「…あら、あなたから知つて いる香りがするわ。早くあのクズを出しなさい?」

「どうやらここにはいないみたいですよ…?」

⋮

「う…」

「う？」「う？」

「うるせええええええええええええ！」

九人が思い思ひのことを口にするな！というか呼んでおいて文句言うのはしゃくだからそれはごめん！

じやなくて！

⋮ どうやら成功したようだが。しかし命令をするにしても、彼女らは俺の眷属ではないし隸属でもない。なのでまず、お願ひから⋮

「その必要はないわよ。少しくらい協力してあげる。でもお話はやつぱり必要ね。なら⋮ まず私たちの力、そこで黙つて見てなさい。」

そう言つて、一人を先頭にして九人は歩く。ワイバーンを前に、歩みを止めることは無い。

もうすぐで彼女らが襲われる、そう思つた——瞬間。

「その程度？知ってるわね。所詮は幻想種の端くれにも満たない雑種。相手にならない

わ。

当たつていない。いや、たしかに攻撃はされていた。それをよけたとかではなく。

当たつたという事実がかき消された。

干渉されない結界……？

「惜しいです。正確には、神秘の差です。」

神秘の差？

それについてロマニが説明してくれる。

神秘。簡単に言えば魔術師が最も重視するもので、これは当然だが公開すべきでない情報。秘匿されるべき事項。これがあるから魔術は発動することができるとも。

そして、神秘とは年数も関係する。いろんな神秘が重なることも重要だが、人間が知りえない時代に関する神秘の方が比較的重要である。つまり。

彼女ら精霊は、人間が存在するよりはるか昔から形作り、存在する。つまり。

「彼女たちの持つ神秘は、僕たちではわかりえないくらい深い。だからワイバーンは、干渉することすらできないんだ！」

だそうです。チートかな？

ようするに神代の神に挑むようなことだろ？無理だわ。俺が精霊を従えるんじやなくて精霊が俺を従える方がしつくりくる。

「あーあ。 ちよつとは面白そうだと思つたのにな。 いいや、 消えちやえ。」

すると、 目の前にいたワイバーンは消えた・・・ 消えた。

「これは・・・ ! 紅蓮君! 何が起きたんだ!」

「何がつてワイバーンが消滅した! 魔術を行使するでもなく、 ただ消えろと命じただけで、 さつきのワイバーンの存在が消滅した!」

そんな馬鹿な、 とモニター越しで、 魔力計の異常じやないのが信じられないといつている。

信じられないが、 驚いて動かないのでは話が進まない。

フランス兵の一人を捕まえ、 話をする。

「そちらの拠点を案内してもらえるか?」

彼は頷く。 そして俺たち一同を連れて帰還するようだ。

その間に話をしないとな・・・

「で? とりあえず名前を聞いても?」

「私はモルガン。 門番九姉妹の長女よ。」

そしてそれに続くように、 モロノ工、 マゾエ、 グリッテン、 グリトニア、 グリットン、 テュロノ工、 ティーテン、 ティートン、 と名乗る。

正直言つて、 まじで召喚していると思わなかつた。

彼女らはいわざもがな、英靈ではない。しかし、似た存在としてここにいる。
とりあえず、俺に協力してもらえるかどうかが問題だ。

「私はね。誰かに従つて動くのは嫌なの。私の意志で、行動するわ。」

「私たちはお姉さまの言うことに従います。すべての決定権は、モルガンお姉さまの御意ですのです。」

困つたな。それはつまり、俺に対しての協力の意思はないようを感じる。

「そうは言つていません。もしそうだつたら、そもそもここには来ていませんから。」

それはそうか。拒否される可能性を考慮していなかつた…

「少なくとも私たちは、貴方が悪でないと信じています。なのでそのうちには協力、もとい従つて差し上げます。」

よし、これでいい。でも俺は、主従はあまり好きではない。

あくまで対等がいい。

その旨を伝えると、突然笑いだす。何か面白いことを言つただろうか。

「だつて、ただでさえ高位な私たちを従属させることでさえありえないことですのに、そ

れを、対等？ふふ、初めてですわ。」

「それは…怒らせてしまつただろうか。」

「逆です。嬉しいのですよ、お姉さまは。」

と、マゾエと名乗った彼女が言う。

もう少し素直に教えてもらえませんかね。うん。あんまり深く考えたらいけないな。

そろそろ彼らの拠点へ着く。

落ち着いて休憩ができる場所は確かに必要なので、この場に留まることができるのには嬉しい。

壁はかなりボロボロだが、まあ修復する時間や材料も惜しいのだろう。

そういえば、俺たちを一度は敵と思ったんだ。それなりの理由があるはず……

「さて、質問だ。まだ戦争が続いているようだが、シャルル七世が休戦協定を結んだりは？」

「シャルル王？ あんたら、知らんのか。」

驚くべきことを、聞いてしまう。

王は死んだらしい。魔女の炎とやらで。

マシューや立香は、歴史と違うことを聞かされたことで驚く。

「ジャンヌ・ダルクだ。」

？

燃やした、のか？ ジャンヌが？

ジヤンヌはそもそも、死んだはずだ。それが、魔女になつて蘇つた、そう言つた。
もし蘇つたとしても、ジヤンヌがそんなことをするのだろうか…

「イングランドはどうに撤退した。だが、俺たちはどこへ逃げればいい?」

そう、だな。故郷をおいて逃げるというのはとてもつらいことだろう。

ジヤンヌ・ダルク。彼女は、十七歳という若さにしてフランスのために立ち上がり、一年でオルレアン奪回を達成した。しかし、イングランドにて捕縛された。戦場で痛手を負わされたことにより。そして、当時の常識であつた身代金の交渉を、ジヤンヌは受けたことがなかつた。フランスが見捨てたと同義である。そして異端審問をかけられ、処刑に至る。

復讐をする理由は確かにある。それでも、彼女がそれをするとは思えない。

「… それについてあんたら、すごいよな。さつきの骸骨といい竜といい。あいつらを相手にできるなんて。」

「慣れです。それより、一から事情を聞かせてください。」

マシユが前のめりになつて兵に質問をする。その様子をモルガンらは。

「退屈ね。」

といつて、九人はそれぞれ別に動き出す… 訂正。モルガンとマゾエは一緒である。
マシユの質問は、本当にジヤンヌ・ダルクだつたのか。というものだ。

幸いその兵は、オルレアン包囲戦と、式典に出たから顔をよく覚えているそうだ。

「… ジャンヌオルタは、俺の後ろに来て顔を隠すしぐさをする。なんか、可愛いな。
「髪や肌の色は確かに違つたが、それでもあれは紛れもない、ジャンヌ・ダルクだつた。」
　イングランドに捕縛され、火刑を下されたのを聞いて、彼らは怒りと憤りで震えたそ
うだ。

それでも、あのジャンヌ・ダルクは蘇つた。悪魔と契約をして。

「悪魔？」

「それは… 先ほどの骸骨のような？」

立香とマシユが質問をしたが、兵は首を振る。あれだけでは俺達でも対処できると
も。

「… ! 君たちの周囲に大型の生体反応！」

「目視しました！ あれは先ほどの… ！」

「ワイバーンか！ しかも複数体？」

これほど多くのワイバーン… ありえない。

「でもまあ、精霊様に任せますかね… 」

「マシユ、なんだか、別の魔力がこちらへ近づいているような… 」

「はい、私も感じています。これはサーヴァントの魔力反応です。」

なら、先ほど目視できた、白いジャンヌだろう。

「ジャンヌ、戻つてきて問題はないよ。」

すると、彼女は足早に近づく。息を整えるように呼吸をして、口を開いた。

「ええと、その。」

「大丈夫。君がこの世界で言う、魔女の方でないのはわかっている。な、ムシュー？」

「え、あ、ああ。彼女は、死んだはずの聖女様だ。俺がみた、竜の魔女、黒いジャンヌじやない。」

ロマニはこの状況で何か食つていやがる。

「ドクター。それは私が用意したゴマ饅頭ですね。」

「え、あれ？ そうなの？ 管制室にお茶と一緒にあつたから、てつきり……」

呆れた。なんでもかんでも食うのかお前は。

聞けばそれは、俺たちが帰還できたときに労うために用意していたそうだ。
なんとできた後輩なんだ……

「ロマニ。帰つたらお仕置きな。」

「……そ、それにもおいしいねこの饅頭。これなら立香ちゃんも紅蓮君も喜ぶよ。」
なぜこの状況で食うことを続けるんだマヌケ……
しかし弱つたな。兵を前に、ジャンヌが二人。困つたぞ……

よし、入ろう！

「せ、先輩？」

「大丈夫、ここの人には普通の人と思われるよう、偽装魔術かけとくからさ。」
そういうわけで、靈脈を探すのをいつたん保留し、中へ進む。ジャンヌはおどおどしながら。ジャンヌオルタは少し苛立ちながら。

まあいいだろ別に？

ロマニだつてモニター越しに賛成している。この時代に精通する彼女の話を聞けるし、現地民の話も聞ける。一石二鳥だ。

彼女の話を聞くにあたり、いくつか疑問点が生じた。

まず、聖杯戦争だと思つていたこと。この地の英靈であるにかかわらず、聖杯による知識がほとんどないこと。知識だけでなくステータスも下がつてること。本来ルーラーが持ち合わせる対サーヴアント用の令呪も真名看破もない。

それは本当に、サーヴアントとしてのジャンヌなのか…？

「それはまあ、のちのちなんとかなるだろ。はぐれサーヴアントってのはどうも性質がわからん。時間が解決するだろうさ。問題はそこじゃない。」

「はい、先ほどの兵士の方が言つっていました。ジャンヌ・ダルクは魔女になつた、と。」

ジヤンヌは、つい数時間前に召喚されたばかりで、詳しいことはあまり知らないらし
い。それでも、この世界にもう一人、ジヤンヌ・ダルクが存在する、そう言つた。
⋮ 少なくとも三人いるんだねジヤンヌつて。

じやなくて、この世界で言うもう一人のジヤンヌ。彼女はシャルル王を焼き殺し、オ
ルレアンでの大虐殺を行つた。

ただし、同一のサーヴァントが召喚されたわけではない。うん。後ろにいるジヤンヌ
の同一だらうな。

炎を使うというのは、彼女の特徴だ。そしてジヤンヌという名。そこから想起される
のは必然と、ジヤンヌオルタの存在だ。

おつと⋮ ?ジヤンヌを連れてきたのは事をややこしくするだけだつたか?
まいつか。

「ひとまず、今までの状況や話からして、この場でのフランス国家は事実上崩壊した。そ
れでいいな?」

「はい、先輩の言葉で間違いはありません。」

「でもさ紅蓮。國家が転覆するほどその魔女のジヤンヌは強いってことだよね?」
立香の不安に思うことは何か、わかりやすい疑問だ。
もう一人のジヤンヌに勝てるのか。

「立香。今それは考へることじやない。その時になつて初めて考へることだ。」

立香は不服そうに、しかし納得したのか、わかつたという。
とりあえず。

ジャンヌに俺たちの組織としての説明をする。ロマニを夢見がちといったのはあながち間違いじやないと思つた。

ジャンヌは、説明を瞬時に理解した。

「なるほど。まさか世界そのものが焼却されているとは。」

それでも、彼女は悩み事がある。

自分自身すら信用できていらないそうだ。

確かに、この十五世紀に竜種は存在しなかつたはずだ。なんらかの召喚であるだろう。

そして、先ほどの兵は、竜の魔女といつた。

竜の使役を行つてゐるのは、もう一人のジャンヌ……か。

「よし！目標は竜の魔女打倒！彼女が聖杯を持つてゐる可能性が高い！」

「勝手に決めないで！僕も同意見だけど！」

それに彼女の目的は、もう一人のジャンヌからオルレアンの奪還だといつた。その障害であるジャンヌの排除も。

白いジャンヌに協力をするのもまた、目的の一つだな。

第5話

私には記憶がない。

というのは真っ赤な嘘である。むしろ記憶がありすぎて困ってしまう。

だって……私と出会う前の彼に出会うだなんて誰が想像できますか!?

そもそも、私という存在自体がイレギュラーであるというのに、縁を結んでいない彼が私を召喚すること自体が間違っている。

……もしかすると、このかるであという場所は、思っていたより奇怪なのかも知れない。

これから出会うと想定される英霊は軒並み召喚できると考えても違和感がない。できるだけ、彼に悪影響を与えるに、私に出会わせなければならない。

難易度高すぎじやないかしら!?

……はあ。白い私は、いかにも頼れないし。というか、この特異点に私つてだいぶおかしくないかしら。

なんでわかっていながら来てしまったのか……

私は思つたより単純のようで、理由はわかりやすい。

かといつて、まだ知られたくはない。全力で隠し通す。
 それにこんなやつにばれたら、落ち度が半端じやないわ。絶対ばれないようにな
 いと……！

しばらく、フランス兵らのいた町で時を過ごす。

白い「私」は、記憶が本当に中途半端らしく、サーヴァントとしても新人のようなも
 のらしい。

後輩属性のサーヴァントは、私も似た境遇だと、励ましている。

それなら、この中で一番活躍するのは私が騎士様つてわけね。
 せいぜい死なせないよう……頑張りましよう。

ジャンヌらと話をしていく、一晩がたつたので、そろそろ次の町へ行かなければなら
 ないと思い、町を立つ。

俺としてはここでもう少し作戦やら準備やら、いろいろしたかつたのだが白いジャン
 ヌは

「これは戦争です、気を抜いてはいけません。我々が時間を得るということは、相手にもそれなりの準備をさせる期間を与えるということになります。」

「だそうです。」

「なるほど、流石ジャンヌ。それなりどころではなく戦場をかけた、まさに戦場の聖女だ。」

「オルレアンに直接乗り込むのは困難だということで、まずは周辺にある、ラ・シャリテを目指す。」

「現状のこの戦力で、本当にオルレアンを攻略できるとも思えません。やはり的確な戦略や人材確保は必要でしよう。」

「えらく冷静なんだな。でも、そこまで焦らなくてもいいと思うぞ？」

「俺はとりあえず、靈脈さえ探せばサーヴァントを呼べるんだ、人材の問題は解決する。ふと、九人の魔女の誰かが口を開く。

「お兄さん、あの町の様子、何か変だよ！」

「… 本当だ。それにわざかだが、サーヴァントがいた形跡が…」

「町が燃えている。急いで生存者をと町へ向かつた。」

「ドクター、生存者は…」

「… 残念だが、その街にはもう誰も…」

そんな、と今にも膝から崩れ落ちそうな白いジャンヌ。

まるでこの惨劇を知っていたかのように落ち着いた様子の、しかし額の汗が残るジャ
ンヌオルタ。

何食わぬ顔で動く生ける屍。
リビングデッド

「つておい！立香、戦闘準備だ！」

「え、そんないきなり!?」

立香は驚きながらもマシユに指示を出す。二人のジャンヌも動き出す。しかし場所
が悪い。崩れた建物の瓦礫が足元にある。だからこそ動きづらさがある。

モルガンは相変わらずつまらなそうにどこかを見ているし、それ以外の姉妹らはリビ
ングデッドを前にしても

「わー、なにこれ！死んでるのに動いてる！」

「ねー！すぐ起きもーい！」

なんだこれ… シンプルにシリアルが壊れている…
あー…俺も戦いたい…

「マスター、終わりました。」

アルトリアに呼ばれて、やつと気づいた。

そこまで考えることをしていた気はしないが…

「さて、まだいるぞ！」

「ロマニ、言われなくても目視できた。」

「ワイバーン…！先輩、あれは死体を食べているようです。」

なぜ、こんなことに…もつと早くこの町へ来れば…いやまた。相手のサーヴァントの中に、索敵が得意な者がいるのでは？ そうではなくとも、英靈同士、居場所の感知はできるのでは？

「戦闘再開します、マスター、指示を！」

「マシユ、私をそんな頼らないで…」

「こんな調子でこの先、やつていけるのか…？」

「アルトリア、ワイバーン食べる？」

「それなりの調理を所望します。生ではとても…食べたい見た目ではありません。」
「食べたことあるのね…」

ワイバーンは、今回は消滅していないので、とりあえず保存はしておこう。

魔法陣の中に入れて……うん。これでいい。

「……これをやつたのは、私なのでしょうね。わかります。確信をもつて言えます。でも、一つだけわからないことがあります。」

どれほど人を憎めば、これほどのことができるのか。

ジヤンヌからすれば、これは相当な憎悪からくるものらしい。俺はこの程度ではまだまだと思うんだけど……ジヤンヌは優しいんだな。

一人、顔を少し暗くする者がいた。

少なくともこの世界の黒い魔女とは違うにしても、同じジヤンヌ。罪悪感を感じる必要はないと思うのだが……

「ジヤンヌ？」

「……なんですか？ 私に聞いても何も……ええ、何もわかりません。」

そうだよな。まだ答えるくはないよな。

……ジヤンヌオルタが嘘をついているというのは、なんとなくわかる。

でもどういう嘘かわからない。推測はいくつかしたものの、やはりどれも違うようを感じる。

今は詮索するのは避けておこう。

「みんな、逃げろ！ 先ほどまでそこから先を進んでいた複数の魔力が、こちらへ戻つてき

て いる！」

「…いいえ、逃げません。せめて、真意だけでも…！」

「だめだ！ 戦力的にも無駄だとわかつて いることに、君たちを巻き込むことはできない！」

「ロマニ、いざとなれば転移できる、ここはひとつ様子見と行こう。」

「…向こうから、確かに迫つて きている。これは…まあいな、確かに。」

うん。対話できるくらい近い。むしろもういるもん。

「…武器を見るに。服装を見るに。ふるまいを見るに。」

「…聖女に騎士。吸血鬼は一人。名前は…マルタ、シュヴァリエ・デオン、ヴラド。ツエペシユ、もう一人の吸血鬼は…すまない、候補が二つあつてわからない。名前を聞いても？」

彼女は黙る。ひどいな、答え合わせすらさせてくれないなんて。

そして最後にもう一人。嘲るように高笑いをし、白いジャンヌをネズミか何かと思つたと言う彼女。今回の黒幕かとも思える、黒い魔女。

黒いジャンヌ。

「どうして…この町を襲つたのですか！」

「どうして……？そんなの、私がサーヴァントだからですよ。」

「それは理由にしては足りない。」

しかし、つぶすという目的においては、最も簡単で、もつともはやい方法だ。合理的である。

黒いジヤンヌは、質問を返す。

なぜこんな国を、こんな愚者を救おうとしたのか。

その言葉で、俺の中でのつじつまはあつた。

加えて、カルデアで召喚し、今回連れてきた英霊、ジヤンヌオルタ。彼女のクラスが俺にヒントをくれた。

「クラス、アヴエンジャー……にしては靈基の規格が違うようだが、それでも。君の目的は復讐だ、違うか？」

彼女は驚いた。しかしそうに笑いだす。

察しの言い馬鹿もいるのね、と。

「だつてそうでしょう？ 主の声が聞こえない、ということは、主はこの国に愛想を尽かした。だから滅ぼします。すべての悪しき種を、私が刈り取ります。」

このフランスを、沈黙する死者の国にする。

彼女の目的は、本当にそこだろうか。それだけで本当に復讐がなされるだろうか。
 ……だめだ。やはり本人に聞かなければわからない。
 でも簡単には、教えないよなあ……

「まあ、貴女には理解できないでしょうね。いつまでも聖人気取り。憎しみも喜びも見
 ないふりをして、人間的成長を全くしなくなつたお綺麗な聖処女様には！」

「なつ……」

それはブーメラン……というわけでもないのか。

英靈とは全盛期で召喚されるんだ。この白いジヤンヌと黒いジヤンヌの、召喚される
 全盛期は多少ずれているのかもしれない。白いジヤンヌに向けた言葉はどうも、過去に
 暴行を受けていないというのを前提に感じられる。

……難しいのでこれ以上はやめておこう。

「いや、サーヴアントに人間的成長ってどうなんだ？それを言うなら、英靈的靈格アップ
 とか……」

「うるさい蠅ね。あまり耳障りだと殺すわよ？」

と、モニター越しのロマニをにらんでいると、コンソールが燃えたらしい。

正直ちょっとざまあ見ろつて思いました。

……にらむだけで呪いを発動できるのか？俺も練習してみようかな。

「……あなたは、本当に私なのですか？」

白いジヤンヌが問う。

その疑問は当然と言えばそうだ。やつぱり、ジヤンヌ自体がこういうことをする人間だとは思えない。だから、違和感がある。

「呆れた。ここまでわかりやすく演じてあげたのに、まだそんな疑問を持つなんて。」

「どういうことだ？」

彼女は、白いジヤンヌの持つ正義感に憤慨していた。そして、残り済だとも言つた。

「貴方には何の価値もない。ただ過ちを犯すために歴史を再現しようとする、亡靈に他ならない。」

そして見切りをつけたのか、周りにいる英靈・バーサーク・ランサー、バーサーク・アサシン。そう呼ぶ二人にこの場を任せようだ。

「……だめだ。やはり二人とも、吸血の伝説を持つ。血に飢えているらしい。」

「みんな待つんだ！紅蓮君が言つたことがもし正しいなら、片方はヴラド三世！ルーマニア最大の英雄で、通称串刺し公。とても危険だ！」

「…………んなこたわかつてるよ。もう片方はカーミラだ。現在各地に残る吸血鬼のほ

とんどの原型ともいわれている。つまりやばい。」

「先輩、語彙力の低下が著しく見られます。少し落ち着いてください。」

それはよくあることだから、あまり気にしないでほしい。

しかしあ、相手も本気のようで、避けられないようだ。：

「アルトリア、戦闘開始だ。」

「了解しました、マスター。」

ひとまずヴラドに突つ込むようアルトリアに指示を出す。

戦闘に関しては本人にあらかた任せる形で行う。多分変に指示してもミスが多くなるからだ。

「さーてカーミラ。君はどういう風に戦うのかな？？」

これまでの一連のあいだも、向こうは余裕でもあるのか。ずっとにらみ合つて喧嘩ばかり。

それにはとうとう呆れたのか黒いジャンヌも、

「貴方たちがその怒りを向けるのは向こうの小娘に対してです。間違えないでください」

といつた。こつちくるのは来るので困るけど。：

しかしあ、マシユ相手になると、いかんせん手を抜いているように見える。

：いや、加減の仕方がわかつていなか？

「… おかしい。年端も行かない小娘のはずなのに、戦闘だけは熟練。こんなのが、矛盾しているわ。」

「… デミ・サーヴァントでしょう。人間とサーヴァントが入り混じった異質な存在です。」

俺たち一同は驚きを隠せない。なぜ彼女が、デミサーヴァントについて知っている？「そして私の失策でした。あなたたちはほかのものより残忍ですが、お遊びが過ぎる。」

そして、ヴラドとカーミラに、撤退の指示を出す。

二人はまだ本気でないと抗議をするが、それでは意味がないと、後ろに回るよう指示を受けていた。

後ろの三人に声をかけている。

状況はかなりまずいな。

「あわわ、後ろの三騎をけしかけてくる気が！？ど、どうしようどうしよう何かないか何かないか。」

お前は猫型ロボットか。

「ドクター、落ち着いてください、こちらまでパニックになりそうです。」

マシユ… 冷静すぎて説得力が…

「だ、だけど絶体絶命じやないか！あわわ、メールメール。こういう時こそネットの力だ！」

そういうと、ネットアイドル「マギ☆マリ」の知恵袋にアクセスし、質問メールを送つたようだ。

⋮ 人理焼却の状況でネットつておかしくないか？

「今サービスアント三騎に襲われています、どうすればいいでしょか、と⋮ うん☆いつ死んで生まれ変わればいいとおもうよ？うわあ⋮ ひどいなネットアイドルは！人の気持ちをまるでわかつてない！」

だつてそれの中身⋮ いや、やめとこう。かわいそuddash;だし。うんうん。

「——マスター、一か八か一点突破に賭けます。」

その必要は⋮ いや、そうだな。撤退の意味もある。それで行こう⋮ しかし、なんとも言えない。ワイバーンの数が多すぎて、これの中を通りぬけて行くのはとてもじやないが⋮ あ。

「モルガン！ 戦闘！」

「先頭の間違いではなくて？」

どつちでもいい。だからさつさと前行つてくれ⋮

まさかここにきて、精霊の召喚の意味があるとは。

九人で周りを囲んで、ワイバーンから守つてもらえていた。戦闘する必要がないので、走り抜けることは容易だ。このまま進もう。

…… 前方に、サーヴァント？

「あら、もしかして私の助けはいらなかつたかしら？」

「… 薔薇？」

ガラス細工というものが、そんな薔薇が飛び去つて行く。

「それでも、わたしが正義の味方としての名乗りを上げる必要はありますね！」

そう言つて、黒いジャンヌへ向かい、名乗りを上げる。俺たちはいつたん立ち止まる
方がいいのだろうか…？

「貴女が誰かは知っています。貴女の強さ、恐ろしさも知っています。正直に告白して
しまうと、今までで一番怖いと震えています。」

そうだろうな。完全に少女の見た目してゐるもん。怖いだろうな。慣れていなきやそ
れこそ恐怖一色に違ひない。

「それでも、貴女がこの国を侵すのなら、わたしはドレスを破つてでも、貴女に戦いを挑

みます。なぜならそれは。」

すると、デオンと思わしき英靈が、少したじろぐ。

これが意味するのは。そして、ドレス。フランスという国への守護心。なるほど。やはり英靈というのは、面白い。

黒いジヤンヌは、その動搖を見逃さない。

「彼女が何者なのか知っているのですね。答えなさい。」

「… この殺戮の熱に浮かされる精神ココロでもわかる。彼女の美しさは、私の目に焼き付いていますからね。」

… だつたら彼女という英靈は、確定した。

「ヴエルサイユの華と謳われた少女。彼女は――マリー・アントワネット。」「マリー・アントワネット王妃!？」

マシユが驚愕する。

少女は喜ぶ。

「はい！ ありがとう、わたしの名前を呼んでくれて！ そしてその名前がある限り、どんなに愚かだろうとわたしはわたしの役割を演じます。」

堂々とした名乗り。流石はマリーだ。王妃としての器。気品高さ。そこからくるのはうその自信ではなく。真に誇れる自信である。

彼女は、黒いジャンヌへ、質問をする。

「わが愛しの国を荒らす竜の魔女さん。無駄でしようけど質問をしてあげる。貴女はこのわたしの前で、まだ狼藉を働くほど邪悪なのですか？」

革命を止められなかつた彼女だからこそいえる、あがきのようなものなのだろうか。それとも、自分以上に愚かであると認めることはできないと踏んでの大口か。

「… 黙りなさい。貴女如きがこの戦いにかかる権利はありません。」

「あら、どうして？」

ジャンヌは答える。

宮殿で花のように愛でられ。何もわからず首を断たれた。そんな箱入り娘にはわからぬでしようという。我々の憎しみが、理解できるはずがないとも。

しかし、相手が悪かつた。

相手は純粋な箱入り娘だ。好奇心旺盛な少女だ。何を言おうが、興味を持つて質問をするだろう。

「だから余計に貴女を知りたいの、竜の魔女。」

「… 竜… 竜…」

確かジャンヌは、ジルと接触した記録は確かでないにしても、ジルの一方的な妄執があつたよな…

加えて、第四次の冬木での聖杯戦争。そのときのキヤスターはジル。マスターの名前は……雨生龍之介。いや、ここはさすがに関係ないだろう。

にしても、ここまでジャンヌ自身の憎悪を掻き立てるのは、別の存在が必要になるはずだ。そのことも考慮してこれからは行動しよう。

マリーは、わからないことをわかるようにするのが流儀だと言っている。
なるほど確かに、道徳的だ。

完全にわかりきるまで、その事柄について調べたり、探求したり。そういうことを繰り返すことで、やつと謎は一つ消せる。

そういうつた積み重ねが人生には必要だろう。

「だから今の貴女を見逃せない。ああ、ジャンヌ・ダルク。憧れの聖女！」

ジャンヌは戸惑っている。両方……いや三人とも。

「今のわたしにわかるのは、貴女はただ八つ当たりしているだけということ。理由は不明。真意も透明。何もかも消息不明だなんて、日曜日にでかける少女のようでしてよ？
そんな貴女に向ける礼はありません。わたしはそこの、何もかもわかりやすいジャンヌ・ダルクと共に、意味不明な貴女の心を、その体ごと手に入れるわ！」

「……マリー。それではまるで告白だ。それもとても情熱的な。確認だが、真意はそこでないよな？」

ジヤンヌは赤面している。白いジヤンヌだけだが。

：初心過ぎない？かわいいんだけど。

「あ、ご、誤解なさらないで？今のは単に、『王妃として私の足元に跪かせてやる』という意味ですか。」

安心した：でいいよな？なんか、王妃にしては強気な、しかし当然と言われたらそうだと言えるような：

「茶番はそこまで。いいでしよう、ならば貴女は私の敵です。」

そして彼女は、サーヴァントと、ワイバーンをけしかける。

前線には盾を持つたマシユと、横に並び応戦するジヤンヌ。

サーヴァントを相手にしているのはジヤンヌオルタとアルトリア。

けして善戦しているとは言えないものの、ゆつくりと相手の戦力を減らすことができている。このままいけばこちらは持ちこたえることはできるだろう。

「はああっ！」

「甘い！」

マシユとジヤンヌはなかなか：ワイバーンに対して苦戦することは無い様子。
問題は。

「これは面白い。まさかそちらにもう一人のジヤンヌがいるとは。」

「… 黙りなさい、貴方には関係のないことです。」

ジャンヌオルタとヴラド。

そりや確かにおかしいよなあ… 魔女と同じ思想のはずのジャンヌという存在が、敵対しているんだから。

「… !まさかここまで苦戦を強いられるだなんて！」

向こうのジャンヌは少し悔しそうに、いう。

ふと、マリーが動き出したので、目をやる。そして彼女は口を開いた。まるで国民に安堵を与えるように。

「そうですね、語らいはここまでにしましよう。ここは戦場ですもの。ジャンヌ？竜の魔女？貴女は世界の敵でしよう？では、なにはともあれ。貴女が殺した人々への鎮魂が必要不可欠。お待たせしましたアマデウス。あなたらしくウイーンとやつちやつて！」するとアマデウスと呼ばれた人物が、さもずつといましたという感じで出てきて。魔力を急激に高めだす。

… この反応は、宝具！?

「——任せたまえ。宝具 「死神のための葬送曲」
pressure

これは… 敵に対しての重圧！

どうやら相手のサーヴァントらは身動きがとりずらそうだ。それもそうだろう。

ヴォルフガング・アマデウス・モーツアルト。

十八世紀の人物で、世界有数の天才作曲家にして演奏家だ。

そして先ほどの宝具。あれはおそらく、生前に死神に依頼され作つたという曲だろう。実際はそんなこと全くなかつたというのが調査で分かつらしいが。

： 多分この曲が宝具として行使されれば、呪いの効果はまず間違いなく存在する。つまり時間稼ぎするにはもつてこいつてわけだ。

いまのうちに撤退しよう。

今は戦力を温存して、次の先頭に備える。その方がきつといいに決まつていて。

「マシユ！立香をもつて走れ！」

「はい！」

「え？ ちよ、走れるつて！」

それでもサーヴァントに追いかけられる可能性があるんだ、人間の足の速さでは問題がある。

アルトリアが頻りにこちらを見る。言おうとすることはなんとなくわかるので無視を

「マスター、あなたも私につかまつてください。」「嫌です。」

「どうしてですか、今は一刻を争う。判断は早くしてほしい。」
「君どうせお姫様抱っこするでしょ!!!」

第6話

私はここ最近、幼馴染である紅蓮について、驚いてばかりである。

いきなりカルデアという組織へ連れてこられ、かと思えば彼は魔術師なるもので、それでいてほとんど動じずに現状に順応した。

わたしには今まで、ひた隠しにしていたことは、余り驚くことではない。

そもそもいつも隠し事ばかりするもんだから、そのたびに疑つて、食つて掛かつた。
…しかし。魔術に関して、一切知ることは無かつた。それほど「隠すべきこと」な

のだろう。

他に驚くことは、彼の英靈に対する知識の量だ。

相手をみただけで誰かを言い当てるようには感心した。もしくは、手にしているものも。

知識があつたとしても、それほどの芸当は、なかなかできないことだろう。

少なくとも一度見たことがあるのではないかと。頭によぎつた。

まあ、これは私の推測にすぎないし、こんなことをいつまで考へても仕方がないことだ。次のことを考えよう。

マリーちゃん（と私が呼んでいい相手ではないだろうけど、少なくともこの少女のような見た目なのだからそう呼ばせてもらいたい）は、遠くまで来たということと周りに敵影が見えないことから、もう大丈夫だといった。マシユは私をゆっくりとおろす。
 … 紅蓮に今度してもらおつかな。いくら紅蓮が筋肉のない男でも、魔術かなんかで強化？すれば持てるだろう。

「ねえ紅蓮。今度私をお姫様抱っこして！」

「は？ お前… 軽そーだから帰つたらしてやるよ。」

いいのか… 隣の騎士様がなんか怒つてるぞ…

しかし彼女は、嫉妬を変な方向で持っている。色恋沙汰に慣れていないのだろうか。なら、少しは優位に立てるのかな。

ホログラムのように映し出されるドクターロマンも、先ほど相対していた彼ないし彼女らの反応はないという。

そして、この近くに靈脈があるのだとも。

… 今いるメンバーで十分すぎる気がする。

カルデアからマシユ、ジャンヌオルタ、アルトリアという英靈が。

この特異点で出会つたジャンヌ、マリー、モーツアルトという英靈が。

そして、紅蓮が呼んだらしい九人の魔女。

最後の九人が、規格外すぎて、もう何を聞いても驚けない氣がする。今日だけは。
それをはぶいても、戦力としては相當である。なにせ紅蓮だけでも戦闘はできるんだ
し。

「立香ちゃん、誤解してはいけない。一般的な魔術師でも時計塔の魔術師でも、サーヴア
ントを相手に戦つても、勝てないんだから。」

と、これまたホログラム越しにダヴィンチちゃんがいう。

ということは最強の魔術師なのでは？

「馬鹿。俺が最強なら、ほかの魔術師は神だ。」

「紙の間違いじやなくて？」

「レオナルド。あまりからかわいでくれ……」

ふむ。つまり紅蓮はかつこいい、と。

ジャンヌオルタが何か言いたげに、しかし口を開かずにそわそわしている。

：本人が言いたくないのであれば、それは聞き出そうとしても意味がないだろう。
いうべき時には言つてくれるだろうし、それまでは待つことにする。

ひとまず私たちは、森の中にあるという靈脈へ向かう。

その道中で、マリーちゃんが、気を使つてくれたのか、話題を出す。

「皆さん、薔薇の花ことばを知つていて？」

花言葉。少女なら興味津々で調べることも一時はあつただろう。もしくは、ロマンチックな状況にあこがれる夢見がちな少女も。

「もちろんだ。基本的な花言葉としては愛が用いられるが、色によつても本数によつて真っ先に答えたのは意外にも、リアリストであろう彼なわけだが。も違うよな。」

と、少々長めの薔薇トークが始まる。

まさか紅蓮…そこにも知識の興味が行つたのか…

「まあ、流石ね！ 聰明な貴方はきっとおモテになるでしよう！」

「いや？ 全く。」

嘘つき！ ダウト！ ユーアーギルティード！！

だつて、高校に入つてから約三か月。その間だけで何人から告白された！ 私を除いて。

36人だぞ！？ それだけで一クラス作れるからね？

「それならお前もだろう立香。同じ期間の間で、何人から告白されていた？」

「さあ… 数えてないな…」

だつて告白されたことないんですけど？

そして気まずそうな顔を浮かべないで… 悲しくなるから…

「…！マスター、下がつてください。」

マシユが腕を伸ばし、私の動きをとめる。

前にいる生命体が何かはわからないが、おそらく危険なのだろう。私はマシユに迎撃するよう指示を出す。

「…魔獸か…いよいよ本当にフランスかどうかわからないな。グリトニア、頼めるか？」

「ええ…お任せを…」

グリトニアと呼ばれた魔女は、何をするのだろうか。

おっと、私はマシユに注意を向けていなければと目線を戻す。

「立香。戦場を甘く見ないことです。いつ何がおきるかわからない。それが、戦場なのです。」

ごもつともである。ジャンヌオルタは、馬鹿にする様子もなく私に助言をくれた。

馬鹿にされながらだつたとしても、その言葉は深く受け止めねばと思う。

私の判断が遅ければ、他人に迷惑をかけることになるだろう。それだけは嫌だ。

「…敵性体、反応の沈黙を確認しました。」

「おつかれさま、マシユ。」

周りからはもう、敵の影は見当たらぬ。ということなので、

「先輩、召喚サークルを確立します。」

「ん、頼んだ。」

「そつけないなあ紅蓮は。」

マシユは笑っているが……こいつのどこから愛想を見いだせたんだ……
ダヴィンチちゃんがちょっとした（しかし私には必要な）情報を教えてくれる。

英霊のクラスについて。

セイバー、ランサー、アーチャー、キヤスター、アサシン、ライダー、バーサーカー。

基本のクラスはこの七種類。例外はこの二人のジャンヌやマシユのおかげで認知している。全体的なステータスとしてはセイバーが、逆転的なステータスはバーサーカーが持つていてるらしい。

「なら、アルトリアは強いんだね！」

「当たり前だろアーサー王だぞ!!!」

そこまで必死に言わなくとも……相変わらず紅蓮はその手の話が好きだな。

「なあ口マニ。これは本当に必要だろうか。魔力の供給は俺個人で完結しているんだろ？ だつたら……」

「それは確かに疑問だと思う。それでもね。可能な限り英霊の召喚はしておいたほうがいい。それなりに戦力がある、じゃなく、ちゃんとした戦力がある。ほら、後者の方が

安心だろう？」

言われて、紅蓮は納得をするが……それでも孤軍奮闘するきだらうか。

「はあ……仕方ない。今はその口車に乗つてやるよ、慧眼のお医者様？」

ロマニは少しぎよつとしている。

まあ紅蓮の言葉は少し怖いときあるよね……わかる……

そして、落ち着いた状況なので改めてと、マリーから自己紹介の申し出を受けた。

礼儀の正しい内容で、それでいて明瞭だ。

対してモーツアルト。彼のは少々傲慢であるが、しかし人間性を図る意味ではこれもわかりやすい。

「私は藤丸立香。マスター初心者だよ。」

「俺は太公望紅蓮。魔術師だ。」

こんなことくらいしか私たちは言えないのか……まあ名前だつて立派な情報だし、許してほしいものだ。

ジャンヌとジャンヌオルタ、それからアルトリアと九人の魔女らはどうやらしない方向らしい。

さすが、知名度に富んだ彼女らしい……え？ そういうわけじゃない？ そうなのね。モーツアルトはマリーちゃんに罵倒されてなぜか喜ぶ。私にはきっとわからない世

界の住民なんだろうな…

「ジャンヌ。完璧な人間はいない。君は君ができる事をしたんだ。何も悔いることは…といつても無駄だとは思うが、それでも心にとどめておいてほしい。少なくとも一人、君の行動に心打たれた未来の人間がいるんだから。」

紅蓮はそういうところがあるからよくない。本当に。天然のたらしもここまでくれば才能である。

ほら見たことが、アルトリアとジャンヌオルタは今とてもうらやましそうに見ているぞ？

「あそуд。さつきのワイバーンでも焼こうか。」

…あれ食べられるの？倒されるときゲル状の肉しか見えてなかつたけど？

そう言つて、魔法陣を展開している。そこから肉と思しき物体を取り出し、何やら文字を刻んだ。

「紅蓮君。一応質問だが今のは？」

「ルーンだけど？親父に覚えとけつて言われて、大体は使えるんだ。」

ロマニは多分、そそつかしいのだろう。ずっと驚きっぱなし。

ルーン。これくらいなら私も聞いたことはある。

神代の魔法を人間にでも扱えるように降格させた、魔術の原型。

あ、そうか。ルーン魔術は古代の魔術なのか。

「すごいじゃん！」

「それで済まないんだけど立香ちゃん!?」

残念だけど、私には事の重要性がわからないので、驚きは少ない。

肉を食べる。なるほどこれは……うん、おいしい。

アルトリアはものすごくモキュモキュと食べている。いつもの姿を獅子のような大動物に例えるなら、食べてる姿はそう……小動物のようだ。

マリーちゃんは、ジャンヌを聖女だと、好意に近しい信仰を伝える。

それでもジャンヌは否定した。私は聖女なんかではなかつた、と

「私は、私の信じたことのために旗を振ったのです。その結果が、己の血を汚すことだと知らずに……もちろんそこに後悔はありません。自分の行いは、正解ではありませんでしたが、間違いだつたとも思いません。」

その目は、とても熱かつた。

当時の兵や民が、彼女へついていつたのは。彼女自身の瞳の、想いの強さに惹かれたからなのかもしない。

私は……ここまで一つの物事に熱くなれるだろうか。自分の人生を投げ打つてでも。その覚悟が、私には……

少し長い歎談だつたが、お互のこととを知れたよい時間だつた。

マリーちゃんたちに、カルデアの目的を話す。これまでに起きたことも。

「話は分かりました。フランスはおろか、世界の危機なのですね。」

彼女は、形こそ違えど、これも聖杯戦争だといった。

マスターなしでの召喚に対し、いくつかの疑問はあつたようだが、これで納得もいつたらしい。

聖杯戦争で戦うのは七騎が基本。でもこの時代にいるのは、十騎だ。

もちろん無制限というわけではないだろう……多分。紅蓮が変に召喚しなければ。

「しかし、記録によるとかつて十五騎で争つたという形跡もあります。」

マシユ、事態がややしくなるからこれ以上情報を増やさないで！私が困っちゃう！

マリーちゃんは何かひらめいたのか。私たちが英雄のように彼らを打倒するために

召喚されたといった。

「——もしくは、同じく破壊するためかしら。」

ジャンヌオルタは言つた。はつきりと。

その目はどこか。悲しそうである。

「ジャンヌ。君がそう思う理由はなんだ。」

「…相手は私です。それに対抗し得るには、それ相応の力がいります。私には…ええ。わかりますとも。」

ジャンヌオルタは、悲しそうに、物憂げに、そして、自分が経験したかのように言つた。

「…そろそろいうべきなんでしょうね。マスター。」

「そうだな。知つてることは教えてほしい…なんていうとでも？」

紅蓮は、少し楽しそうに笑つている。

この顔はよくない。彼が本気で物事を解決させるときの顔だ。

「ジャンヌ。君が何か隠しているのは当然知つていて。俺の目はごまかせないからな。しかしだ。犯人からトリックを聞かされて興ざめするのは誰だ？ そう…推理の途中の探偵だ。なにせ自分の楽しみを奪われるのだから。確かに犯人からの自供ほど欲しがるものはないだろう。でもそれは、自分の手で暴いてからこそ、楽しいのだよ。そして俺はいま。答えにたどり着いてしまつた。」

「ああ…やつぱり。」

このパターンは今までに何度も見てきたので、慣れっこだ。

「え、それってもしかして私があんたに——」

「これより作戦を伝える。決行は明日だ。そのためにまず、このフランスにいる他のサーヴァントも回収する。アルトリアとマリー、それからモーツアルト。ついてくるか。」

三人は反応が遅れる。当然だ、急に作戦だのなんだのと言つて、すぐさま同意を求める。これは紅蓮の悪い癖だ。

しかし三人、さすがは人智を超えた存在、一瞬で理解したのか、了承の意を返す。

「——待つてくれ、いきなりすぎて、僕には理解が……」

「いずれわかる。少なくとも明日には終わらせよう。この——無意味な復讐の愛憎劇を。」

復讐？ 愛憎劇？ とりあえず何がなんだかわからないので抗議をしたいのだが。

「貴方、召喚しておいて私たちのこととはほつたらかすのかしら。」

「そうなるな。ただし一瞬だ。そしてその間にこの周辺に結界を張つておいてほしいんだ。頼む。勝手なのはわかっているが……」

モルガンは、押し負けた。

紅蓮は伝えるべきことを言うらしい。

「まず、相手のサーヴァントは、狂化の術が施されている。だから戦闘になればまず逃げ

ることを優先しろ。普通に戦えば文字通り死ぬ。もう一つは、俺たちが戻つてくるまでに、ジャンヌ同士でしつかり話しておくこと。いいな？」

ジャンヌオルタは抗議の目でにらむ。ジャンヌは不思議そうにわかりましたという。同一人物なのにここまで変わるのはか‥‥

紅蓮一行を送り出し、マシューと耳打ちで会話をする。

「これどうすればいいかな‥‥」

「わかりません。私は、なぜ紅蓮先輩がこの状況を作ったのか、なんとなく察しはつきます。ですが、状況の改善策は‥‥すみません。」

謝らなくていいのに‥‥

とりあえず私は少し席をはずすことにしてた。理由はもちろんある。

私は‥‥霧廻気を気にしすぎて、どうも話をこじらせてしまいそうだから。

マシューは気を遣うけど、言うべきことはしつかりいえる。だからあの場は、彼女に任せること

私が話をしなければならないのは、魔女の方だ。

「ねえモルガンさん。お話しできるかな？」

「…え、私に話しかけているの？あらそう。存在が矮小すぎていたたたた！！」
突然私に罵倒を浴びせたかと思えば突然痛がる。なんだこれ…

「くつ…あの魔術師め。こうなることがわかつっていたからあらかじめ結界を張つていたのね！」

あの、というのは紅蓮のことだろうか。つまり彼女が痛がつたのは紅蓮の仕業か…

「そういえば紅蓮君は、未来視に似たことができると言つていたな。」

「それを先にいいなさいよこの凡骨！」

ロマンは悲しそうに、わかりやすく肩をすぼめる。

まあ予想をして物事を伝えるのは難しいよね…

そしてさらっと、紅蓮に関する新情報。怖いわ。なんで未来視できるんだよ！

「はあ…で？こむす…立香。話があるのでしよう？言つてごらんなさい。」

今度は恐れて少し優しくなった。すごいな、恐るべし孫悟空方式。

「紅蓮とは、どういったご関係で？」

すると「ふくん？」と、おもちゃを見つけたかのように私を見つめる。

「…そうね、わかりやすく言うなら、私たちは彼の所有物よ。」

「え!」

いやロマンも驚くのか…

「ふふ、わかりやすくつて言つてるでしよう? 詳しくいつてもわかりづらいでしようけど、そうですね。彼は私たちが所有するアヴァアロンという鞘の持ち主です。」

「え、鞘のアヴァアロンだつて!」

私は声に出さなかつたが、心底驚愕している。

アヴァアロン。うん。なんとなくすごい。

ロマンがそれではいけないと詳しく述べてくれた。

アヴァアロンという理想郷と同じ名前を冠するこの鞘は、無限の概念的防御、肅然の必然的攻撃。それらを司つてゐる。そしてその力を發揮させるには所有者として認められる必要がある。その認められた所有者は本来、アルトリアだけだつた。

「…じゃあなんで、紅蓮がこの前持つてたんだろう。」

「あの騎士王から譲り受けて、そのとき私たちが了承したのよ。こいつも所有者でいいかつて。」

「軽い! 軽いよブリテンの魔女!」

その言い方でにらまれるのは当たり前である。そしてまたコンソールが燃え上がっている。

「そうね……マゾエ？ いらつしやい。」

「……に。」

いつの間にいたんだ……いや、これはおそらく、転移という奴だろう。私もこれまでの会話を、ろくに聞き流しているわけではない。

「いいえ、今のは因果へ影響を及ぼした魔法です。」

「魔法、だつて？」

ロマンは相変わらず驚いてばかり。

魔法。魔術と何が違うのか、正直私としてはわからない。そもそも同義だとわたしは思っていた。

「……そうですね、説明はやめておきましょう。盗み聞きするつもりは彼にはないでしようから。」

不敵な笑みを浮かべ、はぐらかす。これがいい女か。

私がその辺の男子高校生なら、即落ち……いや、それはその辺の高校生に申し訳ないな。

訂正しよう、女性慣れしていない男子高校生なら骨抜きだつただろう。

さて。私の質問には答えてもらえたし、そろそろ三人の元へ
「あら、どこへ行くのかしら。」

「お話をまだまだこれからです、立香様。」

悪寒しかしないのはなぜだろうか。これは命の危機に準ずると、心臓が警鐘を…あ、だめだ、ほかにも数人の散らばっていたはずの魔女に囲まれてしまつた。
ええいままよ！

根掘り葉掘り聞くがいい… 骨は拾つてね、マシユ。

「マスター、これでよかつたのでしようか。」

別行動をとつたことにいまだ疑問を抱いているようなアルトリアを視界にいれ、しかし足は止めずに言う。

「よかつたかどうかは今はわからない。それでも、今俺たちに必要なことをさつきと終

わらしておきたい。」

「ねえ、紅蓮？ 貴方はどうしてそこまで焦つているのかしら。」

理由は一つだ。半年弱で人理を取り戻さねばならない。

「おやおや、本当にそれが理由なのかな？ 僕の耳は「まかせないよ？ ん？」

「クズめ。といつてさしあげよう。」

しかしながら、まともなところへ射をするものだ。

「… 立香の誕生日を祝つてやりたいんだ。」

「あらあら、うふふ。」

マリーは恋する乙女のように、笑う。別に不快ではないが恥ずかしいのでやめていた
だきたい。

「そのために来年が必要だから急いでいる、と。」

「そうだクズ作家め。これで満足いただけるか、マリー？」

ええ、とても。その返事をするときの彼女は、わくわくしていた。

町へ近づく。サーヴァントの反応は… うん、ある。これが味方かどうかわからない
のがもどかしいなあ… ！

「… あれを見てください、マスター。」

「うん、いかにも敵つて感じだね。」

わかりやすくてよかつたよ。

ファンタム・オペラ座の怪人

「然様。人は私をオペラ座の怪人と呼ぶ。」

「な……まずいな。俺は彼の作品は小説を一回読んだだけだ。どういつた特徴を持つのかあまり詳しくないぞ……」

それでも、宝具はおそらく音楽に関するものだろうと予測をし、対策を考える。
竜の魔女の命でこの町の支配……か。やけに戦闘を仕掛ける兵やワイバーンやがいたもんだ。

「三人とも、臨戦態勢！俺もできるだけ……ほ、補助に徹し……ます……」

「はい、そうしてください。」

アルトリアが突っ込む。剣を振り上げるが、しかし爪で弾かれる。もう片方の爪で突こうとするが、それはマリーが放つ光で阻止された。
隙が生まれたところへ、モーツアルトの出す音による波動。

「こ、れは。」

よし、後ろへ仰け反った。これは大きなチャンスだ。

「アルトリア！」

「はい！」

強化魔術を、必要じやないかもしねないがかける。

一刀両断を行動で説明しろといわれたら、これが模範解答であろう。

「——来る、竜が来る、悪魔が来る。お前たちの誰も見たこともない、邪惡の竜が！」

そして、言い終わつて、退去する。あつけない、サーヴァントの真価、宝具すら使用できずに退去するとは……。

「口マニ、この魔力は……？」

「これは……！ サーヴァントの魔力量を上回る生体反応だ！」

……さつさと英靈を探し出そう。この先の城に、だいぶよわつてているが魔力反応がある。

「竜殺しを探し出すぞ！」

ドラゴンスレイヤー

瓦礫のすさまじいこときたらありやしない。

「……くつ！」

「待て待て待て、この令呪を見ろ、そして俺を見ろ、お前の味方だ。暫定だがな。」

彼の持つ剣は……なるほど。
そりやあ彼が呼ばれるわな。

「もうじき竜種がここへ来る。サーヴァントの魔力も感じられるから、さっさとここを出よう。」

「なるほど、竜種。だから俺が……」

ぶつぶつと何か言っているが気にしない。

瓦礫を抜け、外に出る。

⋮ 遅かった。

「何を見つけたかと思えば、瀕死のサーヴァント一騎ですか。」

それでも十分な戦力だ。

「マスター、あの竜は……！」

「ああ、本当の竜種、ファブニール……！」

「これはまずい。まずすぎる。どうして防御を得意とした英靈を置いてしまったのか。」

「マリー、モーツアルト、ジークフリート、下がれ！」

俺が展開できる結界で防ぎきれるかどうか、怪しい。あのファブニールの炎は……
「まあいいでしよう、もろとも滅びなさい。焼き尽くせ、ファブニール！」

「俺の結界で防げないなら、ほかに借りたらいいんだよな。」
 他といつても、俺の中で魔力として存在するアヴァロンを具現化して使うだけだけ
 ど。

「すべて遠く、すべて儂く、すべて尊く。」

理に属するすべての干渉を許さず。

理に属するすべての守護の盟約。

真名偽装：終了。

代替真名入力。

真名解放。

ガーデンオブアヴァロン
守る為の理想郷』

「な——グレン君！それは——」

ファブニールの炎は、見事に防いだ。

自分で見事つていうのは少し恥ずかしいけど。

今のは、見ようによつては宝具になりえるだろう。英靈としての。

アヴァロンという鞘。これを展開する。多次元からの干渉を全て断つことができる。

この守りの真価を發揮させるためには、真名を展開する必要がある。
：しかし俺は人間。サーヴアントではないので使用は許されない。

それでも、確かに所有者になつた。ならちよつとくらい借りてもいいだろ？アルトリ

ア。

「かまいません。しかし、貴方の名前でも…」

「できないこともないだろうけど、その時の負担は、大きいだろうね。」

レオナルドが代弁する。俺もその考えで相違ない。

「…ファブニールの炎を、凌いでも…！」

竜の魔女ジャンヌ。今度は怒りの炎でしようか…

「ジークフリート、頼む！」

「任された！ 幻想大剣——」

「ファブニールがおびえて…まさか！」

「——天魔^{ムンクル}失墜！」

邪竜破れたり！

⋮ とまではいかず。

それでも撤退をさせるくらいにはダメージを与えただろう。

実際ジャンヌたちは撤退する。

「…ジークフリート。君もなかなかダメージを追つていい状態みたいだな。」

「…まあ、な。しかし今はそれどころではない。」

おっしゃる通りで。

俺たちも撤退、もとい次のサーヴァント回収だ。

第7話

邪龍を迎撃、撃退をした俺たちは、次の町を目指して移動をする。

町にサーヴァントがいるという確信はないので、正しくは魔力反応のある場所への移動である。

一つ、除外しなくてはならない問題がある。

ジークフリートの傷だ。

「： そうだな、これはおそらく呪いの類だろう。」

「私の宝具でも、少ししか癒せないわ。」

解呪： 洗礼詠唱などできればいいのだが。

こと呪いに関してはなんとも。」

「みこーん、と参上、できる良妻、玉藻の前。ここにあり！ ですわ。」
どうして？

いや確かにできるね。呪術の類操ることは。

そうじやねえ！

なんであるの？

「そこはほら、：愛の力、でしてよ。」

そんな胸を張られても。

…こいつ、式神を貼りやがつたな。いつでも転移できるよう、あらかじめ移動用の式神を用意していたに違いない。

「流石旦那様、察しがいいですわ。」

「嬉しくない。それより早く解呪をだな、：」

もーわかってますよ、と。尻尾を振りながら、術をかけた。

玉藻の前。彼女は本来の力を出せない状態にある。理由は九尾のうちの数本の妖力しか持つていらないから。

…のはずだが、こいつの尻尾はしつかり九本ある。

本来彼女が英霊として呼ばれるのなら、「月の戦争」での召喚例のように、一本分の力、九分の一の力でなければならない。

さて、ここにいる彼女の尻尾は？

1, 2, 3, 4, … 9。

しつかりそろっている。

魔力的に見ても、多分神とか越えてるんじやない？ つてくらい。

「お前本当に大丈夫？すぐ裏切らない？」

「…何度も言つてはありますか。私は、旦那様にすべてを捧げました。あの時のような考えはもう、ありませんゆえ。」

「信じていいのだろう。もとより信じる以外選択肢はないけど。」

「さてはてなんのことやら♪ところで、解説が終わりましてよ。」

ロマニの質問をかわすお仕事ができる良妻。うん。いつ結婚したのかわからぬ。けれどそれはあとで話し合うとして。

「これは…！ああ、これなら、問題なく宝具を使えるだろう。」

それはよかつた。

しかし、次の問題がある。

多分だけど、嫌な予感がする。

「紅蓮君、そちらに二騎のサーヴァント反応だ、十分警戒してくれ。」

やつぱりか。できれば戦闘は現時点では避けておきたかったのだが、やむをえない。

「でしたら、私にお任せを。」

玉藻…お前…何ができるんだ…

何やら術式を刻んでいる。四か所に。これは所謂結界か…？

「はい、要塞にござります！」

「籠らなくていいんだけど。それと結界だよね……
さて、ここで玉藻の前について復習をば。

妖狐である彼女の出生は……出典は封人演義の姐己。彼女自身はこれを否定し、記憶を失い人として転生したアマテラス、と説明をした。

しかしあ、日本に記録されている玉藻の前が、傾國のそれに近しいことを行つた人物であるのに変わりはない。玉藻の前としての最後は殺生石。彼女を召喚しようと思つて使う聖遺物はこれがいいだろう。

重要なのはここからだ。正直出生とかそこまで必要じゃない。要するに、なぜ結界が籠城に向いてるか、だ。

出典として、アマテラスの話をした。そのアマテラスは……まあなんだ。日本最初の引きこもりと言つて過言でない。

だからこそこの結界である。本来の彼女の宝具でないにしても、さすがはキヤスター。陣地作成をそつなくこなし、ただの逸話を宝具にまで至らしめた。

「はい、出来上がり、と。」

「……で？ これでどうやつて対抗するのさ。」

「文字通り、引き籠る籠城するのです。」

怖い…

間も無くして、二騎のサーヴアントはやつてくる。

「これ、は…」

片方の英靈は、見た目がわかりやすくバーサーカーしている。うん、間違いなくバーサーカーだな。

もう片方は…なるほど、マリーを見る目で分かつた。

シャルル＝アンリ・サンソン。処刑人一族であり、マリーの処刑を行つた人物。

彼自身は、処刑をよく思つておらず、廃止を望んでいた。にも拘わらず、一度は恋仲にあつたデュ・バリ－夫人をも処刑するという、悲しい人生を送つた…悲しいというのは、俺の考え方だから、本当にそう思つていたのかは、わからない。むしろ、悲しい

という言葉では表せないかもしねれない。

「…貴方は。」

二人は、昔の恋人にでも出会つたかのように見つめあう。
「皆んぞちゃんな、足。つざビジやなかつたう」、ナゾ。

「…特別な運命を感じる。だってそうだろう？処刑人として一人の人間を、二回も殺す運命なんて、この星では僕たちだけだと思うんだ。」

そこは激しく同意する。処刑人が英靈になるつていうのも正直おもしろい。しかし、昔からの出会いは必然ごつこか偶然ごつこか確忍する假はないので

バー サー カー らしき サーヴアン ト
ア リ リ リ リ リ リ リ リ リ リ !!!

攻撃は虚しく空を切る。 ように見えた。

しかしあれは、何かを対象に明らかに攻撃をしている。

「幻覚を見せているのか……」

玉藻はにこりと微笑む。うん、かわいい。

じゃなくて。

籠城戦と言つた意味がわかる

天岩戸の前で行われたのは舞。中にいるアマテラスを誘い出すために、ずっと舞を踊つていたのだ。

それを、魔力切れを起こすまでさせる気なのか……？

流石に相手もここまで馬鹿では……あ。

「今のうちにたたくぞ！」

「え、どうして？」の中からでるのかしら。」

マリーは不思議そうに問うが、モーツアルトが説明したのだろう。攻撃の準備をする。

籠城戦は何も、全員に対してではなかつたということか。

バーサーカーはどう考えても危険だし、もとより相手のサーヴァントは狂化が施されている。二体同時に相手するのはたしかに骨が折れる。

でも、一体だけならまだ、可能性は高い。

いける。この結界の効果もあつてか、魔術はいつもより調子がいい。

「投影、開始」

「やるというんだな、この僕と！」

「やるど、いうんだな この僕と！」
「マスター、貴方はなぜそこまで戦闘を… いえ、聞かないのはわかつています。なので
私も行きましょう。」

余剩戦力だな。ごめんよサンソン。今はあつけなく散れ。

「まさか、私の幻視の術を!?」

「どういうことだ……九尾としての本領を持つ玉藻の呪術を跳ね除けたとでもいうのか！」

「キヤスターが二人もいるのに、結界が崩れた！これはまずい……！」

「何を悠長に語っているクズ人間！このままでは僕たちに圧倒させてしまうぞ！」

サンソンの言うとおりだ……バーサーカー一人だけの力で、結界を破られた。それも、キヤスターが二人いたのにだ。

⋮ 非常にまずい。

ジークフリートは竜^{ドラゴン}_{スレイヤー}殺し。

竜種に対してのカウンターだ、今は荷物でなくとも頼りにはできない。

マリーはそもそも戦闘向きでない。サンソンに対しても戦いきれるかどうか……！

モーツアルトは音楽家、もしろ一番荷物かもしれない。

玉藻は近接戦闘に持ち込まれたら何もできない。せめて距離を稼がなければ……

アルトリアは、あのバーサーカーに見覚えがあるようだ。

⋮ そうか、ランスロット……ランスロット！？

「はい、彼は間違いなくランスロット卿です。第四次の聖杯戦争にて、彼と戦闘になつたことがあります。彼がああなつたのには……私に責任があります。」

否定したいところだが、それは彼女の騎士としての心を貶すことになつてしまふから、黙つておこう。

さて、相手が誰かわかれれば対策なんてどうということは無い。ようは触れさせなればいい相手と、触ればいい相手だ。

「だつたらこうしよう、アルトリアと俺でバーサーカーを止める。ジークフリートとマリーは、サンソンを相手になんとかやつてくれ。玉藻はできるだけ後方支援できるよう位置取りを、モーツアルトは…うん。」

「扱いが僕だけひどくないかな。」

マリーだつてサンソンだつて仕方ないって言つてるしいいだろ。

そんなわけで各々が走る。どれほど戦闘の苦手なマリーでも、少なからずサーヴァントとしての戦闘能力はあるんだというのがはつきりわかる。何せなんの魔術も使つていなければ、目視できない。

この目があつて本当によかつたと思う。魔力を流すだけで魔術を使えるというのが便利すぎて…

「A r r r r r r r r r r r r r r r r !!!」

「つと、あぶねえな！もう少しで半身スライスだつたわ！」

「マスター、考え事は後にしてもらいたい。相手は狂乱状態だとしてもランスロット卿

です、しつかりと彼の動きを見るんだ。」

肝に銘じよう。いくら剣道をしていたとしても、実戦経験はあまりないのだから、できうる限りの警戒は必要だ。

音速を超える英靈との戦闘は、肉体に対しての負荷が大きい。最大限の魔術の行使をもつてしても、肉体疲労を誤魔化していても、とても疲れる。まして相手は狂戦士。バーサーカー後のことを考えず振り回すその剣は、一つ一つが鈍撃だ。

狙いが甘くとも当たるのはまずい。だからよけることに徹しているが、それではジリ貧だ、いつかのタイミングで有効打をいれなければ勝つことはできない。

しかし、アルトリアの宝具が、向いていない。

簡単に言えば全体に対する攻撃だが、この様に一対一の状況であれば、エクスカリバーではだめだ、もつと…簡単に詠唱ができる、かつ即攻撃できるものが…

「三叶草」

もうだめだ。目の前にランスロットの剣が迫り、よけきれない……！

—マスター!—

グサリ、と。艶やかな血しぶきと共に音がする。

目の前には、血だらけで、膝から崩れ落ちたアルトリアがいた。

「…ふ、う。グレン、無事、ですね…それ、は、よかつた。」

どうして？俺なら別に魔術で、そう簡単に切れないほど強化している。切れたとして
もかすり傷で済んだ。だというのに。

「それでも…貴方を、傷つけたくは…無かつたのです。」

そうか。ありがとう。

でもね…それは俺もだつたんだぜ？

「…ランスロット、覚悟するんだな…！」

…いけません。迂闊に放置をしすぎてしまいました。

騎士王が傷を負うだけで、旦那様がここまで発狂するとは…正直、私の想定外でし
たわ。

しかし、相手はかくもバーサーカー。それを相手に押し勝つなぞ…^愛信念とは怖いも
のですね。

ですが、私はこの光景を知っています。何度も見たのだから。それをなぜ、繰り返し
てしまつたのか。己の不甲斐なさで今すぐ退去してしまいたいくらいです。

そうでした。今すぐにでも騎士王を治療しなくては……

「……私のことはいい、玉藻の前。早くグレンを……あのままではよくない……」

「そんなこと、百も承知ですわ。でも、今の状態でしたら、貴方でなければ止めるることはできません。」

「……まるで知っているような言い方ですね。もしかして貴方も……」

騎士王の言葉はどこか引っ掛かりますが、そこはそれ。今は旦那様のための行動を優先しましょう。

「……さあ、行つてください。」

「……感謝します。」

「……まつたく。世話の焼ける旦那様ですね。」

玉藻の前に傷の治療を施してもらつた。それはいい。何なら感謝をする。

しかしだ。グレンという人は……私の記憶に全く相違ない人物なのがとても嬉しい反面、悔しい。

それでも、何を言つたところで変わらないのは承知でも、言わなければならぬ。

「マスター、無茶をするな！」

「……心配するな、今落ち着いたよ。」

彼は返事をし、笑顔で振り返った。

完全に無防備な背中を見過ごすほど発狂しているわけもないランスロット卿が、グレン目掛け剣をふるつた。

「A r r r r r r r r r r !!」

「サー・ランスロットよ。貴様の宝具は「触れたものを自分の宝具にする」といったものだつたな。しかしだ… そんな魔術、とつくにこの右腕に刻まれてるんだ。」

ランスロットの振り下ろした剣を、右手で受け止める。

右手からは鮮血が流れるが、しかし指はちぎれず、顔はいまだ笑顔で、剣を奪つた。いや、取り返した。

それの意味を察したのか、急いで飛び退き、兵士の死体から剣を取る。

… バーサーカーとして現界したランスロット卿は、手にしたもの全て己の宝具にする。その能力を遺憾なく發揮し、その剣をも宝具にした。

そして、ありつたけの魔力放出と共に突進で距離を詰める。
「ふつふつふ、私のことをお忘れですか？」

既の所で、玉藻の前が術を行使した。

今のランスロット卿が有する対魔力では、到底無効化できない。つまり、身動きがとれていないのだ。

アロンドライト

「… 最果てまで輝け。湖上の精霊の加護よ。無毀なる湖光」

「A r r r r r . : t h u r r r r . . .」

「… 真名を開放しなくとも、本来の輝きを用いることができるのなんともいえないが、やはり彼は素晴らしい。」

「… せめてやすらかに眠るがいい、サー・ランスロット。」

「… と、彼を遠くから見てているだけではよくない。きちんとと言うべきことを言わなくて

は…」

「グレン。お疲れ様でした。」

「… ありがとう、アルトリア。やつぱりこれはダメだね… サーヴァントの持ち物を使つても馴染まなかつた… 最初から投影したこつちですればよかつたよ。」

全く、こちらの心配を余所に、あろうことか私の剣の方が使いやすいと言う。

グレンらしいといえばそうだが。

「しかし、安心してはいけない、サンソンの方が…」

「あら、グレン？もうこちらは終わりましたよ！」

フランスの王妃は、とても可憐な笑顔で申された。

正直、ランスロットの宝具を使うことになるとは思わなかつたが、案外いけるものだ

な。魔術刻印をしつかり確認しておいてよかつた。

： なんでこんな魔術があつたのかはわからなかつたが。

近くに兵士の死体があつた。これらはおそらく、サンソンとランスロットの仕業ではない。

つまり、もう一人倒さねばならないサーヴァントがいる。

「よく気づいたわね、坊や。」

「嫌でも血の匂いには敏感でな。」

本当は彼女とは思わなかつたけど。

： さて、できれば今のうちに仕留めておきたい。残しておいて得するわけがないから。

「あらあら、ふふふ。私と勝負しようというのかしら、坊や。」
「勝負はしない。それでも戦いに勝つ。」

玉藻を見る。

良妻なら俺の意図を汲み取れるだろうな……って本当に伝わつても怖いわけだが。
一応彼女は頷いた。おそらく俺のすることはわかつたろうし、合わせることもできる
はずだ。

： 吸血鬼に対しても意味がない。直接攻撃しようにも、サー

ヴァントとして伝承がより強固なものとして、肉体に傷をつけることはまず不可能だろう。

だとすれば、浄化すればいい。

サーヴァントならば強制退去なるものがある。

ほら、冬木の特異点でもクーフーリンがそれを受けていただろう？それと同じことをすればいい。そして対象は吸血鬼、だから浄化だ。

「玉藻！」

「お任せあれ！」

うん、思つた通り、カーミラの身動きを封じてくれた。

彼女は微動だにしない自身の体に戸惑いを隠せていない。

今までの戦闘で分かったことは総じて一つ。サーヴァントに宝具を使わせる前に倒す。

これができれば俺でも勝てる。身体が宝具に觸れる場合は……うん！

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。

八方の門は開き、王冠より出で、王国に至る三叉路は逆流せよ。

開け、
枯らせ
開け、
枯らせ
開け、
枯らせ
開け、
枯らせ
開け、
枯らせ
開け、
枯らせ
開け。

繰り返す都度に五度。

ただ、欠けたる刻を拾得する。

——告げる。

汝の身は無きものに、汝の行く末は座の元へ。

聖杯なぞ取るに足らぬ。この意、この理はわが意思の物。

誓いを何処へ。

我は常世總ての善と成る者。

我は常世總ての惡を敷く者。

汝三大の言靈を纏う七天、

抑止の輪へと帰れ、天秤の外の者。」

駄目だ疲れた……本当はメデイアの宝具でも使いたかつたけど……契約しなおさな
きやいけないからやめておいた。
しかしこの詠唱も、高速でしても一秒かかった。

「……いえ、一秒でもすごいと思うのです、この良妻は。」

「そうだろうか。」

「当たり前だろう?!自分の契約下にないサーヴアントを、強制退去させるほどの魔術だ
ぞ……普通ならそもそも詠唱しても発動できないし、できたとしても大量の触媒が必要

だし、術式の補助有りにしても時間がかかるんだからね!?」

まあ否定はしない。むしろ自分が一番驚いている。

なぜ成功したのかわからないし、この詠唱は今まで知らなかつた。なのに、こうすればいいのではと思いついた瞬間に、詠唱が頭に浮かんだ。

⋮ 今はまだ考えるべき時期ではなさそうだ。

「ひとまず、進もう。ジルはガン無視の方向で。」

「それでいいのかしら⋮」

「かまわない。あの町には後で、支援の要求のためによろうと思うからね。」

さて⋮ この先にいるサーヴァントが、どんな伝承を持つているのかとても楽しみだ⋮：

「僕が少し考えたところでは、もし聖杯の持ち主が竜の魔女だつたとしたら、そのカウンターとして聖女が召喚されているはずだ。」

「なるほど。聖女の候補はたくさんあるが、敵側にマルタがいたし、彼女は除外できるな。」

⋮： 彼女は敵だつたのか。」

「一応な。でも⋮： うん、立香たちが倒したみたいだ。」

「そうか⋮： 彼女には助けてもらつた恩があつたので、感謝をしたかつたのだが。」

「… つと、話の途中だがワンダーリングモンスターだ！… 失敬、だが、敵の反応がする。
氣を付けてくれ。」

ロマニの、少しユニークな一面だな。

少しで済んでないけど。

： まったく、いくらワイバーンを狩れば終わるんだ！

しばらくの間は、進んではワイバーン、進んではワイバーンの繰り返しだったが、そ
のワイバーンも見えなくなり、まともな雑談をしながら歩くことができた。
「そういえば、モーツアルトはマリーに、告白したんだよな？」

「その話を今するかなあ!?」

「まあ紅蓮。貴方も知っていたのね！」

「かなり有名な話だよね。でも、日本でもその話を聞いていたのかい？」

「いや、興味が湧いた人物に関しては、それこそ資料すべてに穴が開くほど調べなければ、気が済まなかつたんだ。」

「知的探求心にあふれていたんだね、君は。」

「ええ、そうよ。彼が六歳で、私が七歳のころ、転んだ彼に手を差し伸べたら、キラ、キラした目で私を見つめて、『ありがとう、素敵な人。僕はアマデウスと言います。もし、貴女のように美しい人に結婚の約束がないのなら、僕が最初でよろしいですか？』」そう言つてくれたの！あんなにときめいたのは、生まれて初めてだつたわ！」

「まさか後世にまで伝わつているとは… 悪夢だ…」

「うふふ、それはそうでしようとも。わたし、嬉しくつて嬉しくつて方々に広めたんだもの！」

「君のせいいか！君のせいだつたのか！断つたクセに、なんて魔性の女なんだ！」

「それは仕方ないわ。だつてわたし、婚約相手は自分では決められなかつたのだし。」

「それに…」

「それに？」

「その後のわたしの人生を知つていてるでしよう？わたしはあれで良かつたの。断つて良かったの。だから貴方は音楽家として多くの人に愛される事になつた。だからわたしは愚かな王妃として命を終えた。しようがないの。しようがないじやない。だつて

わたし、いつだつて恋に夢中なんだもの。わたしはきっとフランスという国に恋をしていたのね。人々を愛さず、國そのものしか愛さなかつた。そんな風に思い上がつた女だから、最期はあんなふうに、國民たちの手で終わつたのよ。」

「： マリー。それは違う。違うよ。」

「あら、何が違うのかしら、紅蓮？」

「： 君がフランスを愛したんじやない。フランスが君を愛したんだ。」
彼女は、嬉しそうに微笑んだ。

それでも、疑問に思うことはあるらしい。

なら自分は、愛された國に殺されたのか。
人

「人間とはそういうものだ。愛情とは簡単に憎しみに切り替わる。君は愛されたからこそ、人々に憎まれたんだよ。」

モーツアルトの語ることに、俺は同意した。

： 愛も、憎しみも。相手への関心だ。関心がなければ生まれない感情だ。
だからこそ民衆は愛し、憎んだ。

一つ気になることができた。これは、英靈である彼に出会わなければできない疑問であり質問だ。

「お前はまだ、マリーのことが好きなのか？」

「まさか。彼女に向ける情熱はもうない。彼女は僕の運命にとつて、特別な分岐だつただけさ。… そうだな。もし僕にまつとうな人生があつたのなら、その分岐はあるのプロポーズだ。君たちの言う人類史の礎石と同じだよ。ヴァルフガング・アマデウス・モーツアルトという男は、どんな選択をしようどこうなるだろう。たとえ何があるうとも。どんな恋人に出会い、どんな友人を得て、どんな幸福を掴もうとも。 僕はこんなふうに音楽に身を捧げて、人間としての徳をすべて切り捨てるクズになつた。でも、ただひとつ。そんな僕の運命をもし変える人間がいたのなら、それは彼女だったのでは、とも思うんだ。」

「それはもはや、愛の告白だな。」

その言葉を気に、場の雰囲気は一転した。アルトリアは過去のことを思い出しながらくらいい顔に。ジークフリートはなんと表現していいのかわからぬ顔に。玉藻の前は体をくねらせて「もちろん私は旦那様を愛しておりますとも。」と言つてゐる。マリーは少し嬉しそうに頬を赤く染め、体をくねらせる。

照れる表現は体をくねらせる以外にないのか？

：ま、こいつらがこれからどうなると、俺としちゃあ： 当人らが幸せで、周り

もそれを祝福できる状況ならいいのではと思う。

「すまない： 君たちがいま素晴らしい話をしているのは理解できる。できるのだ

が……敵がやつてきたようだ。すまない……空気を読めない男で、本当にすまない……
フォウが励ますようにすり寄つてゐる。いやつだなお前。

「――はつ！僕の役割をジークフリートに奪われてしまつた！でもボクが放心しちやつた気持ちもわかつてほしい。ほら。同じタイプだと思つていたダメ人間ですよ、実は深い人生観を持つてる偉人だつたらそりや驚くよね？」

「ん」、そこは安心していいよドクター。僕も貴方にはシンパシー感じてるから。基本、人間的……というか、ひとりの成人としてろくでなしでしょ、僕たちつて。」

「うん、ありがとうアマデウス！こんなに嬉しくない慰めは初めてだ！」

そんなことより一人でワイバーン蹴散らしてせめての罪滅ぼしをと奮闘してるジークフリートの手助けしてあげて？

戦闘が終了し、ロマニにサーヴァントのいる街を探さることにした。最初からこうすればよかつたのかもしれない。

： テイエールという町にどうやら、二騎の魔力があるらしい。それが味方であることを祈ろう。

その方向へ進行を進めていると、何やら吹き荒れる火と、最悪な音楽が聞こえる。

「このつ！この、この、このつ！ナマイキ！なのよ！極東の！ド田舎里斯が！」

「うふふふふ。生意気なのはさて、どちらでしょう。出来損ないが真の竜であるこのわたくしに、勝てると思いで。エリザベートさん？」

： エリザベートと、一緒にいる少女。

つまるところ、二人の少女が喧嘩をしていた。

エリザベートももう片方の少女も、一応カルデアにいるので、問題なく認知できる。

もう一人の少女は清姫。憎悪たつた一つの、されど大きな愛で、竜へと変化した。

「聖人ではないな…」

とにかくこれ以上喧嘩がヒートアップしないよう止めに入る。

二人を引きはがすので体力を使うなんて… できれば一切喧嘩しないでいただきたい。

「二人とも、喧嘩をやめろ。」

「何か言つたかしら子犬。」

「無謀と勇気は違いますわよ、猪武者ですか？」

「… へえ。」

爬虫類の苦手なものはなんだつたかな…？

「はあ… まつたく。そろそろやめてはどうですか？ 清姫さん。」

「貴女は…！」

なんだ？ 同じ日本の英靈だから知り合いなのか…？

これで喧嘩が終わるならもうなんでもいい。

今のうちにエリザベートを嗜めておこう。

「突然押し掛ける形になつてすまない。俺は太公望」

「ええ知つてるわ、カルデアのマスター、紅蓮。貴方が言いたいこともわかっているの。
もちろん協力してあげる。でも、一つ条件があるの。」

なんでき。

条件とは言われても…： 答えれる内容であることを祈ろう。

「カーミラを倒しなさい。」

「もうすでに終わつたんだよな…？」

「なんですって!?」

「彼女はまさに、目をひん剥いて驚いていた。
して、この様子なら清姫の方も…」

「ええ、もちろんお供いたします、安珍様。」

「俺は安珍ではない。二度と間違えるな。」

清姫ははつと目を見開き、勘違いに気づく。

「そんなわけで… どういうわけかはわかりたくないが。見方を得たことだし、そろそろ次のサーヴァントを探しに行こう。」

「あら、それなら心当たりがあるわ。」

「そうですね、確か… ゲオルギウス、でしたか。」

⋮
聖ジョージ? まじか。

一応竜の退治に関する伝説もあるし、聖人だし… なるほど。

「どこにいるかわかるか?」

「残念、私たちとは逆の、西側にいます。」

「よし、走ろう。」

全員が嫌がつたが、ライダーであるマリーだけは、快く引き受けてくれた。

マリーの出す馬の上に乗る。乗馬自体が初めてだし、女性の後ろに座るのは…

「早く捕まらないと落ちるわよ？」

「ん、ああ…」

落ちたくないのでちゃんとつかまります…

「マリー、できるだけ急いでくれ。嫌な予感がする。二つも。」

「ええ、最初からそのつもりよ！」

この場にいると危険が山ほどあるがそれだけじゃない。

向こうも…危ういかもしれない。

第8話

町の西側の門まで辿り着いた。統率のメインはここから行われているのだろう。町の人らは、西に近づくにつれて減つていて、つまり避難の支持を受けているということだ。そしてこういうことは、慣れている人物でないとできないだろう。

「ゲオルギウスというのは、貴方が。」

「いかにも。そちらは……ええ。わかりますとも、カルデアの方よ。」
そうか……だつたら話は早い。

と言いたいところだが……

「……ワイバーンの襲撃か？こここのところ激しいな。」

「いや、それだけじゃない。あいつもいる。」

ワイバーンの群れ。その奥にワイバーンを使役する彼女。
ジャンヌ・オルダ
竜の魔女。

「流石にこの数はきついか……！」

「せめて貴方方達だけでも！」

「それはいけないわ。」

マリーが、前に出る。

「…私はきつと、こういうときのために召喚されたのだわ。」

「よくない。この流れはよくない。こいつはきつと…俺の望まない選択をする。呼ば

「敵を憎んだり倒したりするんじやなくて。人々を守る命として喚ばれたのです。マリー・アントワネットの名にかけて。この街は、わたしが必ず守りますから。」

「マリー、それは許さない。君が俺のサーヴァントでないとしても…一人だけ先にさよなら、なんて許さない。」

逃げることは簡単だ。見捨てることも。それでも守りたいから、彼女は一人で残るといつた。でも、その気持ちは俺も同じで、守りたいからここにいる。それなのに、一人を捨てて大勢を救うのは、それは守れていらない。

一人の犠牲も出さないなんてのは難しいだろう。それでも…一人も犠牲にしたくない。

「…準備はいいかアルトリア、清姫。」

「ここに、マスター。」

「いつの間に!?」

「もちろんです、旦那様。」

アと清姫となるよう頼んでおいた。

実際嫌がつていたのはモーツアルトだけだつたし……かといつてあいつにも理由はあつただろう、あとで聞いてやるともさ。

大軍を相手にすることは思つていなかつたが、好都合だ。
アルトリアの宝具は対城宝具。言わざもがな、最大火力ならば星をも碎ける。流石神造兵器。

清姫は、安珍を追つて鐘に閉じ込め、炙り殺したという逸話から、その身を真の竜に変える。そのとき吐く火は……数えきれないほど焼けるだろう。

「令呪を持つて命ずる、宝具に魔力増強だ！」

カルデアの令呪は、本格的な令呪としての機能を持ち合わせていない。魔術的な補助はできるが……絶対的な命令に関しては三画つかわなければ意味をなさないだろう。正直、ここで二画失うのは惜しいが……仕方ない、後のことは後で考えよう。

そんなわけで……アルトリアと清姫の宝具がワイバーンを消し去つたところで、本命のおでまし、か。

「……これで五人。見込んだ者ほど早く脱落するとは、皮肉ですね。」

「人は美しい花ほど早く摘むからな。」

彼女は表情をゆがめる。その花を摘んだのは俺だと睨んでいる。

：まあ。間違いではないだろうけどさ。

竜の魔女は問う。なぜそこまでしてこの国を救いたがるのか。

「決まっているじゃない、この国を愛しているからです。」

「ええ、そうね。確かに私は、この国に殺されました。ですが、それは貴女も同じでしょ

う？」

奥歯をかみしめる音が伝わってくるのではと思うほど、強く歯噛みをしている。

否定はできないだろう。その事実を最もわかっているのは、ほかでもない彼女なのだから。

「： かまいません、貴方にはもう、どうにもできないことはわかっています。ですから、私は見逃します。ですが、次に会えば必ず——殺します。」

そう言つて、ジャンヌは帰つていく。

： あの雰囲気は、本当に怖いな： これから先も、あんな恐怖に向き合わなきやいけないのか。

「それでも、俺が選んだ道だ、やつて見せるさ。」

「グレン？ 何か言いましたか。」

「ううん、なんでもない。さ、立香たちのところへ戻ろう。」

道中はもちろんワイバーン狩りだつたわけだが…
うん、結界は安定している。やっぱ神秘が関係してるんだろうか…

「あ、紅蓮！ おかえり！」

「先輩、お疲れ様です。」

「二人が小走りでやつてきた。犬か…？」

「ところでグレン君。聞きたい事があるんだ」

「なんだロマニ。」

「どうして九人もサーヴァントがいるんだい!?」

「皆聞いて欲しい。今日はもうじき夜だからもう一日ここで過ごし、明日。ジャンヌオルタのところへ行こう。」

「質問に答えて！ あとその意見には同意だ！」

うるさいやつだな全く。マシユ含めて十人だろいい加減にしろ。

して、結界の中はやはり安全すぎるし、向こうももう手出しをしてくるとは考えずらい。なので安心して雑談が行われていた。

俺は…あまり得意ではないので、久しぶりに魔術の研究でもしておくか。

「ほう、聖女マルタが… そうでしたか。」

ゲオルギウス、というサーヴァントが、少し悲しそうにつぶやいた。

紅蓮たちが現地のサーヴァントを探しに行つていた間に、敵であるライダーのマルタが攻めてきた。

マシューと二人のジャンヌのおかげで、何事もなかつたけれど…

狂化されている？状態にしてはどこか、こちら側の意思を感じていた。
でも、サーヴァントというのは主には逆らってはいけないのだろう。私にはその辺があまり理解できていないうが、普通の人間同士の主従関係で考えれば、そういうことなのかな。

紅蓮は明日、とうとう敵陣を責めると言つたが、私はどうにかして和解できないかと考えている。

： 甘いかもなとは、自分でも思う。それでも、どちらかが勝つということは、どちらから死人が出る。戦争とはそういうもの。

それだけは嫌だ。わがままかもしれないし、できないうことはわかっている。でも…「立香。心配するな。お前はその責任を背負う必要はないんだから。」

「でも… 紅蓮だけにおしつけるなんてできない。私は… 紅蓮と一緒になら、大丈夫だから。」

私は一生懸命笑顔を作る。

紅蓮だけに世界の命運を背負わせるなんて、そんな卑怯な逃げ方はしたくない。

だつて、最初に話を聞いた時から決めていた。紅蓮と一緒に世界を守るんだつて。

「… 紅蓮、絶対成功させよう。失敗しても、責任は一人だけじゃないから、無理せず頑張ろう。」

「その言い方はあまりに不格好だ。俺が訂正してやるよ… 成功させる、絶対に。責任なんてどこぞの知らないやつにでも擦り付ける。俺たちの未来は、今を生きる俺たちが決める。」

… やはり、紅蓮は格好いい。私が言えないことを、言葉にして。私だけじゃないほかの誰かも、一緒に導く。でも、先頭に立つんじやない。横に並んで一緒に進むべき道へ進む。

「… あーもう！やつぱり好き！」

「わかつたから飛びつくな！」

よし。

頑張ろう。

ジャンヌとジャンヌオルタの二人は、相変わらずの様子だが、少しは会話が成立しているようだ。これもマシユが一生懸命いろんな話題を頑張つて振つていてるからだろう。流石ですマシユちゃん……

「ハツ、やつぱり田舎でぬくぬく育つてきた貴女には理解できないでしょうね！」

「な、そんなことは……貴女だって、人のことを馬鹿にして、楽しいんですか！」

「お、お二人とも落ち着いてください！」

うん。最初よりはましだね！

つといけない。私はこれから起こりえることを想定し、備えなければならぬんだから……とはいっても、自分ではなにもできないわけで。

カルデアによつて作られた魔術礼装。私が今着ているものは、サーヴァントを治療させたり、攻撃力を上げたり、普通では回避できないような攻撃を、無理やり回避させるという、この三つの魔術が編みこまれたものを着てゐる。この礼装がなくてはやはりなにもできない。だからこそ、紅蓮をすごいと思う。魔術礼装の補助なしで魔術を使つて、自分で戦つたりサーヴァントを強化したり。

私も、戦えるほどでなくともいいから、自分で魔術を……あれ？ そういうえばマーリン

が

「君の魔術回路は無意識のうちに開かれている。」

と言つていた。多分、魔術とやらを使うのに必要なことなのかな。だつたら…：

「玉藻ちゃん！」

「なんでしよう？」

「魔術を教えてほしいんだけど…： いいかな。」

彼女は笑顔でこちらを見て、了承してくれた。

「ですが…： 私が使う魔術は、あまり貴女向きではありませんよ？」

「どううと…？」

「そうですね…： 貴女にお教えするとすれば、治療に関するもの、でしようか。」

なぜかを聞いてみれば

「貴女が直接戦闘することは旦那様が望んでいません。かといって、何の役にも立たない術をお伝えしても、貴女は満足がいきません。でしたら。ご自身に使って、ほかの方にも使える、そんなものがいいと思いました。」

なるほど納得がいく。

確かに私が戦闘することになれば、紅蓮が更に前に出ることになりかねない。それは余計危険だから良い判断とは思えない。

他にも、敵に對して行使するタイプのものを教えてもらつたとしても、私がまともに発動させることができるか、発動できただとしても、効果が低ければ余計にひどい事態になる。だからこれもよくない。

「それに、もし貴女が治療を覚えて、もし旦那様が手当てを必要とする際……少しでも近づけますでしよう？」

なん……だと……

「玉藻ちゃんは良妻です……」

「そうでしようとも！」

「なんか……みこーんつていいながら尻尾フリフリしてる……可愛い……狐でも飼おうか。

「フォウ！」

あれ、フォウ君じやん。紅蓮がかまつてくれなくてこちらへ來たか。

そういうえば紅蓮は、さつきから何しているんだろう。

「おそらく、精神世界で魔術の訓練でもしているのでしよう。」

「精神世界……？」

アルトリアが答えてくれた。

魔術にも詳しいなんて騎士様はさすがだなあ……

「彼は昔から、集中するときはああしていましたから。真似できる人物はおそらく、いな
いでしようね。」

⋮ 昔から？

おかしい。私は小さいときから紅蓮と一緒にいるが、紅蓮の周りでアルトリアのよう
な人物を見たことがないし、紅蓮もおそらくは初対面のはずだ。だというのに、昔か
ら⋮？

「騎士様、迂闊なことは言わない方がよろしいかと。」

⋮ そうですね、ご忠告感謝する、玉藻の前。」

「二人とも何か知ってるの？」

二人に聞いても、何も答えない。貴女は知らなくていいと、ごまかされてしまう。

令呪とやらを使おうにも、彼女らのマスターは飽く迄紅蓮だ。つまり意味がない。

⋮ そのうち知ることになるだろう。その時まで知らなくていいなんてことは、世の中
に沢山ある。だつたら今はほかのことを考えておこうか。

「アルトリアも紅蓮のこと好きなの？」

「いえ、愛しています。」

「えつどういう」

「反応に困ってしまう⋮ 真面目な顔で愛してるなんて⋮」

もしかしてすでに二人はできている？まさかそれが理由で私の告白を…

「誤解しないでほしい。私たちはまだそういうた関係ではないのです。そして貴女からの申し出を留めたのには他に理由があります。」

「なんで知ってるのかな!?」

あとまだつて何!?聞きたいことはあとからどんどん出てくる…
でも、ほかに理由つて…

「… それは、彼に聞くと言い。この特異点から帰ったあとでなら、答えてくれるでしょう。」

なるほど。それまではずっと不安でいなければならぬのか…
まあ、待つと言つたのも私だ。言葉に責任は持たなければ。

モーツアルトとマリーは、話こそしていなけれど、でも。ピアノを弾いていた。ピアノを聴いていた。これもまた、二人の英靈としての在り方なのかもしれない。
ところであのピアノ誰が出した？

「いや、あつたらいいかなと思つて…
「… なんでも作れるのね紅蓮。」

「このピアノすごいよ！僕の時代のものでは出せないくらいいい音が出てる！」

意外な才能を見つけたな… そのうち一軒家建ててそうだ。

そろそろ夜も更ける。皆が寝静まつたころ、私は少し目が覚めた。

… 普段はあまりこういうことがないので、知らず、私も精神的に疲れていたのだろう。

人影が見え、まだ起きている人物が誰か確認するため近づく。

… なんだ紅蓮か。

「なんだとは失礼だな… どうした、眠れないのか？」

そういう紅蓮も眠れないのか、尋ねると

… まあな。やっぱり慣れない環境つていうのは、寝心地が悪い。」

「そうだよね。いつかは慣れなきやなんだろけど…」

同意の返事が返ってくる。少なくとも紅蓮は、私と似たような考え方をしているようだ。

… 正直少し嬉しい。好きな人が自分と同じことを考えているというのは、こんなにも嬉しいことなのか。

今までなんとも思わなかつたのに、いつからかな。気づいたら目で追つて、気づいたら考えてて、いつの間にかずっと横にいたいと、思っていた。

なんとも言い難いが、うん。これもまた心地いい。

紅蓮は沈黙が嫌だつたのか、もどかしそうに話題を振る。

「そういえばさ、お前。玉藻に何の魔術教わつてたんだ？」

「なんか……回復？の魔術！」

紅蓮は驚くかと思つたが、少し考え方をして、

〔トレイス・オン
投影開始〕

「え？ 何してるの！」

取り出したナイフのようなもので、紅蓮は自身の腕に傷をつけた。

「いわく、どれほどの効果なのか見たいのだそう。

「馬鹿なんじやないの？ 全く……いいけど、二度としないでね？」

「わかってるよ、ほら早く。」

「はあ……」

えつと、魔力を流すときのイメージは……水道の蛇口だつけ？まあそれでいいか。それを捻つたら勢いが増すのを思い浮かべろつていわれたし。

……よし、手の感覚が変になつた。次に、自分の思う動きをすればいいんだよね。じゃあ、それっぽいので行こう！

「……え、もう一工程できるのか。」

「それが何かはわからないけど、うん！」

紅蓮はため息交じりに、

「やるじやん。これからもその調子でな。」

と、褒めてくれたし、次も促してくれた。

「でも、調子乗つていろんなことに手を出しすぎるなよ？」

と、釘も刺してきた。

肝に銘じます。：

心配をかけるためにやるんじゃないもんね。

「…ほら、そろそろ寝ろよ。明日は早朝から行こうと思つてる。体力はできるだけ温存しとくんだな。」

「うん。紅蓮も、無理はしないでね。」

「ああ、おやすみ。」

おやすみと、返事をして、私は寝ころび、目を閉じる。

… うん、今なら寝れる。近くに紅蓮がいるから。

立香が眠つたのを確認し、少し周りを見渡す。

「人いない。暗いところなんで目がきかないが、影がないくらいの判別はできる。

探すか？」

俺の張つた結界とモルガンの張つた結界の外側に出るというのは、サーヴァントにしてみればどうということもないのだろう。それでも心配なのに変わりはないのでこうして探すわけだが。

「……あら、あなたもこんな時間に散歩かしら。」

声がして、そちらの方へ近づく。確かにジャンヌオルタなら、ひとりでもどうということがなさすぎるな。

戦力として視れば、アルトリアよりも力になる。性格的には……あまり聖杯戦争には向かないだろう。それでもこういう、いろんな英靈に力を借りなければならぬ時だからこそ、ジャンヌオルタの存在は必要だろう。

「……ジャンヌ、誰もいないところに来て、俺を待つていた理由は、そうだな。種明かしは誰もいないときがよかつたんだろ？」

「フツ、何を言い出すかと思えば。まあ、あなたがそう思うならそうなんじやないかしら？ それでも、あなたの自信過剰な推理は的外れでしょうけどね。」

それで俺を煽つたつもりか。それは意味がない。煽りに関しては、中学の友達に鍛え

られた。並大抵の煽りじや俺は動かない。

さて、探偵の職務は探偵に任せたいといえるほど、俺の推理力は低いわけではないので、淡々と語ることにしよう。

ジャンヌが、記憶を失っているという虚偽の進言をしたことについて、だな。

まず想定されることは、記憶が無いということで、自分に関する情報を提示しなくていいということを考慮し、言わなかつたこと。もう一つは、自分の中にある記憶を相手に知られることで、自分が不利になる可能性があるということ。

そして、ジャンヌと関わったことでわかるのは、おそらく後者であろうということ。彼女は自分が不利になることを嫌う傾向がある。常に相手を見下した態度になつてしまふのはそういう性格からだろう。もしくは、ただ素直になれないだけか。どちらにせよ他人に本心を語ることは滅多にないと考えよう。

そして、嘘の理由は、いつだつて真実を裏に隠すためのものだ。真実。本人から語られるものほど信憑性のないものはなくなる。嘘をついたという前科があるからだ。しかし。

「それでも君の口からお聞かせ願おうか、ジャンヌ。」

「…仕方ないです。驚き過ぎてうつかり…死なないでね？」

…その程度で死ねるのなら、喜んで命を差し出そう。もつとも、命は一つしかない

が
。

驚いた。確かにこれは、死んでもおかしくはない。

「なんていうと思つたか馬鹿聖女。」

「な、誰が馬鹿聖女よ！」

そこまで驚くことではない。少しは驚いたが、心臓は止まりもしない。あたりまえだ。

未来で結んだ契約の記憶を保持したままの召喚なんて、うん。ありえなくはない。
ここまで引っ張つたことはむしろ謝るべきだろう。

⋮ 誰に？まあいいか。

ジャンヌが言うには、ほかのサーヴァントにも同様に記憶があるとのこと。そして、座にもおそらく俺との交流が記録されているらしい。
たくさんの英靈を呼べたのは、遠くない未来で俺が結んだ縁のおかげというわけか。

「それだけじゃありません。あなたがこれから先、関わる可能性があるというだけでも、召喚は成功できます。」

「可能性か…なるほど。」

俺がこれから先、出会うかもしれない、そして信じてもらえるかもしれない。それだけでも召喚がかなうということか。

それは…正直すごいな。聖遺物が無くとも召喚ができるというだけで驚きのシステムフェイト。そこに加えて可能性で呼べる縁。

俺は一体前世でどんな善行を積んだんだろうか。

「…私の感情は知られないわよね…？」

「何か言つたか、ジャンヌ？」

ジャンヌは首を横に振り、何もないといつた。

…いやまあ難聴系主人公ではないのでばつちり聞こえます。でも素直じやないのは好きになないので、彼女がはつきり言えたたらそのときまた考えよう。
考えること山ほどあるな。

例えれば立香についてなんだよな…

「…あんた、まだ決めてなかつたの？」

「てことはお前の知つてる俺は決められたのか…」

どうやらそういうことらしい。早く決めないと…
めんどくさいので、その問題は明日の俺に任せることにしよう。明日には明日のなん
とやらだ。

「ほらジャンヌ、戻ろう。」

「ええ。」

⋮ 自然に手を握らないで。恥ずかしい。

「クハハハハ！」

「帰れ。」

「共犯者よ。オレ達の召喚される理由を知つたようだな。」

勝手に夢の中入るのやめてもらえます？めっちゃ自然に人の夢入つてることさ…
厳窟王が俺の夢に入るのには、きっと理由があるだろう。闇から救い出す手を差し伸べる。彼はそういう性質だ。生前に助けてもらった経験が影響しているのもあるだろう。

「フツ、よくわかつているじゃないか。そんなお前に、アドバイスしてやろう。」

「頼む。正直どのことについて言つてくれるのかわからないけど。」

「愛は一つじじゃない。」

⋮ え、日本語でしかも自分の考え方つちやう？ありがたいのに変わりないけど大丈夫かそれ。

「⋮ オレは、かつて恋人であつた者に裏切られた。そこに間違いはない。それでも、オレの物語が始まるまで。確かに彼女を愛していた。だからこそ愛は、一つじじゃない。お

前もお前なりの答えを見つけるのだな、共犯者よ。」

そういうて、身を靄で隠し、闇へと消えていった。

確かに、エドモン・ダンテスとしての彼は、フェルナンという女性を愛していただろう。フェルナンもまた、彼を愛したとも。でも、それでも。

ちよつとしたきつかけで、愛とは憎しみへと変化する。憎しみはやがて、復讐心へとなる。でもそれは、裏を返せばそれほどまで興味を持ち、関心を持ち、気持ちの果ての行動をする。それもまた愛だと、彼は言っているのだろう……。そうだよな？

でも、それなら一つではなく、一種類、でもよきそうだな。なぜ一つといったのかも考えることにして……あれ、余計考えること増やされた？

朝が、来た。

サーヴァントとして、この地に呼ばれてから、こうして朝日を見れるとは思わなかつた。

ちゃんとした休息を取り、万全の状態とまではいかなくとも、それなりに体調を整えられる環境とは、とても大事なことだと改めて知る。

体を起こし、伸びをする。目覚めの良い朝ではないが、朝日を浴びるのはとても気持ちがいい。私が子供のころに、野で走りまわっていたころを思い出す。

「あれ、おはようジャンヌ。まだ寝ててもよかつたけど……」

「いえ、私は大丈夫です。」

いけない、人に心配をかけるなんて、私はまだまだ未熟であるとの証拠だ。もつとしつかりしなければ。

「そこまで気を張る必要はないよ。ジャンヌはそのままで十分しつかりしている。頼りにしてるさ。」

「あ、ありがとうございます。」

そこまで面と向かって真面目に褒められると、少し恥ずかしく思う。それでも、人の善意は素直に受け取ろう。その方が私のためになることもある。

他の人々も、徐々に起床を始める。最後の一人はグレンによつて目覚めさせられた立

香だつた。

軽めの朝食（ワイバーンの肉。朝から食べるには少々つらかったので少しだけいたいた）をとり、少し休憩をはさんだ。

「…さて、そろそろ行こうか。」

「はい、先輩。予定通り、敵の根城をたたきましよう！」

「…とうとう、私に、会いに行かなければならぬ。今までに向こうからやつてくるという状況だったのを、こちらから。」

本音を言えば、怖い。あれは、私の派生からできた、気持ちの一端だから。それを何かはわからないけれど、わからないからこそ、知りたくないと思つてしまふ。「わからないことほど追求したくないか？自分のことならなおさら。」

「…そうでしようか。私には、わかりません。」

「まあジヤンヌ。貴女は悩んでいるのね。…でも、きつと大丈夫よ。」

グレン…：マリー…：

そんなことを言われてもなお、私にはやはり、知りたくないという気持ちがある。

そんな中でも、私のもう一つの感情は。

皆さんにいるから、未来へ果てしなく歩み続ける彼らがいるから、共に歩みたい。共に知つていきたい。共に美しい世界を、汚い世界も、知りたい。

「それでこそジャンヌよ！フランスを救つてくれた、私たちの聖女様！」

そんなやりとりを済ませた後。私たちは歩を進めた。

「…あの、もう一人の、私。」

「何よ。あまり話しかけないでくれる？生娘が移ります。」

グレンと共にきたというもう一人の私。そんな私に聞きたいことは一つ。本当はもつとたくさんあるのですが、今は一つで十分です。

「あなたがグレンの元に召喚された理由は、彼を好きだからですか？」

「はあつ！？なな、なにをバカな！これだから馬鹿聖女様は…！」

そんな動搖しなくとも…

どうやら図星をついてしまったようだ。だつたら、カルデアには、私もいるのでしようか。

「…まさかアンタも…」

私は私を無視して、歩き続ける。後ろからは、燃やすという脅しが聞こえてくるが、それは彼女なりの照れ隠しだということを知っている。それに、今の私の顔は人に見せられるものではない。

生涯で初めて…すでに私は死んでいるのだから、生前から初めてといつた方がいいだろうか。まあどちらでも良い。私は、初めてのことで、それを自覚して。そんな顔を

誰かに見せてしまつては、私が正気を保てない…

「ジャンヌ。貴女、いい顔しているわ。」

「マリー… その、言わないで…」

「あら、フフフ、ごめんなさい。でもね？ 同じ相手に恋するなら、敵だもの。」
「こ」まで堂々と告白めいたことをされると、益々彼の顔を見るのを憚られる。

というか彼女、なぜ…

「私は恋多き人間よ、ジャンヌ？」

「恐れ入ります…」

流石は、国をも愛した人だ、といつたところか。私には、国を愛する気持ちがあつたでしようか。

… あつたの、でしようね。私の靈基には、おそらく、深く刻まれている。でも、その自信が私にはない。愛していたものを、失つてしまつたからでしようか。

「…ええ。そうね。失うことはとても、つらいことだわ。」

でもね、と、マリーはつづけた。

「本当に欲しいものだつたなら、本当に愛しているなら、もう一度手に入れたらいいのよ。」

全ての愛を手に入れるのもいいかもしないわね、と。彼女は語つた。

流石にそこまでのことはできませんが、その通りかもしません。いえ、その通りなのでしょう。私は今から、フランスというかつて愛したものを、正しいものにする。それはかつてのフランスを、取り戻すということ。

だから私はこの地に呼ばれた。

——行きましょう。今度こそ、救うために。

第9話

皆と一緒に、向こうのジャンヌオルタのいる場所へ向かうため歩く道中。そういうえばモーツアルトに、聞きたいことがあるなと思い、質問をする。

「なあ。あのときどうして、ついてくるのを嫌がった?」

「あー…うん、いいとも、答えるさ。一瞬。本当に一瞬だけど、マリーが、その。一人で残つて死ぬ記憶を見た気がしたんだ。それをもし、目の前で見たらさ、どうにかなるとおもつたのさ。君だって、好きな人が目の前で死んだら耐えられないだろう?」

「それはそうだな…でもそれは、俺が信用できなかつたということだろうか。」

「そういうわけじゃない。ただ、人間は好きなものを自分で選べる。だから僕もそうしただけだよ。」

なるほど。確かに一理ある。可能性が少しでもあるなら、それを排除しようとするのもまた人間だ。

「あの、質問よろしいでしようか。」

「…と、俺たちの話を聞いていたマシユが、モーツアルトに質問をする。
「…私には、選ぶ、ということがわかりません。だって、好意を持つべきものは道徳的

に正しいもので、否定するべきものは社会的に悪いものです。わたしはそう教わりました。そして、それが正しいと感じるのです。」

教わった……おそらく、教育的実験もされていたのだろう。カルデアの人間に都合の良い記憶を所持させるのが目的……というわけでもなさそうだな。機械的正しさを教えることに意味は果たして、あるのだろうか。

モーツアルトはマシユの話を聞き、マシユの正しいと思うものが何かを問う。マシユは返答に詰まりながらも、多くの生命を救い、多くの生命を認めることと答えた。

その意見には賛成だが、それだけではどうしようもないかもしれない。
だつて、抽象的だから。

「大雑把だね。じゃあ仮に、紅蓮君がそういう人でなかつたら？」

「それは……それもそれで、正しいのだと、思います。」

え、あの。勝手に俺を使わないでもらえますかクズ作家様。

「ほ？？それは、どうしてだい？」

「私は、先輩と過ごした期間はまだ短いですが、それでも、先輩の特性を知りました。悪意を許し、善意を促す。そんな人間だからこそ、たくさんのサーヴァントの皆さんには、先輩についていくのではないでしようか。そしてそれは、同時に正しさの証明になると、

私は考えます。」

「なるほどね……うん。なかなかいい答えだとおもうよ？でも、それすら正しいかどうかは、僕にはわからないけどね。」

自分が言い出したことに責任持てよ。

⋮ マシユのいう、命を救う。命を認める。そういうたものは、うん、とても難しい。だつて、単に救助活動をすればいいというものではない。

急な隕石を防ぐためにどうすればいい？みんな知っている、ミサイルを打つ。でも、それは一人ではできない。ミサイルを作るために、多くの人の助けがいるし、そもそも、ミサイルの作り方を知らなければならない。

多くの命を救うには、多くの人が必要だ。だから、前提が間違っている。

多くの命に、認められることも必要なのだ。

正解なんて、誰も知りえない。選択なんて、失敗することも多いだろう。だつて、最初からすべて正解できる問題は、楽しくないから。

さて、そんな変な話に付き合わされた俺たちだが、具体的な戦略を考えていなかつたこともあつたので、皆で話し合いながら動けるよう場所を整えた。

⋮ いいか、敵にはファブニールとかいう規格外ドラゴンと、狂化されているサーヴァントが複数、それから、ほかにも戦力が隠れている可能性もある。そんな中で、誰が誰

と戦うかつてことなんだが……」

「ファブニールは、俺に任せてくれ。」

「何言つてるの、私たちだけで十分よ。」

いやあの、神秘の差とかいう暴力は防衛だけで使つていただきたいんですがモルガン様……

とにかく。

ファブニールはジークフリートに任せよう。他にゲオルギウスも挙手したから追加で。あとは竜つながりで清姫と、エリザベートも。ああ、アルトリアも確か、竜の因子があつたな、追加だ。

：過剰戦力だし、正直あまり考えなくとも勝てるけど。

「玉藻と、マシユ、それからジャンヌとジャンヌオルタ。四人が打倒ジャンヌ組としようか。」

「そうですね。私は、自分のことは自分でなんとかしたいと考えています。その方がありがたい配役ですので、謹んでお受けします。」

：過去の自分を殺すのって、なんだか気が引けるわね……

「ふつふつふ、私の手にかかるばサーヴァントなぞ……」

「不肖マシユ、先輩とマスターを全力でお守りします！」

突っ込みは無し、と。ボケたんだけどなあ…

立香もなんだか、馬鹿にするように笑つてるし。全く…

マリーとモーツアルトは、できれば戦闘要員にしたくはないが、もし俺が対応できないようなサーヴァントが現れたら対峙するよう頼んだ。

とまあ、そんな話をしているうちにも、俺たちの目的地であるオルレアンには、近づきつつある。そのせいか、ワイバーンを多く目撃する。

「… はあ、つまらないわ。ティーテン、ティートン。シターンでも聴かせてくれないかしら。」

「喜んで、お姉さま！」

「謹んで、お姉さま！」

「… ワイバーンがいるというのに。九人がいるだけで何も近づいてこようとしない。

そんなものなのか神秘よ…

「まずい、サーヴァントの反応だ！君たちの方へ真っ直ぐ向かっている！」

「ここでけしかけてくるのか… よし、俺が行こう。」

「グレン、ここは私が…」

と、いいかけるアルトリアの口をふさぐ。

「… だつてこの後俺戦わないもん。戦わせろよ！

「…殺してやる…殺してやるぞ！誰も彼も、この矢の前で散るがいい！」

「おお…ここまで強い狂化をかけられるとは…」

「おそらく、本来狂化を受けるような…：竜の魔女の下につくようなタイプではないサーヴァントなのでしようね。」

本当に？見た感じアタランテだし、アタランテのバーサーカーつていたような…：ああ、バーサーカーといつても、あれは宝具だつたか。それに、ここにいるアタランテはオルタではないようだし。

じやなくて。

「楽にしてやる。せめてこの地での記憶を失ってくれ、アタランテ。」

彼女は、走る。最速の名はだてではなく、文字通りに速い。魔術でなんとか目視しているが、このまま見続ければ、目と脳、どちらかが焼けてしまうだろう。情報の処理が追い付かず、許容できる以上の情報を受け取り続ければ、パンクする。

…それまでにケリをつけろってか？骨が折れるな…：

アタランテ。ギリシャ神話に登場する女性英雄で、優れた女狩人である。アルゴナウタイのひとりだ。出生とかの説明は省くが、彼女はいわゆるアルゴナウタイとしての旅を終えて帰還し、数々の伝説・逸話？を残した。まず、アキレウスの父親ペーレウスとの競争で勝利。カリュドーンなる魔猪の討伐。そして最後に…：キュベレーの神域で

旦那と性行為。そののちライオンに姿をかえられたというのが通説らしい。やべーよな。うん。

そんな彼女は、アルテミスの加護を持つ。つまり、生半可な攻撃は通じない。
：まいったな。近距離武器以外は本当に扱えないぞ。：かといって近接をしかけようとしても、彼女は弓の名手。迂闊に近づけない。

とにかく、距離を詰めたい。足が速いこともあり、その場から離れられることも考えると、一撃で仕留められるほど近付かなければ。

こちらに幾度となく飛んでくる矢は、今のところ手持ちにある剣で撃ち落とせるが、このままではよくない。

「いいものをくれてやる、リンゴだ！ 食え！」

そう。リンゴ。林檎でもいい。

生涯の純潔の誓いをたてたアタランテが、なぜ結婚したのか。それは、競争で負けたからだ。なら、その男はアタランテより速かつたのか。否。ただ単純に、アフロディティーに祈りをささげた男が、黄金のリンゴを受け取った。そのリンゴをうまく使い、競争に勝つた。

その性質は、裏切らない。

サーヴァントというのは、生前の記録が信じられれば信じられるほど、効果が強くな

る。それはマイナスのことでもだ。だからこそ、聖杯戦争では真名を隠すのだが……うん、リング目掛けて走つてゐる。かわいそなことしたかもな……でも。

「捕まえた。」

「……そうか。ああ、それでいい。まつたく、厄介でどうしようもなく損な役回りだつた。行け、そしてあの竜を倒せ。ああ、私も次こそは……」

えつこれ殺さなきやだめか……ならせめて、魔力をなくすということで退去してもらおう。

「サーヴァントの反応消失！それと同時に、極大な生命反応だ！これは……オルレアンからファブニールが出発したようだ！」

いよいよ、か。

それぞれが事前に決めておいた配置につく。

多くの竜が空に飛んでいるのを確認し、動く。

飛翔しているワイバーンに向かつて笑うのは九人。それだけで十分牽制できるからおもしろい。それらを着実に倒していくのは清姫達。ファブニールにたどり着くまでの道を作つてゐるんだな。

「こんにちわ、ジヤンヌの残り滓。^私」

「……いいえ。私は残骸でもないし、そもそも貴女でもありませんよ、竜の魔女。」

大ボスの登場のようだ。

とりあえず、介入することはやめておこう。俺の出る幕はない。

立香は念のためマシユの近くにいるよう言つておいたので、安全だろう。

：俺も戦いたいなあ。

遠くから大きな爆撃音がする。よく見るとフランスの兵と、それを率いるジルの姿がある。

なるほど、百年戦争をもう一度しようというわけか。

両者がつぶれるというのは避けたい。しかし彼らは生きたこの時代の人間。死ぬはずじやなかつた人間を死なすわけにもいかないし……

よし。

「アルトリアとゲオルギウスはフランス兵の近くにワイバーンを近づけるな！それ以外はジークフリートをファブニールに到達させることを最優先に動け！」

「「「「了解！」」」

複数人から返事が聞こえた。多分ジャンヌ×3以外の全員は返事してくれただろう。遠いのと声が混ざつてるので、確認を取れなかつたが、ここから全員を視認できる以上、問題はないだろう。

：退屈だな。ジャンヌ達の近くに行くか。

「行かせるわけにはいかないかな。」

「… デオン。それに、ヴラドも。」

「貴公の血、私が頂こう。」

厄介だ。とても、厄介で困った。サーヴァントを一体ならまだしも、二体とは。しかし無様に命乞いをするわけにもいかない。向こうではサンソンがいるようだ。

… 終わつたというのは、話し合いが、だつたんだな。マリー。

こうして考えている間にも、二体のサーヴァントは俺との間合いを詰めている。

俺にできるのは時間稼ぎ程度だろうか。

いや、倒してみるか。

いつも通り、というにはまだ場数が足りないが、刻印に魔力を流し、神剣と聖剣を作れる。ヴラドの槍は突きにくるし、デオンの剣は斬りにくる。この二つの攻撃を、同時に、もしくは乱雑に受け止め、躰し、弾かなければならない。

なんで生身の人間にも容赦ないのかなあ!?

… 手加減されてたらそれはそれで怒り心頭な訳だが。

しかして、そろそろこいつらの本領発揮されたらまずいかもしねえ…

「そろそろ終わりにしよう… 血に塗れた我が人生をここに捧げようぞ

『カズイクル・バイ
血塗れ王鬼』

!!

「せめてもの餓だ… 王家の百合よ、永遠なれ『百合の花咲く豪華絢爛』
 「ままままままずいぞ紅蓮君!? な、なんとかしてその場から…！」

「うるせえドルオタ拗らせ天才医!!」

「ひどい言い様だね!? 微妙に褒められてるけど貶されてるからあまり変わらないよ!!」

とはいいつつ、どうすればいいのか考えるために時間を遮断するので手一杯だ。

…このまま逃げればいいと思うだろう。でもできない。なぜか。

俺が動けば周囲も動き出す。この欠陥結界の性質だ… 術者が止まるから時が止まる。単純で扱いやすい反面、危機的状況から脱出できるというものではない。

転移をこのまますればいいとも思うだろうが、それも却下だ。結局は動かなければいけないんだから。

一体どうしたものか…

動かずに盾を作ればいいのか。だつたら、元からあるものに頼ろう。

私の周りでは今、マシユ、玉藻、清姫が、ジークフリートが大きな竜にたどり着くまでの道を作っている。

清姫と呼ぶことをためらうような姿だが、それでも恰好いいと思うので、良しとしよう。

「リツカ、ぼうつとしていないで、マシユから離れないようにしなさい。」

同じような指摘をされたことがあるので、私はやはりマシユの後ろにへばりつく。ごめんよこんな頼りなくて……

事態は混戦を極める。

たくさんの竜に砲撃を続けるフランス軍。

それらを回避し、兵に近づこうとするワイバーンを倒すゲオルギウスとアルトリア。ファブニールの守りをしているであろうワイバーンは、だんだん減つてきているが、それでも視覚的に多いというには相違ない。

劣勢か、といわれれば、戦に慣れてない私はイエスと答える。

サーヴァントと呼ばれる存在の多くは、この状況でも怖気付くことなく、立ち向かっている。これを劣勢と、はつきり言うことは少し……お門違いかもしねれない。

紅蓮は無茶をしているのか心配をかけまいとしているのか、一人でサーヴァント二人を相手にしている。

： これは明らかに劣勢だろう、モニターで叫ぶロマンの声が聞こえてくるほどだ。

しかし、こちらにいるサーヴァントは、誰も手を離せない。どうしようもないといえるだろう。

： 紅蓮なら、なんとかする、そういう不思議な確信が、私にはある。
少し、目が合つた。そして、三人の動きが止まつた。

： ように見えてる、ではなく、止まつてるので。

周囲の草は舞い上がつてゐる。そこで、固定されてゐるように。

無理な体勢というような仰け反り方を、これはパフォーマンスだと言われば納得するが、いくら馬鹿な人間でも命の危機に瀕してゐる状況では行わないだろう。
そして、頭に一つの単語が、思い浮かんだ。

——令呪？

さて、これ以上に状況を整理しなければならない。私はこの状況が初めてで幾分かの緊張と恐怖に蝕まれていてるというのに、まともな思考をしなければ、この状況を打破できなのだ。

一つ。令呪と言う単語が、急に頭によぎつた。おそらく紅蓮が送つたメッセージか。
紅蓮の声だつたし。

二つ。あと少しで紅蓮は死ぬ状況ともいえる……これを冷静に語れる以上、私の精神は少しバグつた、といえるかもしねれない。

三つ。なにか守れるものが、あの間に必要となるだろうということ。そうでなくとも、外的要因によつてやつと、紅蓮はあの状況から脱することができる。
ならばすることは一つか。

「マシユ！ 令呪をもつて命ずる！ 紅蓮を守つて！！」「

すると、マシユは消えた。

そして、あたかも最初からそこにいたというように、向こうで紅蓮と共に、戦闘している。

： どういうことだらう。私にはまだ脳が追いつかない。

そして私を守る存在がいなくなつたということにいち早く気づいてくれたのはアルトリアだつたので、今度はアルトリアの背中にへばりつかせてもらうことになった。「リツカ。貴女の判断はおそらく、正解の一つだつたでしよう。あの状況でよく、判断ができましたね。」

「ありがとうございますアルトリア。でも、他の選択肢はわからないかな……」

今はそれでいいと、彼女は微笑みながら言う。

わたしにはわからない何かを、彼女はいくつも知つているということはわかつた。無知の知、とは違うけど、まあ。わからないということを知る、というのも大事だね。

戦況は一変した。

目の前に現れた盾を持つ少女、マシユのおかげだ。

正確には、立香の令呪で因果をゆがめた結果ここにいるマシユのおかげで、だな。

「先輩、指示を！」

「ちょっとした準備がしたい。時間稼ぎを頼めるか？」

はい！と、元気のいい返事をいただいたと同時に、さつそくとりかかる。
少しだけ話をして、俺は思い切り走り出す。

「させるか！」

と、宝具を受け止められたにも拘わらず、それでも俺の動きを止めるに来るデオン。伊達に狂化されてないな。しかし、俺の走る軌道上で邪魔はできない。

「はあ！」

「くっ！」

しつかりマシユが弾き飛ばしてくれる。

ヴラドが投げ飛ばした槍も、盾で防いだ。

俺が今していることは簡単なことだ。

足の裏に発火のルーンと複製魔術、その二つを混ぜた術式を描き、それを踏んだ地面に刻みこんでいるだけ。

たかが発火、されど発火。できなことはあんまりない。ごめん、結構ある。

そんなことはどうでもいい！走れ俺！

「マシユ、ありがとう！あとは任せろ！」

マシユが離れる。こちらをチラチラと見ながら、立香の元へ駆ける。心配してくれるのはいいのだが、こけそうになるなら前を見てくれ。

俺めがけてしつかり走つてくれる二体のサーヴァントに照準を合わせる。指先に魔力を集中させ、この間カルデアの車両に打つたものと同等の威力で、いや、それ以上で、ガンドを放つ。

「さよならの時間だ、ガンド！」

以外にもちやんと足止めできた。まさかサーヴァント相手にちゃんと拘束魔法として機能できるとは……これからも使えるな。じやなくて。

準備していた魔術を起動させる。デオンとヴラドの足元からは、炎が吹き荒れた。

加えてガンドで身動きが取れない状況。これ以上にチャンスはない。

「聖剣解放、神剣流転。大地を引き裂け。星を打ち砕け。伝説の始まり。世界の終わり。
導くは道化。^{destroy and create}もたらすは安寧。定める崩壊。破られる規則。どれもただ、斬り開く。
創造と共に破壊あれ。」

どうやら遠くで、彼が無茶をしたようですね。

二つの剣から極大な魔力を放つ。魔術師としてはありえない戦闘能力ね……このときの私の反応も、私が経験したからこそ、知っています。

「な、馬鹿な！あんなの、普通の人間ができる芸当じゃ……！」

「はあ。アンタ、目の前のこと処理しなさい？じゃなきや、死ぬわよ。」
睨まれる。当然である。自分と似た姿の人物がいきなり現れたかと思えば、味方するでもなく、まして敵対するなんて……ええ。私がもし向こうの私だつたなら、燃やすわね。

ああ、これが自分の黒歴史を覗き見る気持ちなのでしょうか。ここまで自分を恥ずかしく思つたことがかつてあつたか、いえ。ないわ。強いていうなら今この瞬間です。

……ああもう、イラつき過ぎて全部燃やしてやりたいわ。
……この時の私は、もうすぐジルに連れていかれる。それをわかつて、それでも挑発に乗つて、戦いを続けた。

全く目を当てられない。このまま燃やしてしまいたいとさえ思う。

……しかし、それではいけない。恥ずかしい思いをしてでも、彼の中に生まなくてはいけない感情があるから。

私が影響で生まれたのは喜ばしい。しかし、それを私ができないのが悔しい。過去の

自分に嫉妬をするのは情けないが、それでも仕方ないと自分の中の炎を抑える。早く終わらないかしら。

「お戻りあれ、ジヤンヌ！」

「ジル！」

「…ジル？」

あーはいはいこのシーンね知ってる知ってる… 白い私が戸惑うのも知ってるし、向こうの私が少し正気に戻るのも知ってる。

「まずはこの監獄城に帰還を！ 態勢を立て直すところから始めましょう。」「させるか!!」

「遅い！」

しまつたつい本音が…

少し場の緊張の糸が弾けた。今ならジル目掛けて…

「燃えなさい！」

「こ、これは…！ ああ、まさしく聖女の炎！ ですが、なぜ聖女が… 三人も。」

正直に告白しよう。

俺はあのとき、どうやつて邪竜を打ち滅ぼしたかわからない。

わからない理由を俺は知っている。いくつもの策を講じ、いくつもの試練を乗り越え、いくつもの可能性の中から、成功と言う一つの光をつかみ取ったにすぎない。

そう。必死過ぎて覚えていないのだ。

： 今のこの状況なら、できると踏んでいる。いくつもの戦意が渦巻き、それぞれが目的達成のために必死になつていて。

そしてここに、俺がいる。

時代が変わろうと、世界が終ろうと、あいつと俺が同時に存在するのなら、夢物語だつたとしても、結果は変わらない。

「黄金の夢から醒め、搖籃から解き放たれよ。邪竜、滅ぶべし！ 幻想大剣・天魔失墜」^{バ ル ム ク}
： これで俺の役目も終わり、か。

カルデアの少年： 彼もまた面白い存在だつた。目の前のことを的確に処理し、起こりえることを想定して対処する。

ふ、また機会があれば、彼と共に戦おう。彼の前に現れる邪竜は、俺が討つ。

不可解な点があつた。それが気になつて、正直考えすぎたかもしれないほどに。

それはたつた一つ。彼女の生まれた理由だ。

： 予想としては復讐と言ふ單語から、処刑されたときの感情から生まれたのではと

いうものだ。それなら炎を使うのもなかなか興味深いものといえる。

「なぜ私の邪魔をする？私の世界に土足で踏み込み、あらゆるもの踏みにじり、あまつさえジャンヌダルクを殺そうとするなど！」

「その点について、私は一つの質問があります。彼女は本当に、私なのでしょうか？」

「… 今更じゃないかそれ。彼女は間違いなく君だよ…」

「… そう、ですね。でも、それなら、彼女にするべき質問があります。貴女は、家族の記憶がありますか？」

「… ! それが、それがどうした！」

なるほど。牧歌的な暮らしをし続けたジャンヌという存在には、田舎で暮らしてきたときの記憶が多い。なら、それがジャンヌというサーヴァントの証明になる。その問いは確かに適している。それでも、記憶の有無はあまり関係ない。なにがあろうと、彼女の中にいるジャンヌという根幹は、揺るがないのだから。

「く、紅蓮君、こんな時になんだが、奥の方から大量のサーヴァント反応だ。」

「は？ どういうことだ… もしかして、ジル！ お前…」

「おお！ 私の術式はついに満たされたのでしょうか！」

「… この程度なら、量産できるわ。お前ら、屠れ！」

おいおいそりやねーぜ。これは… 冬木にもいたシャドウサーヴァントというやつ

か。

でも、この程度の数なら Gandalf でいいか。

「…なんてこと。全員うごきなさい！マスターの命令ですよ！」

「動けないんだからなあ… それともなんだ、令喚でもつかつて動かすか？」

殺すと言わんばかりに睨まる。

「今度こそ決着の刻です！」

「黙れ！ならば勝負だ。絶望が勝つか、希望が勝つか！」

「そこまでだ。二人とも、その必要はない。」

間に入る。この威圧感。今にも押しつぶされて燃やされそうだが、それでも俺は、口を開かなければならない。俺はどうも、争いごとを見るのは嫌いらしい。どうしてかな、こんなにもするのは楽しいのに。

「… ジヤンヌ。時代を超えて、新たにこのフランスに顕現した、別側面なる君、どうか聞いてくれ。俺たちカルデアは、俺は、この特異点を、この時代を、なにより君を否定しないで、君が望んだ I F 世界なんだから。それでも、どうか… これから先の時代を、一度は誰かに託してくれた。なら、もう一度… 俺に託してくれないか。君の復讐心も、憎悪も、一人で抱え込まなくていい。全部、俺が持っていくから。」

「… 戯言を。そうして、貴方もまた裏切るのでしよう？」

「その時はどうか、遠慮なく燃やしてくれ。それなら安心だろ？そのあとは何したってかまわない。世界を全て火の海にしても、誰も君を止めないさ。」

「… そう。あなた、馬鹿なのね？いい、いいわ。私をその気にさせたんだもの。地獄の果てまで、付き合つてもらうわよ？」

「いいよ。君がそれを望むなら、世界の果てまでもね。」

「いけません、ジャンヌ!!」

「… うるせえ、イカれた道化師。ああ、この場で最もふさわしい退去の仕方殺し方をしてやる。燃えろ。」

（

私たちカルデア一行は、無事に聖杯を獲得し、帰還する。
 何があつたのかは、彼が教えてくれたので、私の口から語ることにしよう：
 まず。あの時いたジャンヌオルタ。彼女はジルが生み出した、ありえない存在だつた
 ということ。

聖杯に一度、聖女であるジャンヌをよみがえらせることを願つた。しかし、聖杯は、万能の願望器はそれを拒否した。

それに怒りを覚えたジルは、それならば創造するしかないと、自分の思う聖女を造り出した。

それを聞いた白い彼女… ジャンヌダルクは、

「貴方が私をよみがえらせたとしても、竜の魔女にはなりませんでした。」
 と言つた。

無念の最後だつたかもしれない。それでも。祖国を憎むことはできない。そこに
 彼… ジルがいたから。

それでも、彼女が憎まなかつたとしても、ジルはこの国を憎んでしまつた。

神が許しても、人々がゆるしても、聖女が例え許しても、ジルが許さなかつた。

だからこそ、紅蓮はそれさえ許しながら、燃やした。

：燃やしたって簡単に言うけど結構なことしてるよね。

それでまあ、うまいこと聖杯を獲得して、皆で合流して。そのあとのことは私もいたので、ここからはその時のこと思い出しながらでも。

「お疲れ様、ジャンヌ。」

「ありがとうございます。手助けいただき、ありがとうございます。」

こちらとしては助けたというつもりはない。むしろ助けてもらってばかりだった。

マリーやモーツアルト、ジャンヌなど、現地で召喚されたサーヴァントは、退去の光を放つ。

「リツカ、素敵な旅を共にできてとても楽しかったわ！また一緒にできる機会があれば、

そのときはまたお話をお聞かせ願えるかしら？」

「もちろん、マリーちゃん。私も楽しかったよ！」

「マシユ。君は、君の正しいと思うことを見つけるんだ。きつとそれが、美しい音を出せるきつかけになると思うよ。」

「はい、考えておきます。アマデウスさん。」

そして、二人はともに消えていった。本当に仲良しだな。

「ああ、旦那様。わあたくし、さみしいです。」

「どうせ会えるので大丈夫です……カルデアにちゃんといらっしゃるので……」

「子犬！また会つたら、とびつきりの歌を聞かせてあげるわ！」

「遠慮する。俺の耳を壊す氣か？ そうだな……練習なら付き合つてやるさ。」

「二人のちいさな竜もまた、退去の光に包まれた。犬猿ではないが、それに等しい二人だつた。」

「すまない……最後まで一緒にいれなくてすまない……」

「そればつかりだなお前。いいけどさ。まあでも、ファブニール絡みの時は、頼りにするぜ。」

「私は、私の役目を終えた、のでしようね。ありがとうございました。皆さんのご活躍、忘れることは決して。」

「あはは、そんなたいそうなことはしてないけどね。ジョージおじさんまたね！」

笑顔で消えた……二人とも竜殺しの人には見えないんだよなあ……

「……私は、特に言うことはありません。さようなら。」

「お、おう……じゃあな、ジャンヌオルタ。」

「グレン、今回の一軒は、本当に感謝しています。もし、貴方に私が必要なときがあれば、いつでも呼んでください。いつでも力になりますから。」

「ああ、ありがとうございます。もちろん君のことも頼りにしている。そんときはまた、よ

ろしくな。」

片方のジャンヌはぎこちなく、片方のジャンヌは満ち足りて、退去を終える。

なぜだろう。一回の特異点で、敵がものすごく増えた気がする。味方になつてくれるつもりの人が多いはずなのに。

⋮ まあ、でも。

「私たちが、世界を救うんだね。」

「今更だな。そこまで大層に考える必要もないと思うが。」

「いや、一人ともすごいよ。慣れない環境だつたのに、適した対処をして、作戦もそうだ。うん。君たちはすごいんだ。もつと誇つていいよ。」

ロマンがなぜかべた褒めしてくるが、悪い気はしない。

⋮ 先ほどからジャンヌオルタと紅蓮は気まずそうにしているが⋮ まあ放つておこう。アルトリアもなんか笑顔で怒つてるし。玉藻はあきれてるっぽいかな。

⋮ そんなわけで、私たちは一つ目の特異点、オルレアンを無事救えた。
これからさき、こんなにも大変なことが、いや、これ以上に大変なことが待つているかと思うと、少し怖い。でも。

同じくらいに、楽しいこともあるつて思うと、私はウキウキしてならない。こんなことを考えるのは不謹慎かもしれないが、この程度浮かれることは許してもらいたい。

： そんなことを思案しているうちに、意識は遠のいていく。おそらくレイシフトを

始めたのだろう。

よし。

明日も頑張ろう。

第10話

： とうとう、やり遂げたんだな。

俺たちカルデアの一行は、第一特異点、オルレアンの聖杯を獲得し、問題を解決した。したのはいいのだが、問題はまだまだ山積みだ。これから先、あと六か所の特異点解決を目指さなければならぬ。

： カルデア関係者としての問題は、これがでかいが、俺個人の問題は、他にある。人間関係。この言葉だけであれば、ただ人づきあいが苦手なように聞こえるし、実際その一面は否定できない。しかし、そうではない。

オルレアンから帰るとき、問題が起きた。

「…ああ、貴方。待ちなさい。」

竜の魔女に、呼び止められる。うん、特異点の、ジルに作られたジャンヌオルタだな。その呼び声に反応して、なんだ、と尋ねる。少し遠く感じる距離だったのに、近づいた。

すると、胸元をつかまれ、

「忘れないことね、私と一緒に地獄へ落ちるのよ、貴方は。」

と言われて、唇を奪われた。

「…えつあお前退去で逃げるな！」

完全に消えきる前に何かを言つたようだが、そこは聞き取れなかつた。

「なぜだ。なぜいきなり、キスされたんだ。何気初めてだつたんだぞ。」

別にちゃんとしたシチュエーションでーとか言うような乙女ではないが、それでももう少し、何かあつたのではと言いたくなつてしまふ。

こちらに残っているジャンヌは、

「み、見るな！燃やすわよ！」

という照れ隠しをしていた。いつそのこと一思いに燃やしてくれないだろうか。今ならいい感じに燃え上がれそうだ。

「： マスター、あなたに告げなければならないことがある。」

アルトリアが、ものすごく真剣に口を開いた。眼も、見ているだけで委縮してしまいそうなほどに力がある。

俺にこの状況で告げるつて… いやまさか。うぬぼれるのも大概にしつくんだな俺。

「： これから先、貴方は選ばなければならぬ。一人を愛するか、それとも全員か。これは必ず、貴方の意思でどちらか選ばなければならぬのです。意味はわかりますね、

グレン。」

「： 立香だけか、全員か。だろ？」

彼女は頷く。

俺は俯く。

どうしろというのだ。

ということがあつた。俺個人での、大問題だ。

俺は今回の特異点で、いろんな人物とともに過ごし、わかつたことがある。
立香が好きだ。でも：他のみんなも好きになつてしまつた。

なぜこんなにも不誠実なことを確信をもつて言えるのか。それは、立香に對して抱く
気持ちが好きに変わり、その気持ちを「好き」と言えるのなら。

アルトリアにも、ジャンヌにも：もちろんオルタや、他のサーヴァントたちにも。
同じ気持ちを抱いていた。

しかし、やはりこれは不誠実だ。一人の女性に告白され、気持ちが曖昧だからと答え
を濁した。だというのに今度は、皆が好き？クズかよ。

：他人にならどんなに簡単に言えたことか。

こんなことをずっと考えていたおかげで、特異点から帰った後のロマニがいっていた
ことは頭に入らなかつた。

かろうじて聞いていたことと言えば、ひとまず、次の特異点が見つかるまでには時間がかかるらしい。

八月を少し経て、残る特異点は、六。今年が終わるまで、四ヶ月と少し。

：：間に合う、だろうか。

「ねえ、紅蓮つてば！」

「うわっ！立香!?」

しばらく呼ばれていることにすら気づかなかつた。

：：顔が近い。前までならこの程度で動搖しなかつたのに、今では心臓が落ち着かな
い。

「どうしたの：：？」

だめだ、目を見るのに精いっぱいすぎて、拳動不審になつていて。恥ずかしい。

：：言わなければいけない。しかし、覚悟はしなければならない。嫌われるというこ
とに対して。

「立香、話がある。これからいうことで、嫌いになつてもらつても結構だ。それくらいの
ことだから先に言つておく。この前の告白に対しては：：すまん。だが、俺はお前が好
きだ。」

「：：えつと？私が好きだけど、付き合うのは嫌なの？」

嫌なわけないだろ。でも、こればかりはどうも、立香に判断を委ねなければならない。

「俺が好きなのはお前だけじゃない。他の… サーヴァントの皆もなんだ。だから…」
「… 紅蓮。誰が、一番好き？」

「一番…？」

それは決めづらいな。

だつて、皆いいところにあふれているから。

一番長く一緒にいたのは立香だ。それは間違いない。でも、それだけで一番になる、
というわけでもない。

「よかつた。それを聞いて安心したよ。やっぱり紅蓮は紅蓮だね。」

どういう意味だ。俺は今馬鹿にされたのか？

立香は少し、こちらに近づく。身長が大差の無いせいで、顔が近くなるのが、早い。
「私はね、紅蓮。そんな貴方だから好きなんだ。」

そんな甘い言葉の後。良い匂いとともに、唇に柔らかい感触が伝わる。

… 勝手にキスされるの二回目なんですが。キスってそういうものなんですか。初
めて知りました。

「えへへ… 初めて、だね！」

「え… うん、そう、だね。」

ジヤンヌオルタにされたことは黙つておこう。うん。これは必要な嘘、だよな？
 ちなみに。余談なんだが。この場はもちろん。俺がずっとぼーっとしていた、管制室
 である。つまり、ロマニも、マシユも。アルトリアにジヤンヌも。モルガン達だつてい
 るし。玉藻が一番ニヤついてるのも見た。

：公開告白してたの俺！

いやまあ告白と言う文字通り打ち明けるという意味合いでは正しい方法かもしけな
 いけどこんな大勢に見守られながらみんなが好きだなんて言つちゃう痛いやつどう考
 えても痛いだけじやねえかていうか皆なんで黙つて聞いてたんだよロマニにいたつて
 はコーヒーめっちゃ飲んでるしマシユは自分も含まれてるのかめっちゃ考えてるし。
 いかん。頭の中でめっちゃオタクしてた。

嫌な予感がした。なぜなら目の前の立香は、いつも通り嫌な顔をしている。

嫌な顔と言つても可愛いのに変わりないけどね？

「まさか、そこまで頭が回らなくなるなんて、ねえ？でもま、そんな紅蓮も… 大好きだ
 よ？」

「やめろ改めて状況確認したのにそんなちゃんとみんなの前で言うなんてやめてください恥ずかしいです。」

： これでよかつたのだろうか。本当に、こんな選択で。

うん。これでよかつたんだ。少なくとも、これから、あのときこうしてよかつたと、思
えるようにしていこう。

「やるじやない、色男。」

「やめろモルガン。俺よりマーリンをいじってこい。」

「貴方といふ方が面白いわ。言つてること、わかるわよね？」

⋮ いつの間にそんなフラグあつたんですかねえ。

とにかく、いつたん自室にでも戻るとしよう。

ベッドに倒れこみ、しばらく身動きをしない。

じつと、このやさしさに包まれていた。

「フォウ？」

「… フォウ、お前はいいなあ。転身でもしたんだろう？ どうせ。楽だよなあ、過去のしがらみにとらわれず、自由に生きられるんだから。」

「フォウ…」

あいにくフォウ語はわからないが、傷つけてしまつただろうか。

「すまない、嫌味で言つたわけじゃないんだ。ただ、自由という言葉の響きは、人間にしてみれば、すごく憧れるものなのさ。」

うまく伝わったのかどうかわからないが、おれの顔に近づき、眠り始めた。

気は許されているのだな。

キヤスパリーグのくせに妙に優しい。暖かくて、つい一緒に寝てしまいそうだ…

「マスター、今、いいでしようか。」

アルトリア？このタイミングで？

：まあ、断る理由もないし、ベッドに座りなおしながら、中に入つてもらうことにした。

少し、アルトリアのことを、思い出そう。

アーサー王伝説や、それに関連した物語でよく出てくる、ブリテンの王、アーサー王。アルトリアというのはそのアーサーの幼名。

王としてとても有名で、ギルガメッシュュという最古の王よりも、日本ではなじみ深い。アーサーは、もともとは王家の子という自覚はなかつた。それでも、偶然の折に、剣を引き抜き、王になつた。彼／彼女は、なるべくして王になつたとも言える。

円卓の騎士は、たくさんの中から集まつて、団結し、たくさんの英雄譚を残していく。初めて本を読んだときに、王としての姿を残し、王としての在り方を魅せてくれたアーサーに、少なくとも憧れていた。

そして、第五次聖杯戦争。俺は彼女が召喚されたということを知つた。

：当時の俺はまだ幼かつたので、本当にただの興味で、アーサー王の存在を確認したかつた。その雄姿をこの目に収めたかつた。
だからこそ、驚いた。アーサー王が女性だつたことに。

まあ性別と言うのはそこまで重要な伝承ではない。神話においても男神だか女神だか決まつていらないやつだつてはいる。だから、性別なんて関係ない。

： 関係なかつた。

彼女の戦う姿は、美しかつたのだから。

「： どうかしましたか？」

「ああ、ごめん。少し昔のことと思い出していたんだ。」

アルトリアは詳細を聞かずにしてくれた。こういう優しさが自然と出せるから尊敬するよな。

そういえば、アルトリアは何の用でここに来たのだろうか。

「もう一つ言わなければならぬことがありますので。」

「待つてくれアルトリア。それはとてもじやないが： 心の準備が必要だ。」

「いいえ、待ちません。」

アルトリアは、とても強引に。しかしこちらに少し身を委ねるよう抱きしめてきた。

どうしよう。臭くないかな。帰ってきてからまだシャワーすら浴びることができない。

どうしよう。今日一日中けたたましく鳴つていた俺の心臓が、とうとうピークを迎える。

てしまつた。こんなにも密接しているアルトリアに、伝わらないわけがない。
どうしよう。こんなにも、恋というものは、人を変えてしまうのか。物凄く、胸がキュ
ンとしている。

：まるで乙女ではないか。どうしてこう、抱きしめ返すくらいの余裕も出ないもの
か。悲しきかな。

：グレン。私は貴方を、愛しています。」

愛されてる：

待て。落ち着け俺。幸福感に満たされて何も考えないほどの馬鹿になるな。

愛だと？この短期間で？少なくともそれは起こりえない感情だ。どれほど愛多き人
でも、それなりの期間を過ごさなければ、愛という感情が芽生えるはずが：
もしかして、軽い感じの愛？

「自分ではあまり言いたくありませんが、重いとりますよ。」

それは確かに自分では言いたくないな。しかし重い想いか：最高の駄洒落じやな
いか。

じやなくて。

では尚更、短期間で愛という感情が芽生えることに着目しなければならない。

「それは、貴方が自分で知ることになる。だから、まだ知らないでいい。」

前にも同じようなことを言われ、濁された記憶がある。

： アルトリアに対してもなんの疑問も持っていない。むしろ信頼マックスだからこそ、これを受け入れることができる。

しかし：俺は俺についても皆についても、知らないことが多いすぎる。

知りたいが、その時ではない：情報開示を待つゲームアプデ情報待機組の気分だな。

： いつまで抱き合っているのだろうか。

そりやまあ嬉しいのに変わりないんだけどさ。変わりないんだけどさあ。

好きな人とここまで顔が近づくのは、心が少し… 大分… 世界を揺るがすほど。はさすがに言い過ぎだが、落ち着かない。それに、彼女は今、俺の上に座る形で抱きしめている。

男子高校生には刺激が強いんだが!?

と、しばらく悶えていたら、扉が開いた。待つて恥ずかしいちゃんとノックしてくれまじで！

「マスター、話が… ああ、そのままで構わない。聞いてもらえるか。」
「… 士郎つて呼んでもいいんだよな。」

少々むず痒い様子で、渋々、嫌々了承してくれた。

というかこの状態で良いつてお前どんな鉄人だよ……俺だつたら扉開けてすぐ閉めて逃げるな。

さて、話があるというからには、それなりに重要なことなのだろう。世間話をするとき、わざわざ話があるということはあまりないはずだ。「聞いて欲しいんだけどさあ……」と言つて始まる話は、大体ノロケか自慢か。それなりにくだらない話が多いからな。

「君に話さなければならぬことはたくさんあるのだが……すべて話すには人がいないときが好ましい。今は最低限のこととを伝えておく。」

人に聞かれたくないような話なんて一体どんなスケベなんだ。きつと違うだろうけど。

というより、先ほどから士郎の話し方の方が気になつてゐる。カルデアに来る前の士郎は、もつと碎けた印象で、とても話しやすかつたのに。

でもまあ……エミヤから聞くには、士郎の成長した姿、らしいからな。落ち着いているのは最もな雰囲氣だ。

「君の魔力の核と、小源オードの仕組みについて、壯馬さんから伝えておくよう言われたことがあるんだ。」

……親父が、俺ではなく。知り合いの養子に。そうか……それほど士郎は信頼されて

いたんだな。

「君が落胆する必要はない。彼は、君に伝えるのが怖かつたのさ。私がもし同じ立場だつたなら、同じようなことをしただろう。攻めるなとは言わないとも。しかしその気持ちも、理解してやるんだ。」

それは構わない。というか諦めに近いな。

親父が俺に伝えなかつたことは今までにたくさんあつた。俺のために魔術の世界で奔走していたことさえ、去年知つたことだ。それでも、俺のためだつたんだから。

なら、俺は黙つて親父を信じて、自分で真実を探していくかなければならない。親父の考え方、理解しなければならない。

難題ではあるがな……

小源^{オード}。自身の中に存在する魔力のこと。それとは対照な場所にあるのが大源^{マナ}。自然と言ふか世界と言うか。が作り出す魔力。

この二つでどちらが大きいかと聞かれれば、当然マナの方である。

現代ではマナがほとんど枯渇しているため、化け物じみた魔術を発動させるのは難しい……まあ、靈子ダイブなんていうアホなことしたら、過去にいつたりだか別次元行つたりだかで、過去の化け物魔術を扱える。つまり特異点とか……うん。しかし、正直マナなんてなくても、オドで十分なんだよなあ……

「それが問題なんだ、紅蓮。」

問題？それはないだろう。俺の知る限り、オドだけで魔術を行使するのが現代の主流だ。三千年もさかのばれば、問題になるだろうがな。

：さて、親父の話でも聞こうか、人伝に。

私は、マスターに真実を伝える。

しかし、壮馬さんのことだ、きっとこれだけでもないと思う。

私の知らない、そして本人も知らないことってのが、たくさんあることだろう。

：あの人に關しては、また今度思い出そう。考えれば考えるほど時間がいる人だつたからな。

：待てよ士郎。そんなの、俺の起源が自然でないとおかしいくらいには変なこと言つてるつて自覚あるのか！？

「あるとも。だが、私は言われたことを伝えたまで。」

マスターがこうなるのも無理はない。私も初めて聞いたときは食つて掛かつたとも。
：しかし、彼は嘘をつく人ではなかつた。だから、マスターも私も、疑うことはできない。つまりこの、絵空事を信じ、生かすことが必要になる。

しかしさか、自身の魔力の核で、マナに匹敵する魔力を作り出せるとはな。存在するだけでは命が危ない。マナのなくなつた世界で、マナと同じ量を確保できるというのなら、魔術師の毒牙にかかるべく搾取される一方だ。

更に問題があるとすれば、その濃さ、だろう。

第五真説要素… 真エーテルに届きそうなほどとは。そのほとんどが魔力で構成されている英靈と言う存在においても、ありえないことだ。

「… そういうえば、士郎。俺は、触媒無しで英靈を召喚しているし、使役する英靈はほとんど俺からの魔術供給だけで活動している。これも関係あるのか？ もしくは、伝えられているのか？」

「それについては… すべてを語ることはできないな。」

しかし、一部を伝えることはいいだろう。それくらいは、許してほしいものだ。

太公望の一族は、第一から第五までの全ての魔法を扱える。これを彼に伝えることは簡単だ。でも、それでは意味がない。彼自身がそこまで到達する必要がある。

… そうでなければ、ならないからだ。

さて、真実を隠し、されど一部を伝えるにはどうしたものか。と、しばし思案する。不安そうにこちらの様子を伺う姿を見て、笑みが零れてしまつた。セイバーには笑われてしまつたが… 彼女は、私の知る彼女ではないのだろう。世界線が… おつと。これ以

上は話の脱線が過ぎるな。こんなことを考えているうちに、いいことを思い出した。

「AIN'T BELNの作り出した聖杯が、どんなものかは知っているか？」

「もちろんだ。第三魔法の一部をひっぱつてきた代物だよな。」

それならば話が早い。

英靈召喚と言うのは、元は偶然の代物だつたのかもしれないが、しつかりとした降霊の儀式として確立したのは、AIN'T BELN… 聖杯の製造者だ。そして、この聖杯の機能と言うのは、第三魔法を発動させること。その準備のために、英靈の魂を降霊する。それが私の（皮肉なことに実際参戦したのだから当然）よく知る聖杯戦争。

つまり、聖杯の力があれば、魔法を使い、英靈を召喚できる。

… 聖杯だけで魔法を使えるというのは極論なわけだが。

そして、私は聖杯を持つて帰つている。なぜか？ 賴まれたから。誰に？

「… 面白いことするじやねえか。そつから聖杯の中にある術式や、イリヤスフイールというお嬢様に教えてもらつた礼装の術式を、組み込んだつてわけか。」

普通ならば、それを作ることも、読み解くこともできない。だというのに、壮馬さんは、息子のためになると信じて簡単にやつてのけた。彼は… 根源を拒絶したのに。

まるで意味が分からぬ。脳が理解を拒んでいるのではない。俺がその領域に達し

ていない。

というか、ホムンクルスを使うとか人間の心ねえだろ発案者。

なんで魔法の領域の術式を使っちゃうの親父。親バカか？親バカだな。

というか…聖杯って…うん。壊れた戦争の勝者はいなかつたはずだ。なら、冬木にある術は満たされず、発動しないならば聖杯も顕現しないはずだ。というのに手にしたということは…

「…変質者を見るような目で見るな。ああするしかなかつたんだ。」

「…ロリコン…」

さて、親父のおかげで難題がもう一つ増えたところで。

「口マニ。時間あるか。片手間でもいい。」

「もちろん。好きなときに来てくれと言つたのは僕だからね。」

そんなわけで、堂々と医務室に入る。

「マスター、何か怪我でもされましたか。」

：まあ妥当だな。婦長だし。いてもおかしくはない。うん。

でも貴様だけはユルサン怖くつて三メートル以上は離れてもらいたい。

「何を言う愚患者め。僕はまだ、なにも手を下していないだろうが。」

アスクレピオス。何を隠そう、アスクレピオスなのだ。

彼を召喚できるだろうという予想は、ついてはいた。しかしここまで普通の医者で応

じるとは思わなかつた。

彼の話を知つてゐる俺としては、もつと… 治療することへの狂気じみた執着があつてもおかしくないと思うのだ。

それについては、バーサーカーの彼女にも言える。

「… 私の顔に、何か？」

「いや、バーサーカー特有の、意思疎通の齟齬や、狂氣を持つた異常なまでの治療に対する行動力が無いのが、不思議でさ。」

それに関する説明を、とロマニが前に出た。医者と看護師は書類を読み漁り始める。

ロマニの話を聞くに、俺と契約した英霊のほとんどが、靈基の性質が本来とは違つたものになつてゐるらしい。それは先ほどの二人も例外ではない。しかし、バーサーカーというクラス特有の「狂化」がないわけでもないのだ。

… どういうことかといえば、バーサーカーのヘラクレスがずっとまともに会話できるつてこと。意味わかんねえ… 第五次聖杯戦争の彼を見せて回りたいものだ。

でも、意思疎通を問題なく行えるのならそれに越したことはないが… 英霊として失うものもありそうだな。

「それについても検証させてもらつたさ。サリエリ君を使って、ね。」

と、万能の天才が言つた。いつの間に現れていつの間に実験したんだ…

サリエリ。本来召喚されるべきでない存在だ。そも英靈としての基準を満たしていない…と思う。

それでも、周囲の人間が語り継いだ、モーツアルトを殺した人物という伝承により作り上げられ、無辜の怪物としている。反英雄…だろうか。まあそんな英靈なわけだが。

しかし、彼の存在する理由である「モーツアルトへの憎悪」も、俺との契約により、相対しても発狂せずに済むらしい。だというのに、彼のスキルでもある無辜の怪物も、アヴァンジャーとしての忘却補正も、完全に効果が發揮されていた。

…訳が分からぬ。英靈として存在する原因が、隠れている状態なのに、それでも自信を失わずに存在するなんて。それこそ婦長に診せたいものだ。

「さて、本来の目的を忘れそだから、今のうちに話してもいいか？ロマニ。」

「もちろん。今は人に任せることができないって程でもないからね。」

そういうて、ロマニは俺に紅茶をくれた。

目的。俺が医務室にくるのは、ただ婦長の働く姿を見に来たとかそういうわけではない。当たり前だろ？いくら可愛くつてもそんなストーカージみたことなんて…じゃなくて。

「口マニ。お前は凡人だ。天才のようなことをするためにはどうすればいいと思う?」

「… それは、皆よりも活動する時間を増やすために起きる時間も増やすこと、かな。」

「それが問題なんだ。お前、寝てないだろ。」

「参つたなあ… 君にだけは悟られまいと、通信も最低限にしていたんだけど…」

「あれ、本当にそうだつたのか。候補の一つにあつたからひつかけただけだつたのに。」「あつれーおつかしーぞー? なんでそんな… まあ、いいけどね。」

「… 凡人は、天才に届くために、無茶をする。でも、今のお前にはそれはしてはいけないことだ。当然だがな。だつて人間の体で、魔術も使えないのに、天才と同じことをするためには体を壊すなんて… 馬鹿かお前は。」

「うう… 反論の余地もない。全くもつてその通りだよ。でも… そうでもしないと、いけないんだ。」

「だろうな。存在証明をし続けなければ、俺も立香も、死ぬ… というか、消えるからな。」

「… 悪いを通り越して、関心になつてきたね、君の知識には。その通りだよ。だからこそ僕が」

「その必要はもうない。」

「… え?」

レイシフトの仕組みってのは単純で、靈子ダイブを使って過去へ飛ぶ。飛ぶだけではその先の時代に存在しない人物を世界が除去しようとするため、存在証明をし続ける必要がある。それがカルデアの役割の一つ。

存在証明とは文字通りで、その時代に富んだ人物が、そこに存在することを証明し続けることだ。この作業は、とんでもなく膨大な情報の中で、作業をしなければならない。だからこそロマニは、不眠で証明し続けた。それも、たつた一人で。

凡人だからそうなる？なら、凡人でない者を頼ればいい。たとえ凡人しかいなくとも、誰かを頼ればいいのだから。

「…ま、そういうことだと私は思つてたよ、グレン君？」

【紹介】：はいいよな。ひとまず、俺の召喚したレオナルドだ。それだけでもう十分伝わるよな。』

ロマニは茫然としている。理解したはいいものの、もう一人の存在が不思議だったのだろう。

「私が呼ばれる理由もわからぬもないですが…。その。用途が違うのでは？」

「おいおい悪魔。それでも天才が作り出した理論かよ。」

眼鏡をかけた、天才によつて作り出された概念からなる英靈は、確かに自分は魔術よりも科学の方が得意だが…と、反論をしようとする。しかし現状彼が必要なのに変わり

ないし、彼自身も理解していることだろう。

「仕方ない。申し遅れました。私、マツクスウェルというものです。」

それだけでは足りないだろうがと、ちゃんと最後まで言わせた。

マツクスウェルの悪魔。いわゆる、無限に供給することができる永久機関の理論の一つ。正確には、熱力学第二法則を否定する理論。まあ、今の技術では実現できないのだが……

「僕は驚く元気をなくしてしまったよ……」

「そうか、急患か。」

「これは重症ですね、ドクター。」

勝手に話を進めないでとドクターが言つた。

「ところでマスター。私ができることと言えば本当に何もないのですがね?」

「はつ。端から期待なんてしてねえよ。お前にしてほしいのはあくまで補佐。科学に精通しててなおかつ英靈として存在する以上……お前ほど補佐に適した人物はいないからな。」

やれやれと言つた感じに、彼はレオナルドについていく。

次の特異点を見つけたという知らせが届くのに、十分もかからなかつたのはまた次の話だ。

カルデアに来る前に、紅蓮が私にくれたものがある。私は最初、ただ布に包まれた石かと思つていたのだが、それにしては…見た目に対しての重みがふさわしくない。そろそろ不審に思えてきたので、布を取ろう。

…なんだこれは…石だ。わかりやすいほどにこれは石の形をしている。

しかし、ただの石にしては醸し出す雰囲気が違う。

「あらあら、まさかあなたが持つていたとは…」

「あれ、玉藻。何か知つてゐるの?」

彼女は、少し悲しそうな表情を浮かべ、しかし話してくれた。
曰く。これは殺生石なるものらしい。

…殺生石だと?ならばこれは、前に聞いた、玉藻の最後の石ではないか。

しかしおかい。三つに分かれた殺生石は、もう少し小さいはずだ。それにもかかわ

らず、これは…所謂ドラマなどで思わず人を殺すのに使つてしまいそうな大きさだ。

「そうですね。この状態はまさに殺生石です。ですので、私がこの姿なのにも少しは説明ができます。」

なるほど……三つに分かれる前の状態だから……？

玉藻の前は、陰陽師によつて退治され、一つの石となる。やがて、その石が毒を発して人々や生き物の命を奪い続けたため、打ち碎かれる。

この、打ち碎かれる前の状態が殺生石だ。そして、英靈召喚というのには、その英靈にまつわる聖遺物なるものが必要だと聞いた。

しかし。

私は彼女が召喚された現場にいたわけではない。つまりこれを縁として召喚されたわけではないはずなのだ。

「……確かに。私は彼自身の縁を頼りに召喚されました。ですが、それでは説明がつかないこともあるのです。」

彼女は語る。召喚のシステムと思わしきことを。

： 私には少々難しかつたが、要するに。

九尾の姿で呼ばれるにはサーヴァントという枠では足りない。だから本来ならば最低でも三、最高でも三。無茶をしたり条件が整つて漸く九。つまり。なんの無茶もせずに九本そろつていることが可笑しいのだと。

と、謎に頭を抱えている二人の少女（彼女が少女と言える年齢なのか、また、私の年齢を少女といつていいのかはわからない）が頭を抱えていると、

「えっと、ボクで解決できるかもしれないね。それは。
… 誰だこのショタ!?」

と、私がものすごく驚くと、なんか怒られた。
… これがあのエルメロイ?なんか姿が…

「はあ… 召喚システムが甘いのか何だか知らないけど、自由に姿を変えられるみたいなんだ。自由と言つても、大人か子供かの二つだけね。」

ふーん… 正直どうでもいいと思つてしまつたが、そこはそれ。問題にはならない。

さて、この不思議な問題をこの彼は、どのように説明してくれるのか、楽しみである。「えっと、ボクが思うに、これはカルデアの召喚式… システム・フェイトは関係ない。彼の刻印… そう、魔術師の本命であり命と言つても過言ではない、魔術刻印が関係している。どんな術式が込められているかは流石にボクはわからないし知ろうとも思えない。それでも、召喚に関する魔術式があるはずだ。それこそ、生前の全盛期を最大限生かせるような、ね。そして、二次的な関係だろうけど、彼が作り出す魔力の量だ。これはボクや他のサーヴァントもわかっていることだと思うんだけど、彼は一人で大量のサーヴァントへの魔力供給を行つていて。この魔力のおかげで、玉藻の前… さんは、九尾の力をもつて、召喚された… かもしれない。そして、もう一つ。これは関係あるかわからぬけど… いや、あるだろうね。ボクは彼との人理修復の旅を数えきれない

ほどしてきた。多分他のサーヴァントもだ。しかしそれは実際に起きたことではなく、いわゆるシミュレーション。そして、今回の人理修復が本命。つまり、ボクたちサーヴァントは、明らかに経験を積んでいる。だから、力が積もった。つまりこういうことだよ。」

⋮
?

理解できない。隣にいる玉藻はものすごく納得している。なぜだ。なぜ納得できる。
そして私は、口止めを受けた。

このことは絶対に、紅蓮に教えてはならないと。

第11話

皆さんごきげんよう、わたくし、モルガンと申し……え、素性わかつてゐるからいつも通りにしろ?

あつそ。まあ別にいいのだけどね。

さて、私今……ちよつと苛立つてゐるの。理由はわかるかしら。

……なんのつもりですか。」

「なんのつもりと言われても……」

「わが夫。こんなやつは放つておけば良い。それより、他のサーヴァントを全て解雇しない。」

……私が、いる。

正確には私ではない。そう。こいつが知らない敗北した時代の世界の私。本人もそれを理解しているのか、その情報を開示することはない。

それでも、それが更に状況を悪化させるのです。

ああ……一体どうしたらこんなことになるのかしら?

「マゾエ。どう思う?」

「ええ… よく似ておられ… いえ、なんでもありません。」

私こんな顔してたの!?

： こほん。

まあ? 私たちは? サーヴァントとして契約しているわけでもないし。人様の関係に口だすつもりもないんですけど。

それでも、この苛立ちは収まる気配がない。理由はもちろんわかつて いるのだけど、まだ認めたくない。ああ、自分ながら、なんと難儀な性格なのでしょう。いつそ、世界そのものを幽閉しようかしら。

変なこと企んでるなと思いながらモルガンを見る。今度ぜひともやめていただけるよう説得しておこう。
さて。

先ほど、レオナルドとマツクスウェルから、特異点の観測を完了したと連絡があつたため、立香とマシユを呼び、それから

「うむ! 余の出番だな!」

「案ずるな、総て委ねよ。」

「ええ、行きましょう。マスター。」

： ローマ皇帝のお二人と、アルトリアを呼んだ。

なぜあの二人を呼んだかって？ とりあえずローマだしいつかなつて。後悔はしていない。反省もしない。

でも、王様三人か：

「四人ですよ、わが夫。」

「…え、来るの？」

断りたい。しかし断れば他のサーヴァント全員消されそう。

そして、彼女に刺激されてか

「当然、私を置いていくことは… ないですよね？」

一人で動けるのか。驚きだな。ずっと九人でまとまつてないと行動できないと思つたが… それもそうか。英靈でないなら、普通の人間… 妖精だよな。

第二の特異点。場所は一世紀のヨーロッパ。

「具体的に言えば古代ローマ。イタリア半島から始まり、地中海を制した大帝国だ。」「古代ローマ？ ホントに？ いいなー、行きたいなー！」

… カルデアに元からいたレオナルドは、うらやましそうにしているが、もちろんそれは叶わない。

大体この場で一番カルデアに残つておかなければならぬ人材なのに… それに、ローマの帝王とならいつでもお話できるからな。

まあ、いつかは一緒に旅するのもいいかも知れないが。

ロマニからたくさん説明がある。

初めに、今回の特異点は前回同様、どのような変化が与えられたのかも、どこに聖杯があるのかもわからぬ。まだ観測精度は足りないようだ。

こればかりは人材がいてもどうにもならない。

マシューは、「問題ありません、必ず先輩たちと見つけ出します。」と意気込んだ。

本当に後輩かあ？ ちよつと惚れちゃうぞ。

二つ目に、作戦の主旨。これもさつきと同じく、特異点の調査と修正。聖杯の捜索、そしてお持ち帰り。

正直、特異点の修正とやらは俺たちの手でした覚えがない。ほとんど世界の修復力に任せたようなものだ。だつたらすることは一つ。聖杯の持ち主を見つけ出し、場合によつちや倒して、持ち帰る。そういうお仕事。

「ところで紅蓮君？ なんでグランドサーヴァントのお方がそこに？」

「え、ネロってグランドなの？すげえ。」

「ふつふつふ。余を褒めるのは良いが、残念だな。それは余ではない。」

え、じゃあ…モルガン？

「違う！ロムルスだよ!!」

…信じられん。もう一人のロムルスは、ずっとローマっていうだけだし、こっちのロムルスも、差してかわらん。違ひと言えば、こちらのロムルスの方が、人間らしい話し方をすることと、見た目が神々しいことか。

…そういえば、靈基が根本的に違う気もするな。なにかこう…体の底を震え上がらせるほどの気配と言うか…

「それは彼がグランドだからだ!!」

「訂正が必要だな。私は冠位を捨てた後の私だ。」

うーん。全くわからん。

グランドサーヴァントっていうのがまず、何なのか。

ロマニの説明を聞こうと思ったが、すでに資料に書かれているのを読んでしまったので、それを思い出そう。

グランド。つまり冠位のクラス。その座に就くのは、セイバーから始まる七つのクラスそれぞれの、逸話も能力も高い英靈。そして、優れた千里眼を持っている。

簡単に言えば、そのクラスの最強候補の中から選ばれる、最強のサーヴァント。呼ばれる条件はほかにもあるらしい。それがビーストなる存在。

ただ、それがどんなものかはわからなかつた。詳細が描かれていないから、創造のしようがない。なので、これに関してはホームズなんかに任せた方がよさそうだ。どうせ薬決めてるだろうけどね……

「そういえばロマニ、シバだかトリスメギストスだかで、他の生物が敵対かどうかわからないか？」

「……残念だが、その技術はいまだ不可能だ……せめて、アトラス院に関わることができればね。」

「……それなら心当たりがあるな。」

ロマニはいつも通り驚く。予想していても面白い顔をするなこの男。

アトラス院には確かに心当たりがある。夢けど、夢じやなかつた。みたいな思い出だ。

中学生の頃に、「ここから出しができたら、この紙を上げます。」と、紫の髪の女性に言われた。しかし、それはいきなりのことだつたので、何が何だかわからなかつた。あたりを見渡す。エジプトだ。今まで訪れたことがなくとも、印象的な建造物であるピラミッドがそれを語る。時代はわからない。本当に俺の生きている時代なのか、それと

も……と、考へてゐる所、彼女は行くか行かないかを決めるよう催促してきたので、とりあえず入ることにした。

入り組んだ迷路のような場所ではなかつた。そのおかげか、すんなりと奥へ進むことができた。それが建造者の思惑とも知らず。

奥へたどりつくと、ある人物がいたので、話しかける。

「……あの。」

「（ご）苦勞。君が選ばれるのはもうわかつていていたことだがね。しかし、君は確かに運がいい。ああそうだ、これを持つておきなさい。それが正しい歴史に繋がるのだから。」

と、老人のような、若い女の子のような人物に、箱をもらつた。

どれもがいきなりのことで、質問をしようとすると、目の前の人物がいないことに気づいた。おかしいなと思いつつも、奥にある演算装置の様なものからデータの複製をしようと試みた。しかし、情報量が膨大過ぎたので、一部の機能だけコピーさせてもらうことに。

仕方なく、来た道を戻ろうと思つたら、うん。アトラス院の本領である、「去る者逃がさない」的なトラップが発動。死に物狂いで戦闘することになった。

トラップに会いながら脱出しようと試みた時間はおそらく十分ほどか。そして外の少女は

「…全くあなたと言う人間は。必ず演算の想定を越える。実際に面白い人間ですね。いいでしよう、こちらを差し上げます。約束ですかね。」

と、はにかみながら変な紙を渡された。

そして、次に会うのは海の上、とも。

この一連をロマニに説明し、その紙はあるかと聞かれたので、魔術で作り出した収納のための空間から取り出し、見せた。

「これは…間違いない。アトラスの契約書だ。」

契約書？セルフギアス・スクロール自己強制証明とは違う？意味が分からんな。

「アトラス院の人間は、これを持つ人物には、何があろうと協力せざるを得ないんだ。だから、アトラス院の人物は、これを渡すこと自体を嫌がるはずなのに…」

ふーん。それは問題なのか…

確かに、アトラス院のやつらに関わること自体ほとんどなかつたもんな…と。心当たりについて語つたことだし、そろそろ作業へ取り掛かろう。

「作業つて、いつたい何をするんだい？」

「トリスマギストスつてのは、アトラスの技術だ。見たらわかる。だから、複製した演算機能を…うん、トリスマギストスなら受け入れるとわかっていたとも。」

トリスマギストスの様子を見るに、どうやら情報の受け入れをしたようだ。それもそ

のはず。トリスメギストスは、あの時に見たトライヘルメスの分霊みたいなもんだし。

どう反応がかわるかは、実際使つてからのお楽しみってやつだな。

そんなわけで、それぞれがコフィンに乗る。フォウは何食わぬ顔で俺と一緒に。相変わらず可愛いなこいつは。

そして、アナウンスもやがて流れはじめ、俺の意識は飛んだ。いつになつたらこれに慣れるんだ。

あえて言わせてほしい。頭痛が痛いと。特に意味はないが、強調するためとどちらでもらいたい。

私もこれで三度目なんだけどなあ……やはり三半規管へのダメージが多い。紅蓮が言うには魔力に慣れていないから仕方ないらしいのだが。

「今回も、転移が無事終了しました。」

「ああ、そうみたいだな。」

紅蓮は慣れたのかそれとも隠すのがうまいのか、平然としていた。他のサーヴァント各位は、周囲の状況をしつかり確認する。流石は歴戦の英雄様だ、戦場慣れしている。「それにしても……過去つていうのもあってか、風も澄んでるし、緑の風景つてのもきれいだね！」

「そうですね。不思議です。映像では、何度も見たはずなのに。こんなにも鮮明度と言ふのが変わるなんて。」

きつとマシユは、感動している。今まで映像で、知識として色を知っていた。それでもそれは、実際のキャンバスではなく、線だけで縁取られた塗り絵の下書きだ。その無色の景色に、彼女は少しづつ色を書き加える。

きつとこの、壮大で無茶な冒険は、私と言う人間にも、マシユという人間にも、成長を与えていた。

とまあ尊大なことを宣ったところで。

「うむ、ここはまさにローマだな！」

「ああ、そのようだ。」

「いやそりやローマ目掛けてレイシフトしたんだから当然だろうが。」

「我あり、故にここはローマなり！」

「そんな暴論まかり通るか!!」

⋮ ローマ皇帝二人と漫才して現代人を眺めつつ、Dr.ロマンの話を聞く。

「空の光輪は相変わらず頑在、つと⋯⋯場所がおかしい。確かに座標を固定したんだけど⋯⋯時代はあつてるし⋯⋯うーん。」

こちらとしてはそれだけで不安がる材料が十分そろっているのを余所目に、ローマの

首都に向かうことを言われる。

曰く、この時代はまだネロ・クラウディウスの統治するローマがあるはず。近い過去に皇太后アグリッピナを毒殺していたとしても、未だ晩年の危急の時期ではないはずなのだ、と。

「ローマ皇帝、ネロ・クラウディウス。生まれたときの名前とは違うけど、それは紆余曲折がひどいので割愛。

彼ないし彼女は、暴君の皇帝として名をはせる。暴君と言わしめる要因としては、毒殺の回数、だけではないだろう。しかし、彼女が近縁の人物を殺害することが多かつたのは事実である。

自分の王位継承権の妨げになつたであろうブリタンニクス、母親であるアグリッピナ、妻であつたオクタウイア。少なくともこれらの人物は、ネロが直接毒を盛つたとも言われている。

それでも、政策そのものは、うまいこと国民を束ねられただろう。その偽りの光に闇が隠れていたとしても。」

「……先輩、マスター。遠くで、戦闘音が確認できます。」

「これは……戦争か？いやいや、ありえない。この時代にローマ近辺で戦争だなんて、聞いたことがないぞ。」

ごく小規模なもののはあつたかもしれないが、確かにロマンのいうことはもつとも。だとすればこれは、歴史のずれ。私たちが解決すべき問題だ。

「わが夫。^{デード}戦闘へ行きましょう。」

「ルビがおかしいだろあとなんでも腕組むんだ動きづらい。」

アルトリアは自然な足取りで、モルガンとは逆の腕に回った。しまつた。出遅れた。ここは前から行くしかないが、それでは流石に進むことすらできなくなつてしまふ。

じやなくて！

：ここまでふざけたことができるのは、強者だからか、馬鹿だからか。おそらく両方だろう。紅蓮の行動は馬鹿だなーとなることが多い。そしてそれに影響される英靈と言ふ存在ならば、こうなるのもわからなくも。：まで。その理論が正しいとなると、普段からイチャイチャしたいと紅蓮が望んでいるということか？

流石思春期男子：うん。これ以上はさすがに紅蓮に悪いからやめておこう。流石に冗談でも許される範囲というもの超越てはいけない。

そしてこれを当てはめるのなら、私も思春期男子になつてしまふからな、うん。良くない、よくないぞそれは。

とまあそんなことを考へていて、一部のメンバーはもう向かつてしまつてい

た。

「先輩、どうかしましたか？」

「ごめん、ぼーっとしてた！早く行こうか！」

後輩のように慕ってくれる彼女に心配をかけるわけにはいかない。変なことを考えていることを悟られるのもね。

「… 大きな部隊は「真紅と黄金」の意匠。小部隊も同じだが、何かが違うな。」「はい、その特徴を確認しました。これは…」

「その二つはローマで好まれていた色彩だね。マシユ、他に特徴は？」

ロマンの問いにマシユは、戸惑いを隠せずにいながらも答えた。

小部隊を率いるのが、女性だと。それも、ジャンヌに雰囲気が似た女性だ。

信じられないわけではない。どんな戦場においても、女性の戦士がいるというのも当然だ。戦えないわけではないからね。それでも、不思議な点があるかと聞かれれば、イエスだ。自分たちによほどの自信があるか、そうでもしなければ生きられないか、あるいは、無謀なだけの馬鹿か。どれかの理由でなければ少人数の部隊で、大人数の部隊に対し、果敢には挑まない。まして、戦場において武器があるといえど、男性と女性とでは筋力に差が生まれる。その差を埋められるほど技術があるならば、あの戦闘にも納得できるが果たして…

「馬鹿かお前は……あれはどう考へても、この時代のネロだろうが!!」
 「えええ!? 本当だ!! なんで気づかなかつたんだろう……」

私の注意力が低いことが露呈してしまふ……

とりあえず、微力ながら参加させてもらおう――

流石はローマ、それも第五皇帝の時代。武器は貧相なのにそれなりに鍛えられた肉体。とはいへ食事の環境はそこまでなのが隆々とはしていない。

それでも、剣の腕はそれなりにあるようだつたが。

「剣を收めよ、勝負あつた！」

この時代のネロが、自軍へ伝え、そして俺たちに感謝を述べた。ローマからの援軍かどうか聞かれたので、そうではないことも伝える。

：：： ここは嘘をつくべきだつたか？ 不審に思わせてしまつては、この時代でうまく立ち回れないかもしない。まあ過ぎたことだ、なんとかなるだらう。

ネロはマシユの戦闘について高い評価をした。その言葉一つ一つに俺は同意をした。あんなにきれいに峰打ちするなんてすごいしな。

本人も褒めていただいた礼をする。

「うむうむ。余の玉音に浸れる幸せをかみしめても良いぞ。」

それはぜひとも遠慮しておこう。こちとら嫌というほど王様に囮まれるのだからな。
彼女の提案により、ローマに入らせていただく運びとなつた。これは僥倖だ。問題の
渦中にあると思われる場所に入り込めるし、何より安全性が高い。

：：：近辺の戦闘に巻き込まれるのは嫌だからな。野宿はなんとしても避けたい。

「私がいるじゃない。」

「人間相手に通用しないよね神秘つて。」

通用しないわけでもないが：：：あまり期待はできないだろう。何せ平気で危険な神
秘を追いやるのが人間と言う生き物だからな。「この辺なんか危険なにおいするな：：
行くか！」と平気で突っ込んできて殺されたら、それこそ意味がない。だから、最初か
ら戦闘要員がたくさんいるような場所の中にいる方が安全というわけで。

「私がいればそんな心配など無用です。夫の危険を守れなくて何が妻か。」

「そういってくれるのは嬉しいが自分のことくらい自分で守れるし結婚してないよねモ
ルガン様！」

「グレン、彼女は私が知る限りでは少し頭が：：：」

「なんですつて：：：？」

「こらそこー、喧嘩始めるなー？

ともあれ、ネコについていくことにしよう。早くしないとあたりがボツコボコになつ

てしまうからな。

道中。すさんだ大地を行くところで、

「ところで、お前たち。異国の者に違いないだろうが、何処の出身なのだ？」

「答えるのは簡単だが説明するのが難しい……理論がわかる人間相手ならば説明は通じる。算数をしらない子供にこの国で一日当たり消費される小麦を聞いてもわからないだろう。それでも答えるならばそうだな。未来だ。」

彼女は驚く。それが真なら、難儀だと言われ、心配された。

「待て待て待て。勘違いするな？これは事実だ。君が何と言おうが、決定的な裏付けだつてできる。なぜなら理論がそこにあるからだ。ないものは確かに説明できないが、あるんだ。しかし……この時代の君に理解させようと思えば、それこそ二千年ほどを要

する。」

「ふむ……しかしだ、未来からの来訪者よ。それでは、どうやつてそれを証明してくれる？」

困った。裏付けできるとかいいながら、何も準備してない……未来予知みたいなことしても、それは意味がない。こちらが仕込んだと思われるからというのもあるが、それが歴史を変えるバタフライエフェクトになる可能性もあるんだ、下手なことはできない。

……よし、ロムルスにかけてる隠蔽魔術を解くか。

「……ローマ!!!」

「な……!?こ、これはどういう……！」

「とりあえずローマっていうのやめろや！」

ローマ帝国の始祖とも呼べる人物を……いきなり目にしたらそりや、信じるしかないだろ？ 多分。

てか、過去の人物を見せられたら信じるしかないだろう。いきなり現れるんだぜ？

……俺だつたら疑うかもしねない。

「……よかろう。余はお前の言う、未来を信じるとも。」

「ありがとう、物わかりのいいやつは好きだぞ。」

扱いやすいからな。

「お話はそこまでです。第二派、来ます！」

「余の盾役は任せたぞ！」

「…」

なんだネロつてば馬鹿なんだね！

敵兵との交戦というのは…楽しいと思つてはいけないのだろうな、うん。

アルトリアに待てと命じられて、とても退屈だ…ただ見ているだけの戦闘シーンは見ていられない。だからだろう、以前からバトル系のアニメや洋画というものは、じつとしていられなかつた。

「それは関係ないと思うのだけど？」

「妖精様に言われちや元も子もない…」

まつたく、このモルガンは素直に嫌味を言つてくるから反論もできない。それでも、変に隠されるとかは無い素直な性格なのは好感が持てる。もう少し棘がなければ…いや、それはそれで嫌だな。

肩に乗るフォウと、そこらへんの土（地面が乾ききつているので、多分崩したりして拾つたと思われる）を使って泥人形を作つてゐるモルガンと一緒に、皆が戻つてくるのを待つ。

「ちよつと、私は？」

「うーん……早く海行きてえな。」

「え……」

引かれた？ねえ引かれた？泣くか。

「別に紅蓮が見たいなら帰つてから部屋で着ても……いやでもなんか変態みたい……」

「うーん……」

「なんてこと考へてるんだ立香……」

なんて無駄なやり取りをしているうちに、戦闘は終わつたようだ。

「……なあマスターよ。」

「どうした？ネロ。」

「余はいつになつたら余に気づかれる？」

「絶対気づかれちゃダメでしようが……」

それもそうかと納得してくれるネロ。

この時代のネロに、サーヴァントのネロを見せるのは……なんかダメな気がする。

だつてネロだぜ。

「先輩……それだけで説得力があるのでやめましょ……」

「そうだね！これ以上はネロが泣いちやうもんね！」

実際ちよつとこちらのネロは涙ぐんでるし。

「マスター……我が子を泣かすとは……」

「いや直系の子孫ではないだろうに。」

「……泣いちゃうぞー……」

小声で言うなよ……悪かつたつて……

「ん。」

ん?

「ん!!」

無言で頭を出すな。どうしろっていうんだ。

「ふむ、その幼子は、撫でて欲しいようだな。」

この時代のネロにはどうやら、子供に見えるらしい……

それにも頭撫でるの? 後で怒られない?

……ずっと頭を差し出されるのも怖いので、早めに撫でておこう。

「ふ、それでよいのだ。」

「怖いわ……」

特にアルトリアとかモルガンとかモルガンとか立香とか。

……モルガン二人つてめんどくせえな!

早く首都つかないかな…

「… まずい、サーヴァント反応だ。」

へえ。楽しそうだからいいじやん。

… ネコと、近づいてきたサーヴァントが、会話している。

「… 我が、愛しき、妹の子よ。」

「伯父上…！」

なるほど、伯父か… なら思い当たる人物は一人だな。

しかし… こちらの時代に元からいるネコの反応は、少し違和感がある。元からこの時代にいた相手に接しているようを感じる。

つまり、彼はこの時代の人物ということになる。

だが、それでは矛盾が生じてしまう。彼からはサーヴァントとしての反応があるのに、この時代に実際に生きている…

意味がわからん!!!

「紅蓮君、それも確かに気になるが、今は先に戦闘だ！」

「それもそうだ…！」

「余の、振る舞い、は、運命、で、ある。捧げよ、その、命。捧げよ、その、体。」
だが断る、と言わせてもらいたいものだな。大体なんだ、振る舞いが運命？命と体を

捧げろ？はつ。

「お前は神になつたとでも言いたそだな？カリギュラ！」

「すべてを捧げよ！」

「…いいぜ、その傲慢さ。叩き潰すに値するつてもんだ。」

「… 前に出る。誰かの制止の声がする氣もするが、俺は無視して足に力を入れ、カリギュラの眼前まで飛んだ。」

「カリギュラ…てめえに一つ教えてやるよ。お前が王位に就いたのはてめえの威光じゃねえ…前任者がよっぽどだめだつたってだけだ。と言つても、そんなことはいわれなくともお前自身がわかつてゐかもしけんがな。」

「…汝の、言うこと、に、相違、は、無い。余、自身、も、それ、を、嘆いた。」

「…話し方に違和感があるが、これはバーサーカーということか…？」

「…だつたら今は半分まとも、といつたところか。」

「しかし、余が、成さねば、ならなかつた、のも、また…事実である！」

「紅蓮君！まずい、宝具反応だ!!」

「はあ!?この至近距離でかよ！」

「女神が…女神が見える…！」

女神… そうか、彼の狂気の原因は月の女神の恩寵。ローマで言うところのディアーノ

ナ神に心を蝕まれたというのが彼の伝承だつたか……！

宝具が発動するまで、あつても数秒ないなら今すぐだ。そんなものの防げるわけがない……よし、耳をふさごう。眼を閉じよう。それでなんとかなるとは思わないがやるつきやない。

「我が心を喰らえ、月の光ア！」

「…」

「何も聞こえんし、自分の変化が何もない……うん、予想通りだ。彼の宝具は攻撃するようなものではなく、精神汚染。周りの者にも月の女神の影響を与えようとする、といつたところか。

「残念ね、侵された者。彼とて恩寵を受けたものなのだから、そんなちんけなものが彼に届くわけがない。もつとも、彼の受けたのは、この私の、ですが。」

「あれれー耳ふさぐのもしかしなくても意味なかつたのかー!!」

できれば気が付きたくなかった事実だな……あんなに自信満々で耳をふさいで目を閉じたのに。

「なぜ……捧げぬ……なぜ……捧げられぬ……美しい、我が……我が……我が……我が……我が……」

「き、消えた……！伯父上……」

これは……靈体化か。ならやはり、彼はサーヴァントで間違いないようだな。

「気配は、もう感じません。敵方の部隊も引き上げていくようですね。」

……なるほど。今回の特異点での敵大将は、カリギュラってわけか。

「……なあ、マスターよ。少し良いか?」

「なんだ、ネロ?」

「余は……伯父上以外の皇帝の存在がいると推測する。なぜなら、余がそう思うからだ。

もちろん根拠などない。信じるか信じないかはマスター次第である。」

……なんだつて?